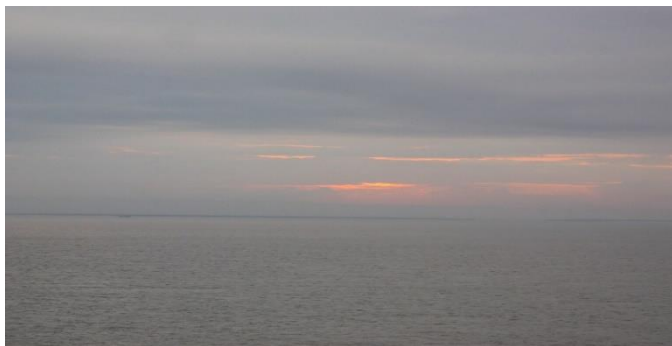


中国滞在記

海蝶大陸へ渡る

谷川修



蝶は、いつもよりずっと高く舞い上がり、うす雲の中を飛んでいた。はるか下にあるはずの海面はすでに見えなくなっていた。かなり長い飛行の間、けっして夢の中にあつたのではない。あれやこれやの想念がつぎつぎに浮かんでは消えていくのを追いながら、うつつであることを自覺していた。ふと下の方の景色が變わっていることに気づき、注意して見ると陸地の上を飛んでいる。地平はかすんだようによく見通せないけれども、大平原だ。野菜を育てるのだろうか、たくさんんのビニール・ハウスが見える。しかし、山なりの地形をした場所も乾いた土色で、四月の中旬だというのに緑は少ない。これまで暮らしたこともないような大陸に來たのだ。

やがて蝶はその地に降り立った。蝶にも入国の審査があつて、到着ロビーに出ると、おおぜいの人が出迎えている。そのうちの小柄な一人が、何かしら自分に近い感じのする名前を書いた紙を示している。海から來た蝶はすぐに、自分が老年にさしかかる一人の男としてこの大陸に來た——という夢の中にあることを悟った。

目次

序

第一章 瀋陽二〇〇七年

瀋陽その一 降り立った地、張家界旅遊

瀋陽その二 東北育才外国語学校での日々、中国の今と昔、盛京Ⅱ奉天

瀋陽その三 終業間近の日々、済南・泰山・曲阜への旅

瀋陽その四 別離、寄り道して大連へ

第二章 蘭州二〇〇八年

寄り道

蘭州その一 あたらしい出会い、黄河第一橋のある都市、西遊記

蘭州その二 北京再訪、蘭州滞在外國人一行、四川大地震、中国事情

蘭州その三 杭州旅遊、蝶の暮らし

蘭州その四 中原への旅、蘭州を去る

第三章 上海二〇〇九年

上海その一 海を渡る、上海交通大学での日々

上海その二 上海歴史探訪、己丑の革命六十周年、紹興に秋を尋ねる

第四章 上海二〇一〇年

上海その四 世界博覧会の頃、蝶の暮らし、変遷する歴史の中で

あとがき

序

人が旅に出るのはどういう時なのだろうか。芭蕉が奥羽・北陸へ旅立つた時、俳句を中心にした紀行文を書くという明確な目的があった。人の目指さない辺境へ向かうことは、その目的のための大事な要素だったろう。モンテーニユは、文明の輝く地イタリアへ旅した。ゲーテもまた、同じ文明の余光を浴びるためにその地へ向かった。その旅は、この二人を偉大な人物に完成させる一つの道程であった。さて、ただの蝶にすぎない者が、名だたる成功した旅を引き合いに出すのもおこがましい。しかし夢見る者の習性があがれを抱かせるのである。蝶の夢の中の男は、中国へ行く機会をとらえようとメールをやりとりした時、道元や最澄・空海などの留学僧の名まで挙げて、古来日本人の形成に力をかした文明の国に行ってみたいと書いた。主観的にはそういうことを考えていたのだが、中国に行くと知った知人のなかには、わざわざそんなところへ行かなくても言った人がいた。中国の文化に関心をもつ人は現代の日本には少ない。だが男は、漢詩に親しみ、司馬遷の描いた多彩な人物像に感心するような者だったので、同世代の人よりも中国を近しく思っていたのである。中でも陶淵明の詩に人生への深い洞

察がある、その生き方を学びたい、と考えていた。それが蝶を自由な旅へと導いた。

蝶の夢の中の男は、地方の小さな単科大学の教養課程で物理の教師をしながら細々と研究をしていたが、その立場は周縁的なもので、自分は食客にすぎないという感覚につきまとわれていた。潜在的な旅人だったと言えるだろうか。在職の後半には、いわゆる大学「改革」というアメリカ化が、教養が大事という標語を唱えながら、実際には逆のことを実施していった。言葉虚しくする状況は、言葉を取り戻すことを求める。しかし時勢に流される日本社会の縮図のような小さな組織はまた、恣意的な決定を強制するところでもあった。人間は、単なる手段ではなく、目的とされなくてはならない。為す術のない男はただ見ていてはいけないと思う、ついに、陶淵明のようにそこから去ることを決意した。最短詩形の俳句「五斗米を五合に変える人の秋」が、男の帰去来の辞であった。五合庵に寄寓した良寛の生活を選ぶことにしたのである。しかし、その決断はまだ旅に出ることとは違う。

それより前、旅へのいざないは、物理学会の季刊誌『大学の物理教育』の一文

にあった。定年退職後中国に渡った数学者のT先生が、大学で数学を教えたりして今は瀋陽の高校にいる、という体験談を語っていた。そこには、その高校の生徒は日本の大学へ進学することを目指していて、理科や数学を日本語で教えると言書いてある。そして物理の教師を探していると。中国の学生は熱心に勉強すると知っていたが、その学生は特に優秀だというのだ。たいへん興味深いやりがいのある仕事だと思った。おずおずと問い合わせのメールを出して、転身の模索が始まった。T先生は、定年を三年残して早期退職するのはもったいないから、定年まで待つことを勧められた。だが、心が離れたところを去る決意は変わらず、まだ中国へ行けるかどうか決まっていなかったのに、男は辞表を提出した。おいおい分かったのだけれども、中国の組織体では欧米や日本のように事務的に物事を処理する習慣がうすくて、職務を掌握する人の裁量が大きい。話は立ち消えになったかと思うほど置いておかれて、長く返事は来なかった。採用の連絡があったのは年末のことである。

こうして、職を辞して江海に住まう志を立てた蝶は大陸へ渡ることになった。

第一章 瀋陽二〇〇七年



瀋陽その一

降り立った地

瀋陽空港で出迎えてくれた人は上手な日本語で話しかけてきて、お互いに初対面の挨拶を交わした。東北育才外国語学校の副校長白老師である。一台のワゴン車に導かれ、学校所属の運転手とも挨拶を交わす。わたしたちはとぎれとぎれに話しながら、両側に柳とポプラが整然と植えられた広い立派な道を進んだ。やがてワゴン車は到着し、電動式の大きな門扉が開いて、これから暮らすことになる学校に入った。学校を囲む柵の外には、花をつけた桃と柳が並木をつくっている。ほこりっぽいのが日本人の肌にしっくりこないけれども、わたしはこの土地になじめるだろうと思った。

うわすべりに経過した諸事をたぐり寄せてみると、まず校内にある宿舎に行った。今日から暮す部屋で、事務的な受け入れ手続きが済むと、さっそくノートパソコンをインターネットにつないでもらう。次に、ここに来るきっかけをつくつ

てくださったT先生を紹介された。化学を担当しているM先生と、日本語教師のW、N、Mの三先生にも。数日後社会科学を担当するK先生が来た。日本人教師七人のうち男性はT先生とわたしだけである。宿舎にはほかに、アメリカ人の英語教師と中国人の夫人で医科大学の体育教師がいる。T先生に隣の校舎の教室や二三の教員室などを案内してもらう道々、わたしは感謝をこめて仲介のお礼を言った。今後出入りすることになる教員室では、中国人教師たちに紹介された。部屋にある風呂に入ってベッドに疲れた体を横たえたが、興奮気味でなかなか寝つけないまま一日目の夜は更ける。

三日目に、日本語教師の劉老師の通訳で、物理の女性教師林老師と授業の進め方について話し合った。すでに一通り習っている上に平行して林老師の授業もあるから、日本での受験のために、日本の受験対策用問題集をやってほしいのと。わたしは、自分の大学受験以来初めて、最も難しい問題まで解いてみせることになった。午後手始めの授業では、物理と科学の学習の意味などを話し、リリパット人がガリバーに与えた食べ物の量を例にとつて、物理量の考え方を解説した。よい反応がありうまくいったと思う。自己紹介では、わたしの生まれた一九

四五年が日本の中国占領の終わった年だから、そのことにも触れた。授業が終わると、三、四人の生徒が教卓のところへ来て質問。順調なすべりだしだ。放課後の五時二十分から六時まで玄関わきの大廊下で、日本語会話の実践的訓練として、生徒たちと日本人教師が自由に会話する時間がつくられている。なかなかよい場になっていて楽しかった。

四日目、葛校長に会う。かなり年長だろう。白老師が通訳しての会話で、会見という言葉がふさわしいと思った。丁重な応対であった。午後、白老師の案内で、東北育才外国語学校の母体である東北育才学校へ。ずいぶん広い敷地に立派な建物がたくさんある。天文台まである。こちらでは十人の生徒が数学・物理・化学を受講する。やはり日本の大学へ留学を希望する生徒たちだ。T先生が書かせたところでは、五人が東京大学、四人が京都大学を受験したいと答えたそうだ。

育才外国語学校の生徒は全員校内の寮で寝起きし、毎日運動場で朝礼がある。また、全校生徒での体操の時間がある。来て間もない四月に全校的な行進・体操の競技を見た。号令の下に一斉に小隊がリズムを合わせて動き、校長のいる壇の前に来たら手の振りを大きく足音も高く行進する。小学生の時から行進の訓練をうけているのだろう。昔、中国の一糸乱れぬマスゲームを、日本の報道が伝えて

いたのを想い出す。大人口の国の統治の手段として有効だったのだろう。改革開放後もその習慣が残っている、あるいは残してある、と推量した。

日曜日には初めて街に出る機会があった。中国東北地方には多数の日本企業が進出して、瀋陽にいる日本人の数は相当の数にのぼるだろう。日本の総領事館があることがそのことを示している。その中には、日本語教師として大学や高校に來ている人がいる。この事情から、瀋陽では毎年日本語弁論大会が開かれる。日本人会の主催で、総領事館が後援し、進行は日本人教師の会が受け持つ。他の先生たちについて行って、その弁論大会を見物した。大学生と高校生がさまざまなテーマで発表するのである。日本語学科の大学生たちの日本語はうまい。出場した高校生の日本語もそれに負けないほどだ。イントネーションはほとんど出来上がっている。若者たちの話題から、グローバルゼーションの中で、現代中国も多くのことで日本と同じ状況にあることが知られる。いじめや自殺といった話もある。経済と社会の激変の下、世界一の人口からくる非常な競争社会であることが、話の中に見える。一人の高校生は一人っ子政策に批判的な話をした。また、青年期らしく人生の意義や命の尊さなどという話題もあった。異境にあって人生につ

いて考えることになる。終わってみると、育才外国語学校の女子生徒が、高校生の部で一位と三位になった。一位になった生徒は、一年生の時アメリカにホームステイしたので、まだ一学年に在籍中だという。その子は三か国語を自由に話すのだ。わたしはただ感心するばかり。付け加えれば、文化担当のM領事のスピーチは、役人としては貴重な味のあるものであった。

こちらに着いた時には満開だった桃はほとんど散って、宿舎のそばに日本から持ってきて植えたという桜が四分咲きになった。気候のせいだろう、すでに葉も出ている。柵の外の道路両側の柳は花をつけ、レンギョウもまだ咲いている。春の花がいっせいに咲くのだと分かる。

わたしはいくらかの中国古典などを読んだことで中国に親しみを抱いて来たが、中国についての知識はたかがしれている。退職前後の多忙の中ではにわか勉強もままならない。それでも出かけるからには、現代中国について一定の視座をもっていないければなるまいと考え、竹内好の『日本とアジア』を読んだ。もちろんそれぐらいでは足しにならないし、そこに身を置いてみなければ分からないことが山ほどある。到着してから日々出会うことは、大小の驚きの連続であった。

学校は、瀋陽市を東から西に流れる渾河の南の渾南新区という開発区にある。ここには、大学や学校や企業体それに住宅群などが新しく配置され、なお道路や建物が建設中であった。瀋陽に着いて最初に通った空港からの高速公路の渾河南岸のランプ近くにはスタジアムが、そしてさらに北の市中心部へ空港からの地下鉄も造られつつあった。北京オリンピックのサッカー会場となることもあって、開発が進んでいるのだ。中国滞在が長くなるにつれて、どの省でも同じように開発が進んでいることを目にした。

到着翌日、M先生の案内で、一番近い店に生活必需品を買いに行った。その名も世紀路と名付けられた広い道路が走っているこのあたりは、区画がみな大きい。学校から歩いて二十分もかかった。そのコンビニエンス・ストアは、柵で囲まれて門には守衛のいるアパート群の入り口近く、一つの棟の一階にあった。最近日本で使われているマンションという呼び方は日本でもふさわしいとは思われないから、アパートと言っているのだが、ここはこぎれいで「唯美品格」と名付けられている。豊かな人々が住んでいるように見える。もう少し離れたところにも、同じように柵で囲まれ門衛のいる、もっと高級そうな一戸建て住宅群がある。

土曜日には、T先生について近くの環状高速公路のすぐ外の村に行った。村と

いっても、住宅はアパートになっている。その村の市場で、豆腐・野菜・オレンジ・椎茸を買った。ほこりとごみだらけの道の両側の店は安普請だけれど、まだ四月なのに西瓜やパイナップルなど豊富な果物が並べてある。貧しいと思われる、少なくとも道や店を改良することが遅れている村がある。ごみをどこにでも捨てるせいで、清潔好きの日本人にはよけいひどく見える。環状高速道をはさんだ内側には、設備の新しい企業群が建設されていて、富裕な家庭の子弟が近代的な教育施設で英才教育を受けている。格差は広がらざるをえない。中国の発展が大きな問題をかかえて苦勞しながら進んでいることを目の当たりにした。

瀋陽日本人教師の会の教師が招かれて、日本総領事館に行く機会があった。日本に留学した経験のある瀋陽市の大学人も招かれていた。公邸でのパーティーというわたしには貴重な体験である。教師会の人たちと少し話をした。外国の地でそれぞれ生きがいを見つけて、はつらつとしている。

公邸の玄関扉の上には菊の紋章があり、広い応接室のマントルピースの上には天皇皇后お二人の正装した写真があった。対外的に威儀を正した国家というものの表象である。瀋陽領事館は二〇〇二年に、北朝鮮から脱出して亡命を希望する

人たちが柵を乗り越えて入ったところだ。今はもともと歩道だったところにも柵を置いて二重にし、二度パスポートを検査されて招待者名簿と照合された。領事館という国際法上の特殊な場所のあり方も経験したわけだ。

張家界旅遊 —— 出されなかったメールの下書き

メーデーから始まる連休には、学校の五人の日本人教師で湖南省西部の張家界というところへ旅行に行きました。瀋陽の人たちのためのツアーに参加したので、夜遅くのチャーター便を利用するツアーで、料金は三五八〇元。張家界市の宿に着いたのは深夜です。まだ中国での生活にも慣れないうちに、ハード・スケジュールの旅行でした。

翌朝五時起床。猛洞河という溪流を合成樹脂製のボートで「漂流」しました。けっして風流な川下りと思わないでください。安物のレインコートを配布され、何人かは水鉄砲やひしゃくを買ったので、何をするのかと思ったら、別のボートの者と水をかけあうのです。それから、映画「芙蓉鎮」の舞台芙蓉鎮へ行きました。こちらは、その映画を観ていたので楽しめました。映画の主人公が歩いてい

た、両側に店の続く石畳の細い坂道はなかなか趣があります。映画「芙蓉鎮」を観たころ、張芸謀の「赤いコーリャン」などの中国映画を観たものです。陽がすでに傾いて、今度は鳳凰古城という町に到着。この地の二人の作家の記念館などを見物して歩きました。今は観光客相手のみやげ物店が並んでいます。ここは古来漢族の最前線で周辺諸族からの防衛拠点だったそうです。何百キロメートルにも渡って長城があったということで、遺跡が残っています。沱江という川に浮かんで、古色を湛えた町の風景も鑑賞しました。岸辺の筏に少数民族の衣装を着た三人の若い女性が、澄んだ歌声を聴かせて旅情をそそります。疲れてその夜は、ロシア語入門書を読むＴ先生をおいて先に眠りました。

次の日も早朝五時起床。二百キロメートル余り走って張家界国家森林公园に着。世界遺産のようです。昼食後、公園入り口から黄石寨という山の上まで登りなさいといって、四時間与えられました。きつい山道です。南大門というところで、わたしは四人の仲間から脱落しました。再びツアーの全員が揃ったらまた行進。両側にそびえ立つ岩壁の間の、とても深い谷の底の林間の道を進みます。すばらしい遊歩道です。その美しさを称えてここに書き記すべきところですが、疲

れが情感を削ぎました。二時間近く歩いて着いたところに乗ってきたバスはいません。連休を利用して来た観光客でごったがえす乗り場で、延々と循環バスを待つことになりました。この森林公園一帯は一般のバスの乗り入れは禁止なのです。つぎつぎにバスが来ても乗れないので人々は殺氣立っています。

今日も五時起床。その名も龍天梯で溪谷の上にあがりました。断崖につくられたエレベーターで、景色を見ながら二三〇メートル近く一気に登るのです。中国は観光のためにすごいものをつくります。バスで少し走り、天下第一橋というあたりを歩きました。中国の山水画に描かれている大きな柱のような岩山が本当に目の前にあります、視界に入るだけでも数十本も。そして歩いている小径の足下には、二百メートルもある深い谷です。バスとそぞろ歩きで天子山索道駅まで行って、今度は高くて長いロープウェイで、新緑の森を見ながら山を下りました。さらに、トロツコ列車で、十里画廊と名付けられた小溪流沿いの景色を楽しみました。地図を見ると、昨日から張家界森林公園の主要な場所を巡ったようです。これまで見たこともないスケールの石灰岩質の地形、山と谷と溪流を満喫しました。国家的な規模の資金がつぎ込まれて公園が整備されていると見えます。公園内を巡るのによく設計されていると思います。残念なのは、連休で繁華街のよう

に観光客がいたことと、ツアーが強行軍だったことです。ツアーですから、このあと薬屋と茶店にも寄ったのですよ。武陵源という町のはずれにある昨日と同じホテルに泊まりました。ホテルの門を入ったそばにある按摩の店は封印されて、公安当局の公示が貼ってありました。四月末の日付です。風俗営業上の問題でもあったのでしょうか。

翌日は少しゆとりがあって宿を七時半に出発。午前中、小さなしかし静かで美しい宝峰湖というところと、とても規模の大きな黄龍洞という鍾乳洞を見物しましたが、その話は端折りましょう。昼食をすませると、オプショナル・ツアーに行くという話が出てきました。ところがT先生がガイドによく聞くと、われわれのバスは初めからその予定を組んでいて、それに参加しない者は置いて行かれるというのです。結局、最初の料金に入っていなかった三百元を払いました。天門山というところに行くのだそうです。バスは武陵源からだいぶ時間をかけて張家界の町に戻り、なぜか大きな建物に着きました。言われるままに四階まで上がると、ロープウェイの乗り場でした。乗ってすぐに判明したことは、とんでもないことに、市の中心部から向こうに見える独特な山形をした山まで、延々とロープ

ウェイが続いているのです。家々の屋根の上を進むうちに、左手にまだ建築中の近代的な駅舎が見えてきました。このロープウェイも二年前に出来たものということ。省か市が大きなお金をつぎ込んで観光のための諸設備建設を進めているのだと思われます。ロープウェイの距離は七千メートルを超え、標高差千二百メートルという世界一のものだとガイドが言いました。今の日本ではこんな規模のものをもう建設できないでしょう。

山の断崖や山容を鑑賞しながら進むと、ヘアピンカーブの連続した道路が下に見えます。九十九曲がり、箱根のいろは坂など比較になりません。山上に着くと、奥に見えている禅寺に行くほどの時間もなく、しばらく張家界市やまわりの景色を楽しんだら、また下りに乗りました。ところが、途中の乗降駅で降りてバスに乗せられました。このバスは先ほど見えていたスリル満点の連続カーブを運行する専用バスです。それほど広くない道を運転手は、十分速度も落とさずにバスを進めます。危険だと感じるほどに。

バスが着いたら、とどめの驚異が待っていました。駐車場そばに祭壇らしきものがあります。そこから見上げるとはるか上の方に、天門山という名の由来であるそびえたつ巨大な岩の門。山塊のはるか遠くからも見えるほどの門です。数年

前、その穴を飛行機で通り抜けた者がいたそうです。天の門へは、横幅十メートルはある石段がまっすぐ急傾斜が続いています。K先生を除いて他の人たちが登り始めたので、どこまで登れるか分からないけれど、わたしも後からゆつくりと登って行きました。ずいぶん疲れているから用心しながら休み休みです。やつとたどり着くと、眼下に田園があり、対面する山々の連なりがあります。仰天するほどのものはないものの、天を仰いで何か達成感を感じました。

石段の幅がそれほどないので、下りはがくがくする足で急傾斜の石段から転落しないように注意が必要でした。わたしはK先生に、天の門の向こうを見たから思い残すことはないと言つて、疲れを癒しながら考えていました。たまたま中国に来て暮らし、こういう旅行をしているのも人生の一部である、天の門を眼前にしながら生きているという気持ちをもっているのがよからう、得難い時の中にいるのだと。いったい石段は何段あったのか、みやげ物店の一角にいる案内人に「几梯？」と紙に書いて尋ねたら、「999」という答えが返ってきました。おもしろい数にしてあります。もう何段上がる階梯がわたしに残されているでしょうか。

その晩瀋陽の学校の宿舎に帰りついたのは、日が改まり夜明け前の三時である。眠りの中にあつたこの建物の管理人楊さんを起こして、戸を開けてもらった。外来の日本人が遊んでいた間、五・一労働節の休暇中も下積みの人々は働いていた。学校もこの期間に壁塗りなどの内装工事をしてあつた。湘西土家族苗族自治州の農村の人々は、日頃とあまり変わらない生活を送っていたように見えた。田植え前の農作業で、牛で田を耕している姿を見た。それは日本の五十年前ぐらいの暮らしぶりかもしれない。ただ他方では、どの家にもパラボラ・アンテナがあつたから、テレビをはじめ現代の生活様式が入っているのも確かだ。わたしの短い観光旅行では正確なことは判らない。

瀋陽その二

東北育才外国語学校での日々

育才外国語学校は東北育才学校の姉妹校として、しかし日本の京都の学校が出

資して設立された中国でも珍しい私立学校である。高額の授業料が払えて優秀な生徒しか入学できない。日本の学校が経営しているが、育才学校とのつながりは深い。葛校長や白老師は育才学校からこちらに移ってきたという。他の老師はたいてい若く、女性教師の方が多い。大きなお腹をして、一、二か月うちには生まれるという人も教壇に立っていた。わたしが今担当している三年生までは日本の高等学校と同じく三年制だったのを、今の二年生から中高一貫の六年制に変わったのだそうだ。すると、わたしがお相手をしている生徒たちは、二年半であんなに上手に日本語を話すようになったのだ。物理を日本語で聞いて理解できるほどに。

毎朝早く起きて運動場で朝礼をしたら、そのまま食堂に行き朝食をとる。朝食後正規の課業が始まるまで教室で自習した後、授業は夕方四時半ぐらいまでであり、日課が終わってから自習時間がある。そのあと夕食を食べたらゆっくりできるのではない。夕食後また教室にもどり自習をする。毎日たいへん長時間勉強しているのだ。わたしたちの宿舎の向かいの建物に浴場があつて、それぞれに割り当てられた日に生徒たちが利用する順番を待っている姿があつた。これだけ多数の生徒がいるから、日常生活は快適とは言えないようである。椅子を置かない食

堂で立ったまま食事する。浴場もシャワーだろう。こういう学校生活をこなしていくほど、生徒たちの目的意識は高いと言える。

土曜日には学校のバスで市中心部へ出て、親のもとに帰っていく。土曜日曜が生徒たちの羽を伸ばす日だ。彼らと話していて、けっこう多くの情報を得ていることが分かる。たいていの生徒が小学校の時から評判のよい学校に行き、塾に通っていた者も多いのだが、日本のアニメはよく見ていて漫画から日本の知識を得てきたようだ。それに、高校生になってからはインターネットも使って、いろいろな情報を知っているのだ。

五月の中旬に、一時限目の授業をつぶして三年生の卒業記念の写真撮影があった。記念写真だからと思ってネクタイをして行ったら、葛校長はジャンパー姿であつた。T先生は留守だったからわたしだけがネクタイをしていた。隣に座った日本語教師の王老師は長いスカートで装いがいいので、この記念写真のためにおしゃれをしてみましたかと尋ねたら、わたしはいつもこういう格好ですよという返事だ。M先生の話ではたしかにそうらしい。自家用車に乗って通勤しているとのこと。夫は銀行員で、娘は名古屋大学に留学し日本で就職しているそうだ。彼

女が撮影の合間に言った。「わたしはあと二年で学校を退職できる。自由になる日を待っている、朝七時から夕方まで働くことから解放されるのだ」と。わたしもこの三月で退職したと応じて、話題が年金をもらえる定年のことになった。女性はいは五十五歳で、男性は六十歳から年金が出るのだそう。どうりで中国で働いている人は若く、たくさんの方々が公園などでゆうゆうと楽しんでいるのだ。日本の年金支給年齢が段階的に六十五歳まで引き上げられつつあると話したら、中国でもそういうことになるのを懸念していた。

卒業写真を撮ったけれども卒業式はないままに、六月の上旬に正規の授業は終了したようだ。その後も補習授業がいつものように続いたので、その節目は分かっていなかった。わたしにその変化が分かったのは、これまで自転車で出向いて教えていた育才学校の生徒九人が、こちらの学校の寄宿舎に移ってきたからである。これからは、彼らも外国語学校の生徒に混じって授業を受ける。十月には京都にある学校に行つて、日本の大学の留学試験に備えるのである。大阪にある別の学校に行く生徒たちは授業に来なくなつた。

六月の中頃のある日、朝七時過ぎ、正門前あたりでおおぜいの人の声が聞こえた。今日はたしか入学試験の日だ。クーリーニングに出していた衣類を取りに行く

ついでに、門の外に出てようすを観察した。父母が自動車などで子連れで来ている。小学六年生はもう背の高い子もいる。いつか生徒が東北人は背が高いのだと言っていたことを想い出す。門のところにいる白老師に聞いてみたら、百五十人の募集に対して千二百人の応募があったそうだ。試験は英語だけで二時間ということ。小学校の卒業生に英語の試験を課して選抜するのだ。人気は高く優秀な子たちが来るといふ。中国の受験競争も厳しいものがある。それは社会に一定の影響を与えずにはおかない。この子たちの家庭は、子を私費留学させることができるほど裕福なのだ。格差は存在し、拡大するだろう。

十冊足らず持って来た書物のなかに、岡田英弘著『中国文明の歴史』を含めておいた。一つ二つ読んだ中国歴史の記憶もうすれていたもので、もう一度復習しようと思ったのである。短い新書のせいか、結論的な言い方が力強く感じられた。今まで知らなかった見解も多い。従来の中国歴史の書物で言われなかったことも書かれているのだと思われる。中国の都市が市場を原型とし、王城はその市場を主宰する者の居場所だったという見方はおもしろい。わたしは到着二日目に「唯美品格」と名付けられたアパート群の区画を見たとき、アメリカのような格差社

会で富裕層が隔離された場所に住んでいるのかと誤解した。ところがその後バスで街を通るたびに多くの「花園」を見た。T先生が、中国にはたくさんのお花園があるのですよ、多くのアパート群は花園なのです、と教えてくれた。住宅販売競争に有利なように、花園とは別の新奇な魅力的な名もつけられている。それで、このような区画割りが中国の昔からの伝統であることに気づき、中国の都市が城市と呼ばれていることを思い出していた。

その本によれば、都市は古来城壁で囲まれていただけでなく、大通りで区画された各々がすべて塀をめぐらし、木戸があつて日没とともに閉められていたのだ。そういえば日本でも江戸や城下町では木戸があつた。区画のことを「里」と呼ぶとある。わたしは、今習っている中国語会話で、「我住在学校的宿舍里」と里をつけるのを思い出した。中国の城市はその長い伝統を引き継ぎ今も、古いくたびれたアパート群も学校も企業も、同じように門衛つきの柵で囲まれているのだ。街中の柵のないところも、伝統の間口一間半ぐらいの店の並んだ建物や大きな構えの店が連なり、通りから奥の住宅街に入る通用口は一つ二つぐらいしか開いていない。今後わたしが他の都市に行っても、どこか訪ねるのに長い距離を歩かなければならないだろう。

中国語が初めピジン語の様相を呈していたというのも理解しやすい。日本語の表記法もそれを利用して発展したのだ。昔から日本人が中国人と筆談をし、道元が独特の漢字の並べ方をして考えを組み立てようとしたこともよく理解できる。それだから現代でも、発音や抑揚・平仄を知らない蝶に、漢字を並べて漢詩もどきを作る気を起させるのである。

＊＊様

柳絮の飛ぶ季節も今は終わろうとしています。瀋陽は雨が少なく、この一か月の間一度夜に雷雨があり、街に出たとき二度ほど十分ぐらい雨にあっただけです。風が強く、埃で建物はよごれています。大通りに植えてある街路樹には、水をやる必要があるようです。生活の変化にすばやく対応できなくて、また、高校の教師の仕事の忙しさを初めて経験し、どんな授業をすればいいのかがなかなか分からなくて、リズムをつかみかねています。それでも、この学校に来ている日本人教師と旅行に行ったりしています。メーデーからの七日間の連休には、中国人ツアーに参加して張家界というところに行きました。ホテルの設備が日本人には満足ですが、中国人と円卓を囲んで料理をつつきました。

昨日の土曜日には、学校の日本人教師三人と、高速バスで三時間かけて朝鮮との国境の町丹東に行きました。大きなきれいな町でした。今は観光地になっていて、韓国との交易も盛んなようです。朝鮮戦争のときアメリカ軍の爆撃で破壊された橋が鴨緑江の中ほどまで残されて、戦争を記念するものになっています。写真の対岸が北朝鮮です。この「断橋」に並んで現役の橋があります。金正日が中国に行くときはこの橋を列車で通るのでしょう。観光船に乗ったら、朝鮮側のすぐ近くまで船を寄せて走り、古い船に乗った人の顔が見分けられるほどでした。対岸には散歩をする人や、川に足を入れている人、洗濯をしている人が見えました。少年二人が泳いでいる姿もありました。望遠鏡を貸してくれましたが、朝鮮側には背の高い木々が植えられていて、町のようすは見えません。

丹東側の河岸は公園に整備され、高層のホテルや住宅が立ち並び、河畔には芝生が植えてあって緑も美しく、もっと洗練されればリゾート地のような景観になるでしょう。兩岸を見くらべれば、中国と北朝鮮の経済格差は歴然としています。北朝鮮側の人々はこの景色をどういう感慨をもつて眺めているのでしょうか。

そこから二十キロメートル離れた虎山長城というところにも行きました。道中は鴨緑江の右岸を川岸に沿ってさかのぼる道で、朝鮮側にはほとんど集落がない野や湿地帯が続き、遠くに山並みが見えます。虎山長城は明の時代に造られ、万里の長城の東端と言えると『地球の歩き方』に書いてあります。九〇年代から観光のために修復されたのだそうです。たしかに戦略的な要衝で、鴨緑江と西側の中国側から流れ出る川に挟まれた角地に突き出た小高い山になっていて、山の頂の塞上から、かすんで海は見えませんでした。鴨緑江の上流から海側まで見通せません。海から兵員や物資を運ぶこともできたでしょう。ここからどういうふうな長城が続いていたか見えるほどには、遺跡は残っていません。山の下の方は、橙色の屋根の比較的新しい家々が山の緑に映えてきれいでした。湖南省のいなかで見た村よりも裕福と察せられます。

中国の今と昔

「唯美品格」にあるクリーニング店へ行ったある日は風が強かった。風が並木の柳の枝を折って落としている。それを拾って自転車に積んで帰る人を見かけた。

中国には、快適な現代生活の先端を行く人と、昔ながらにわずかな日銭で暮らしている人が存在している。街の道路わきで自転車の修理をしている人は一日いくら稼いでいるのだろうか。共産党政権下に物乞いがある。多くの生徒は金持ちになりたいと言う。社会主義的な考え方が社会に根付いているようにには思えない。それでも十三億人が食べていける。

中心街へ日用品の買い物に出て、いくつかデパートを見物したことがある。家庭用品の売り場を見て歩くと、豪華な食器セットに一万元の値札のついたものがある。お金をもっている層があるということだ。一階の女性用装飾品の展示もブランド品ばかり。中国経済は日本を追っていて、たいへんな数の富裕層がいるはずだ。スーツ姿の女性を見かけた。外の気温は三十五度ぐらいあったから、自家用車で来たのだろう。わたしはといえば、給料四千元の中から旅行代なども出すのだから、中国の普通の人のようなつましい生活をしていたのである。

瀋陽日本人教師の会は例会を開いている。初めて出席した会の主な議題は先日
の日本語弁論大会の反省であった。わたしは会場自体に興味を感じた。「北方国際大廈媒介」、英語名で North Media と書かれている。来年北京オリンピックの

サッカー競技が瀋陽で行われる際、ここが報道センターとして使われるそうだ。会合が開かれた会議室には、マルクス・エンゲルス・レーニン・スターリンの肖像画が掲げてあった。エンゲルスとレーニンの間に顔を知らない人の肖像画もあった。漢字で「千・・・」と書いてある。カウツキーだろうか。中国語には、ローマ字による発音表記ピンインがあるだけで、日本の仮名のような外国語の音を表現する文字がないから不便だろうと思う。

日本人教師の会はたいてい、資料室と呼ばれているところで開かれる。そこには雑多なかなりの量の日本の書物が置かれている。瀋陽にある大学の日本語科の学生に貸し出すために集められた本である。日本から日本語教師として来ている人たちの貢献だ。土曜日曜には、会員の教師が交替で貸し出しのためにそこへつめる。書物を置く場所として部屋を提供してくれる善意の人にも負っているとのことだ。学年の終了時期の六月、送別会があった。多くの人が日本で教職に就いていた人で、日本語教師の資格をとって、退職後こうして外国に来て日本語を学ぼうとする学生の手助けをしている。それ以外の若い人は女性が多いが、やりがいのある仕事を求めて来たのであろう。社会の拘束の強い日本を離れて開放感を味わい、その上有意義な仕事をしているという充実感があるだろう。個性を覆い

隠さずに打ち出して、自信から少し饒舌でさえある。感心しながらその多弁を聞いて、自分の流儀から踏み出てわしがつとうとしている生き方と比べながら、どういふ人生がよいのだろうかというような思索が頭の中をめぐる。

瀋陽日本人教師の会は海から来た蝶の夢をたいへん豊かにした。六月には遼寧省西部へ旅の機会を与えてくれた。集合場所は中山広場に面した遼寧賓館。奉天時代の旧大和ホテルが今も使われているのである。貸し切りバスが来るまで時間があつたので、その中を見学できた。七十年前にはなかなか立派なホテルだらう。玄関から、中山広場の大きなロータリーの中央に立つて右手を挙げた毛沢東の像が見える。ここでも歴史が語っている。ところで今日は、そんな現代史を超えてはるか太古を尋ねる旅である。

道中、見渡す限りの水田で集落も見当たらない平原を行つた。中国在住の長い人が、遼寧省は中国有数の稲作地帯で、中国で一番おいしい米がとれるのだと解説してくれた。寒い地なのにと意外に思ったが、六月のこの陽射しの強さからすれば驚くことではない。

北票市の四合屯古生物化石館へ着いたら、われわれ一行は周囲の地層をあらわにした発掘跡へ案内され、礫岩の破片を割って化石を探して御覧なさいと誘われた。そんなに手軽に見つかるものかといぶかりながら探すと、本当につぎつぎに見つかる。わたしは貝と草の葉の二つの化石を見つけた。草の葉の方は、割って合わせ鏡になった二つの石がちょうど蝶の形をしている。とてもうれしい気分になった。館内には原始の羽毛をもつ恐竜や孔子鳥や魚などの化石が展示してある。骨格の大部分が見つかり復元された大型の恐竜もあった。この場所が大量の化石のできる好条件にあったことなどが、パネルに説明してある。

続いてバスは朝陽市に向かい化石展覧館へ行った。いろいろな化石を額に入れて飾り物として売っている。晝一晝もある額に、魚だったか化石が現代中国の地図の形に広がったものが入れてあった。中国人は実に巧妙な模造品をつくるものだ。鮮明で出来すぎの売り物がたくさんある。わたしの見つけた太古の小さな草の対はささやかだけれども、同じように額に入れて言葉を添えれば、こちらは真正銘の本物のことだし、おもしろいものができるかもしれない。ホテルのベッドで、寝つかれないままに讃を考えた。「海蝶再会往古野草」と題し、「草生石中一億歳、生命変遷兆京類、古水乾尽燕地夏、人身偶覺幾許睡」。蝶の形をした

化石は今、その讚を書いた色紙にはめ込まれ、海辺に住む蝶の書斎の壁にかかっている。両方の翅に小さな草の葉の紋をうつすらと印して。

翌朝、北塔へ行った。北塔広場に仏寺はなく、博物館にして文物が展示されている。塔の修復中に見つかったものらしい。仏舍利を納めるための品々もある。涅槃仏や仏舍利にはそれぞれ一室がもうけられ、焼香や礼拝ができるようになっていいる。地下の仏舎利の前では、一行のほとんどの人が、ガイドの所作に倣って中国式のひざまずく三拝をした。この人たちは日本の寺に行くとき、どれだけの人が手を合わせて礼拝するのだろうか。中国には、文化大革命をくぐりぬけて、寺院で跪拝する人々が存続している。

博物館の説明文によれば、現存する北塔は一〇四三年遼の時代に建てられたとある。民族のるつぽに遅れて参入した契丹族は、中国東北部に遼を建て皇帝を称した。遼から金・元へと続く征服王朝の歴史の中で、燕京すなわち北京が中国の政治の中心地になっていく。その遼が建造した北塔は、中国仏教の伝統を継承するものであることを示している。るつぽは新たな参入者も呑み込む。北塔の基壇部の中に入って見学した。最初の木造建築の柱石の上にレンガの基壇が築かれて

いる。塔は十三層で、仏舍利は上層の三つぐらいの部分を中空にして納められていたらしい。仏塔にも盗掘のための横穴が掘られていた。その横穴から、文字の刻んである古い石柱を見た。南の方に南塔が見える。

さらに関帝廟にも行った。どこにもあるものをどうして見物するのだろうかと思つたら、そこは東塔の立っていたところらしい。基壇部の跡があり、瓦などが重ねてある。清の時代の石碑もある。文化大革命の時には関帝廟も倉庫にされていたということだ。壁画の描かれた壁は煤けていたけれど、梁などの装飾は新たに塗られたのか色鮮やか。関帝廟左の建物の掲示板には、南無阿弥陀仏という文字と何か文章が書いてある。こちらは脇寺のような感じだ。仏像が置いてあって、一人の僧が経を読んでいた。その左手奥の人が住んでいるらしい家から少年が出てきて、仏像前のろうそくから線香に火を移して帰って行った。中国でも神仏習合が主流のようだ。

盛京Ⅱ奉天

愛新覺羅ヌルハチは一代の英雄である。狩獵採集生活の名残をとどめていた女

真族を統一して、漢人をも支配下に置く後金を建て、ここ瀋陽に都(盛京)を置いた。国号を清と改め帝位に就いたのは子のホンタイジだ。わたしは丹東で明の虎山長城の故地に立ったのだが、そのとき、「要塞にこもる敵は撃破される」という定理を想い出していた。クラウゼヴィッツに言われるまでもなく、中国の歴史はそれを証明していた。しかし、現実の外敵との対決に際して明は長城を再建増強する道を選んだ。虎山からの長城はヌルハチがその内側で勢力を広げるのに何の妨げにもならなかったし、次の皇帝の叔父つまりホンタイジの弟は、招き入れられてもう一つの長城を山海関で越えた。形成されたばかりの強力な軍事国家に対して、長城はやすやすと突破される。

ホンタイジとその子の宮城もやはり故宮と呼ばれている。わたしは滞在中何度かそこを訪れた。北京の故宮に比べずっと小さい。それは、東北地方とモンゴルを合わせた経済規模と全中国との違いを表わしているのだろう。宮城の東門である大東門は今も残っている。瀋陽の故宮にはそれほどの宝物は展示されていない。ただ満州族の王朝が中国伝統の王城を築いたことを示し、東アジアの王宮はそうしたものであるという通念が支配していたことを物語る。満州八旗などが展示されて説明されたりしている。ここは観光地で、南に大きな伝統建造物が建

てられていて、さまざまなみやげものを売っている。故宮の北に瀋陽の繁華街で歩行者天国になっている中街がある。

五月の土曜日に、学校からは遠い街の北の方へ出かけた。バスで瀋陽北駅に行き、さらに北陵公園⇨昭陵へ向かう。清王朝の太宗ホンタイジの墓地である。わたしと前後して歩いている日本人ツアーの現地案内人が、「この墓は開かれたことがない」と言っているのが聞えた。清が倒されたのは二十世紀である。近代社会に入っていたので、この墳墓は盗掘を免れたのだろう。二〇〇八年に安陽で発見された墓は、その後曹操のものだと発表されている。歴代の王墓を開けて軍資金を集めたといわれる曹操は、自分の墓をつくるのに多くのダミーをこしらえ、墓に盛り土もせず分からないようにした。しかし、その墓はやはり盗掘を受けていた。盗掘は死者が副葬品を冥界にもっていけないことを証明していたが、誰もがそれを認識している時代になっても、皇帝は大きな墳丘をつくり、副葬品を埋めた。太宗の墳丘をとり巻く小径を見物人が巡る。異国の者までまじるその騒がしい足音を聞いて、墳丘の下石室の中でホンタイジは眠りを覚まされていることだろう。

北陵公園はたいへん広い。多くの市民がここで憩い、生活を楽しんでいる。地図にある西門を探して出ようとしたら、ずいぶん長い距離を歩くことになった。あちらこちらの木陰で、おおぜいのいくつものグループが弁当や飲み物を広げている。大きなグループは拡声器を使って歌ったり踊ったりしている。横断幕を見ると、今日は朝鮮族の何かの記念日で、村（鎮）などを単位にしてグループをつくっているようだ。チマチョゴリを来ている人もいた。東北地方にはかなりの数の朝鮮族がいることを自分の目で改めて知った。先日の方論大会でも、朝鮮族の高校から出場して上手に日本語をしゃべった生徒も何人かいた。

六月の初めの寝つかれない床の中で、本格的な暑さが来る前に瀋陽の見るべきところを見た方がよい、ということに気付いた。ホンタイジの昭陵に行つて英雄の福陵を訪ねない法はないと。バスで東の郊外へ遠い道を行った。清の太祖ヌルハチとその皇后の陵墓は、天柱山という名の低い丘に築かれている。百八段の石段でゆるやかな斜面を上るといふ点と池がないということを除けば、設計のプランは昭陵とよく似ている。市内にある北陵公園は利用者も多く、陵の手入れも行き届いて、円墳である宝城も草が抜かれて土の墳丘になっているのに、福陵の建

物のオレンジ色の瓦屋根には草が生えている。英雄の眠る墳墓も草で覆われている。海から来た蝶は、夏草の中にアザミの花が背高く伸び、終わりのかけの花にとまっているモンシロチョウの紋に眼をとめた。

方城内の左右の殿には歴代皇帝の陵墓の解説が示され、皇帝と皇后の似姿がマネキンでこしらえてある。皇帝は肖像画が残されているから、似せて作られているのであろう。しかし、皇后の方は美しい顔に作られ実在感が欠けているように思う。西洋人風の顔立ちもあった。最後の少年皇帝宣統帝の像もある。子供に皇後はいない。この像が示さない六十四歳まで生きた人の人生に重ね合わさって、太祖の功業も遠い歴史の背景に退いてしまう。左右対称に配置された建物の上、反りのおおきな四方の棟の上に並んだ動物像が見上げる空を、燕がたくさん飛んでいる。ただ瓦の鈍い橙色が時の流れを偲ばせてくれる。

北陵公園へ行った日、そこからの帰りにバスで瀋陽南駅へ寄った。駅舎は旧満州鉄道時代のレンガ造りだ。清の最初の都盛京から満州国の奉天へタイムスリップしたのである。おおぜいの人が切符を買うために並んでいる。中国の鉄道の切符の入手法は、遠い郊外に住んでいる日本人にはとても不便だ。簡単に鉄道を利

用する旅ができない。南駅の周辺は、満州鉄道の付属地だったし、続く満州国時代に建てられた建物が多くあった場所である。それらの建物は今も利用されている。もっと歩きまわれば興味あるところが見つかるのだろうが、今日のところは切り上げた。

日本史を習って奉天の名が出る最初は奉天の会戦である。しかし、今の日本人が忘れない方がよい事件は、戦争を始めるための柳条湖での満州鉄道爆破だ。柳条湖の鉄道沿いに建てられている九・一八博物館に行くことにし、授業のない平日に出かけた。一九三一年九月十八日は、中国の特に東北地方の人々にとって忘れることのできない日である。日本人にとっても、三七年七月七日からの日中全面戦争へ続く十五年戦争が始まった年で、それを記憶から消すことは歴史から学ばないことになるだろう。九・一八博物館は、中国にとって第一に教育の場である。一九三一年からの日本の中国への侵略が、写真と図版などで解説してある。抗日戦争を戦った八路军は共産党と人民解放軍の正統性をアピールすることになる。米国の国務長官キッシンジャーが突然訪中するまで、日本のマスメディアも「中共」と蔑称で呼んでいたのだから、以前はプロパガンダの役目が重要だったろう。今は少し余裕をもって対応できるようになっていて、昔の愉快でない関係

が、東北地方に多くの日本企業を進出しやすくしている側面はいなめない。

展示してある写真は、一九三〇年代の時代を映し出し、日本がヨーロッパのアシストの国と似たスタイルをとっていたことを語る。日本の侵略の実働人物たちの顔を見ながら、世の中がいつせいに浮動するときの日本人の行動のあやうさを思った。今日のわたしのような平凡な平和主義者も、危機の時代に安定した行動を貫けるか心もとない。普遍的な人間の価値観がしっかりと自己の中に根づいていなければ、揺らぐだろう。

別の日にK先生に外出を誘われて、午後張氏師府へ行こうと提案し、見学した。中庭をとり囲む建物が三つ連なった伝統的な三進四合院という建築様式の建物である。古くなっているが、中庭をもつ住居は落ち着いていて、よい家具が置かれ、当時としては快適だったのではないかと推量できる。東院の大青楼は、民国時代の東北地方を管轄した人が政務を執った場所だ。ちようど故宮の南に隣接する。その政庁は洋風建築で、格式のある家具と調度品を整えていながら、なお私的な雰囲気かもしれないように見えた。柳条湖で戦争を始めた日本軍は、もちろんすぐにこの張氏師府を占領した。

宿舎に帰ってからのT先生との話で、張学良がアメリカで死んだという記憶の薄れつつあったニュースを想い出した。二〇〇一年まで生きたという石碑を読んだ時ぴんとこなかったのだが、やっと全体像がよみがえる。西安で蒋介石を軟禁して周恩来に会わせ、国共合作を成立させた人は、蒋介石に恨まれて、地位を剥奪されて台湾に行ってから自由ではなかった。しかし、アメリカに渡って百歳まで生きた。張氏師府のパネルは、中国共産党にとって、張学良がある程度評価すべき人物だったことを表現している。軍閥の御曹司は、成長してそれなりに評価すべき役割を果たして、不自由の中でも長寿に至る人間的な徳を備えていたのであろう。誰でもそのようになれるわけではない。学ぶ点がある。

その日は端午の節句でちまきを食べた。翌日のこと、手首に縊り糸を巻いた女子生徒が、まだ糸を解く時が来ていないと言う。何かそういう風習があるのだろうか。

瀋陽その三

終業間近の日々

日中全面戦争の始まった日付の日、学校が日本人教師を去年花博覧会の開催された場所へ連れて行ってくれた。世界中の世界遺産を紹介する二つの建物と、中国各省が競った庭園を見物した。案内役は日本語教師の陳老師。それぞれの地域の特徴を出すように造られている。中国は広いから、造園プランだけでなく植物の種類もそれぞれ違う。

この日の朝いつものように着信メールを開いたら、中に予想もしていなかったメールがあった。まず、ここ数年一緒に論文を書いている共同研究者宛に、その内の一人である孫さんから上海交通大学の教授に決まったという通知があり、別にわたしだけに宛てた一通があった。孫さんは中国の大学を卒業後、ヨーロッパで学位をとってしばらく滞在した後、今までアメリカで研究していた。彼は中国に帰るといつも蘭州の中国科学院近代物理研究所に滞在するのだが、そこで客員研究者を採ることができるのでわたしを推薦しようと思うがどうか、というのである。わたしが定年まで三年残して「五斗米」を蹴ったのを見て、感じるどころがあったのだろう。たいへん魅力的な誘いだ。しかし、研究から離れる決心をし

て今の生活をしているのを、元の状態に戻すのは易しいことではないだろう。それに、育才外国語学校との約束もある。

白老師と今後のことを話し合っている最中であつた。わたしは、中国のことを知るためには一年通して滞在した方がよいと考え、そのようにお願いしていた。ところが学校は、T先生との契約を更新しないので、九月の新学期からも引き続きいたいなら、数学も担当してほしいというのである。数学もやってできないことはないが、効果的な授業をするには準備に時間をとられるだろう。物理についても、新学期からは問題集を解いて見せるだけでなく、系統だった授業をする必要がある。高校生相手に経験のないことだから、時間をとられると覚悟していたのである。こう考えるとやはりきつすぎると思う。四、五日して白老師と会談し、九月からの滞在はとりやめ、来年四月から今年のように授業を担当することに決まった。その上で、孫さんからのメールを見せて蘭州での客員研究員に応募してみたいと話した。ただし白先生との約束は尊重し、もし仮にそういうことになっても、この学校で物理を教える人を探すのに協力しますからとお願いする。困った顔だったが、孫さんの推薦を受けることはやむをえないという返事であつた。

また四、五日して、踏ん切りもついたので客員教授推薦を依頼するメールを出した。

学校は補習授業の終了が近づいて、日本での留学試験に備える取り組みが行われるようになった。日本人による面接を経験する目的で、公開模擬面接も開かれた。三つのクラスから四人の代表が出て、三年生みんなの前で練習するのである。日本人教師は面接員の役目をした。事前に、男子学生はスーツにネクタイをする、女子学生もスーツを買ったものがあると聞いて、T先生とわたしは大学の教師はスーツかどうかを問題にしないだろうと話していたのだが、場面に合わせネクタイをして面接員役を演じた。日本語の能力だけでなく話し上手かどうかにもよるのだけれど、総じてよく出来たと思う。

わたしは中国に来たのだから少しは中国語を勉強しようと思い、K先生と学校の日本語教師陳老師について習った。大連の伝統ある外国語大学の出身だということ。日本語を自ら学習し今はその外国語を初心者に教えているから、なかなか手慣れた教え方であった。生徒も予習をして学習したけれども、多くの記憶がすぐに薄れ、まだまだ簡単な会話もできない。せっかくよい先生についたのに、結

局わたしの方はものにならなかった。

白老師に連れられて、M先生と、学校のすぐ近くの渾南開発委員会という事務所に行くことがあった。日本で大学受験の準備をしている女子学生のもので相談を受けたのである。数日して、わたしたちは大きな酒店での夕食に招待された。父親は明るい豪気な人物だった。白老師の教えてくれたところでは、四十七歳、渾南新区開発の企画を担当していて、四十五億元の予算を扱う地位にあるそうだ。母親は元女優で、映画にも出たことがあるらしい。モンゴル族の白老師はまだ三十九歳、五十度以上ある蒙古の酒を供されてご機嫌になり、日本の歌謡曲も歌った。この数年毎年秋に京都に滞在して、日本の風習になじんだという。二次会・三次会などはしご酒もやるようになって、瀋陽でそれを真似ているそうだ。彼が饒舌になったようすを見てとった父親が、宴を終わらせるために、即興の詩を作って朗々と語った。残念ながら理解できないけれど、リズム感があって雰囲気は伝わってくる。娘と日本で会うことを約束した。元警察官の父親は酔っていたが、車を運転して学校まで送ってくれた。白老師が今日は立秋だと言った夜のことである。

七月下旬の土曜日の朝、遼寧省博物館に出かけた。開館の九時より早かったもので、建物の影で腰を下ろすところを探して行くと、博物館のそばに文化広場というのがあった。そこは高層の建物がすでに暑い夏の陽射しをさえぎって陰になっている。ステージ前で女性二人が剣舞の練習をしていた。一人が先生でもう一人が指導を受けている。師匠の方は黒い筒袖の上着とスラックスを着て、朱房の剣を持っていた。姿勢のよい長身によく似合っている。熟練した人の動作は形が優美で、ゆるやかなテンポで舞う中にもきりっと引きしまったところがある。楽しんでるうちに博物館の開館時間を過ぎていた。

博物館に入ると、一階では昔の皇帝や高名な人の書画展をやっていた。宋の徽宗皇帝の「瑞鶴図巻」と書から始まって、明の武宗、清の皇帝たちの作品に、臣下の位の人たちの書画が続く配列になっている。朱熹から林則徐、李鴻章までの書もある。徽宗は金に捕らえられてここ遼寧省に連行され、最後は黒竜江省で死んだ。書画に親しんで当時一級の芸術家だった人は、宋王朝衰亡の責任者であった。皇帝としてふさわしくなかったことになる。説明文に「無能」という文字があった。

次の展示室には金石文が展示されていた。墓誌が多い。二階には明・清の時代の工芸品。琺瑯・漆器・螺鈿・象牙細工・玉製品などがある。見事なものがある。貨幣も展示されていた。日本・朝鮮・越南のものも含まれている。ヴェトナムでも漢字の書かれた銭が使われていたのだ。初めて見たけれども、漢字文化圏にあったのだから当然といえれば当然のことだ。陶器の展示もあった。鶏冠壺器の変遷を追った展示は興味深かった。日本では見かけない意匠だ。これまで知らなかったような美しさをもつ洗練されたものがある。三階には、遼河文明展というテーマで、東北地方の新石器時代の土器・石器から青銅器、さらに歴代の品々が続き、遼の時代の文物まで展示されている。中原から遠い地方でも、陸続きだけあって、日本よりもずっと早い時期に青銅器文明が伝播していたことが分かる。

一巡りして一階の書画工芸品を売る店に入ったら、「日本人か」と尋ねられた。そうだと答えると、お茶を飲まないかと誘う。遠慮せずにごちそうになった。中国式の小さな器で飲んだが、おいしい。その男性は日本語をわずかしか話せなくて、女性の店員が主に話した。並べてある掛け軸の絵はおよそ二百年前までのもので、一幅千二百元ぐらいということ。奥の方に現代の書画があつてそちらは六百元という。旅行かと訊かれたので育才外国語学校で働いていると答えたら、さ

らに給料はいくらかと尋ねられた。さしつかえなからうと考え、また日本人観光客のように懐が豊かでないことを伝えるために、正直に答えた。博物館のパンフレット（四十元）を買って店を出た。

授業の無い日、K先生とフランス資本のスーパーマーケット「カルフル」に買い物に出かけて、めずらしいことに遭遇した。果物を計量してもらおうとしているときに停電になったのである。店員が通電中のコンセントのある場所まで計量器を移動するのについて行き、値段票を貼ってもらえたのでレジに並ぶことができた。ところがわれわれの順番がきたところで、レジの機器も動かなくなった。すぐに店員が、買い物かごはそのままにさせて、客をレジの外に出した。こちらはどうすればよいのか分からなくてまごまごしていたら、店員を指揮していた男性が、英語が話せるかと言って対応してくれた。一時間して来たらかごの中のものを買っていきけるようにしよう、と請け合ってくれる。そのとき気付いたのだけれど、レジの外の売り場と通路の境に沿って、おおぜいの店員が一列に並んで客が出ていくのを見守った。考えてみると、混乱の中で商品を持ち逃げするのを監視していたのだらう。急な事態に店員が機敏に動いたところを見ると、瀋陽では

停電がめずらしくないので、停電した場合の対応マニュアルができてきているのだろう。外に出てみると、道を挟んだ向かい側の建物には電気がついているのが見えた。一階で工事をしていたから、この建物だけの停電だったのかもしれない。

一時間後に戻って、買い物かごの中の品物を買収取ることができたのは言うまでもない。

夏の夕べ、入場券が手に入ったので、四か国対抗サッカー大会の見物に行った。スタジアムは、来年の北京オリンピックのサッカー会場になるところで、一月前に完成したばかり。今回のゲームは使い初めで、施設を試用して運用や警備などの予行練習をするのだろう。二十二歳以下の若いチームの対戦である。日本と中国のゲームの前に両国国歌が演奏されると、「君が代」にブーイングが起き、中国国歌は大多数の人が声を出して歌った。中国人は自国チームを応援し、相手チームに敵対感を示したが、それは多かれ少なかれどこの国でも起きることだろう。試合は、中国人レフェリーが少しばかり日本チームに不利な判定をしていたことを度外視しても、中国チームが押し気味に見えた。結局、○対○で試合終了。練習試合を無事に終わらせるのにちょうどよかった。

終了後スタジアムの外で、われわれの話している日本語を聞いたそれほど若い男が、われわれに向かって怒声を発し、連れの女性が押しとどめた。紳士の国イギリスのフーリガンが外国で問題を起すサッカー試合のことだけれども、ここ中国東北地方では、一九三一年から仕掛けた日本の戦争が歴史の傷跡を残していると考えなければならぬ。

済南・泰山・曲阜への旅

＊＊様、七月末の金曜日の午後から日曜日の夜まで、二泊三日で泰山・曲阜へ行ってきました。同行三人の旅です。飛行機で山東省の省都済南に飛び、大明湖と趵突泉というところを見物した後、タクシーで一時間半走り泰山のふもとの町泰安に着きました。ここは大きな都市で、リゾート地の雰囲気を持ち、会議場などもあるようです。料理は、山東省の方が油濃くなく薄味で日本人向きだと思います。

翌日まず、始皇帝以来七十二人の皇帝が封禪の儀式を行なった岱廟へ行きました。宋代以後拡張されて、正殿是北京故宮の太和殿と孔子廟の大成殿とならぶ三

大宮殿だということです。色とりどりの百日紅が咲いていました。そこから一天門というところまではタクシーですませて、いよいよ登山道を登りました。頂上まで石畳が敷いてあって、石段の数は八千近くあると『地球の歩き方』に書いてあります。三十分おきに休憩しながら、木陰があるとはいえ暑い中を三時間歩いて中腹の中天門というところへたどりつき、大きな社の陰で弁当を食べました。そのまま休憩していると、人のよさそうな人が話しかけてきて、中国語のわかるT先生が理解したところでは、教師を退職した人で湖南省から独り旅をしてきたようです。われわれが退職して中国で働いていると言ったら、日本人の気がしれないと答えたようです。小生も習いかけの漢語で歳を聞いてみたら、六十歳という答え。わたしよりも若かったのです。

さてペットボトルのコーラもきれたので祠の陰から出て、もう一本飲み物を買ってふと見上げたら、泰山の峨峨たる山容が眼の前にありました。感嘆しながら眺めていると、頂上左手に長く急な階段が続いているのが小さく見えます。それを見て、小生はあと二時間半ここからの急な山道を登るのを断念しました。日頃から山登りをしているM先生は、休み休み登ってみると言い、T先生もそれにつられて登って行きました。T先生の方は宿に着いてから少し熱が出たので、小生

の判断はあながち間違っただけではなかったようです。

二人に別れて小生は、そこから石段の見えた南天門までロープウェイで景色を楽しみながら上がって、登山道を登ってくる二人を待つ間、あずまやが見える近くの小高い峰に立ったり、頂上の街を見たりしました。そう、泰山の頂上は丘のようになっていて、旅館・飲食店・みやげ物店などが並ぶ小さな町になっているのです。入り口に「天街」と書いた碑楼(石の門)があります。日本にはこんなところはないでしょう。中国は大きな国で、スケールの違うことに出会います。ここには三本のロープウェイが通じています。張家界にも世界一長いというロープウェイがありました。日本人が遅れていると思っている中国には、日本にない規模の行楽のための施設があるのです。

われわれは、頂上で一番立派なホテルに宿をとりました。不便なところなので三つ星格ですが、瀟洒なホテルで、ヨーロッパ系の人一人泊まっていました。早く寝て四時半起床、すぐそばの一五四五メートルのピーク、玉皇頂へ日の出を見に行きました。しかし残念ながら雲がたちこめ、ご来光を拝むことはできません。実は昨夕から霧が出て予想されていたのです。それでもフロントはモーニン

グ・コールをかけてきました。頂上に登り玉皇殿の社に入ったことで満足して引き上げると、われわれの憩う「神憩賓館」へ鐘の音が霧の中を伝わってきます。朝食後ホテル下の孔子廟を見学して、今度はロープウェイとバスを使って山を下りました。

再びタクシーを駆って曲阜へ。まず孔林で、世界で最も長く続いている一族墓地を見物。子貢が守った師の墓は、今では二平方キロメートルの広さになり、三千の墓碑が立つということです。孔子の墓は大きくされたのでしょうか、墳丘になっています。孔林の塀の一部は、曲阜の城壁だったそうです。参道の両側には百ぐらいあったと思いますが、みやげ物屋がならんでいます。その一つで、自ら扇に書を書いて売っているところがあり、なかなか達筆なので一つ買いました。李白の「将進酒」、「君不見黄河之水天上来、奔流到海不复回、……」というあの詩が書いてあるのを選びました。帰ってよく見たら、落款に小生の名と同じ字があり気をよくしています。

続いて孔府・孔廟。魯の国の下級役人だった人の四十六代目の子孫が、衍聖公という位に叙せられてかつて魯の王都だった曲阜の主のようになり、官庁を兼ね

た屋敷に住んでいたのです。近代東北地方に勢力を張った張学良の瀋陽の旧宅よりもはるかに立派です。孔廟は倍以上の規模をもつ宮殿のような廟です。魯の哀公が孔子の死後三つ部屋のある廟を建てたのが始まりということです。大成殿を見て、これで中国の三大宮殿建築を見たことになります。ところが孔子の弟子たちの像を見落しました。真夏の炎天下大汗をかい疲れきって歩いていて、注意はかなり散漫だったのです。

旅もここで終局となり、タクシーで済南行きのバスセンターへ向かいました。T先生が運転手の氏名に孔某と書いてあるのに気付いて尋ねたら、七十四代目の孔家の子孫だという答えが返ってきたそうです。われわれは、孔子の血筋の人を車夫として車駕に乗ったことになります。東夷の士大夫でもない者が畏れ多いことをしたものです。道が廃れたら東海に浮かび渡ろうと言った人は許してくれるでしょうか。

済南行きのバスの中からぼんやりと風景を眺めていると、白楊の木陰で羊に草を食わせている人を何人も見ました。ロバに荷車を引かせているのを何度も見かけたし、城壁で囲まれた町の中の土足で上がる家に住んでいるこれらの生活ぶり

を見ると、ユーラシア大陸の西から東まで、生活様式の一部を共有しているということを感じました。海に隔てられた日本は少し違う生活の習慣をもっているのだと分かります。羊を放している人の中に、自分は池で魚釣りをしている人がいました。曲阜に孔子の子孫の運転手がいたのですから、齊の国で呂尚の末裔が羊を飼って太公望を氣取っていてもおかしくないわけです。

泰山と曲阜への旅を言い出したのはわたしであった。旅に出たのは年配の三人だけ。済南で二つの名所を見物してさらに泰安まで移動するのにタクシーを利用したのだが、運転手のかけひきに苦労したのも旅の想い出となった。泰山頂上では、写真屋が商売道具を出すために門を開けたのにまぎれて玉皇殿へ入り、社の中を見た。香を焚く大きな容器が置いてある。願い事をした人の錠前がたくさん吊り下げられていた。それにしても、泰山に参詣する人が拝む神殿に、商売道具を入れておく無頓着さ。

孔府は北側の私邸と南側の衍聖公邸から成る。その立派な建築群とは別に壮麗な孔廟がある。外壁東側に沿ってみやげ物屋が並んでいる。わたしは連れの二人よりも先に南の端に到着し、リュックが重いので道に置いたら、みやげ物屋の女

性が床几を出してくれて座ることができた。よっぽど疲れた顔をしていたのだろう。南から広い孔廟へ入った。最初三つの部屋しかなかった廟が、今では、敷地は南北約一キロメートル、十平方メートルを超え、部屋数四六六。この変遷だけでも感心する。人間は、贅沢や単なる威圧のためだけでなく、思想のようなものを表わすためにもこれほどの建築群を築く。やはり見る者を威服させるためではあるけれども。そして本当にそれを尊崇の意識で仰ぐ人が出てくる。人間のつくり出す意味は実にもしろいものだ。孔子の第七十二代は乾隆帝の娘を妻に娶ったそうだ。王朝がつぎつぎに交代しても、孔子の子孫という特殊な地位は揺るがなかったのだ。そして中国共産党の時代になっても、有利な地位は失われなかったようだ。先頃、李世民の子孫との婚姻がめでたく整ったというニュースを、日本人教師の一人から聞いた。中国の家譜はめんめんと記録される。中国の歴史における孔丘という人の扱いを知って、思索の種を一つ仕入れることができた。

学校に帰ってからの授業で、孔廟で買ったピンインを付けてある『論語』の抄篇を生徒たちに見せた。冒頭にあった「学而篇」の「学而時習之、不亦説乎」を黒板に書いて、日本語の読み下し文を解説したら、みんな喜んでいた。

瀋陽その四

別離

卒業が近づいて、生徒から記念の言葉をノートに書いてくれと頼まれたり、生徒と並んで記念写真を撮ったりするようになった。西風が吹いて季節も変わり始める兆しを見せる。一日中雨の降った日に、送っていた書物の最後の一冊を読み終わって、もう読む本もなくなった。その夜また停電があつて、無明を見つめているときまざまの思いがよぎる。

授業は、初めのころ急ぎすぎて、あとの方で時間のゆとりが出るというちぐはぐが生じていた。いよいよ最後の週になって、大阪大学の二、三年前の留学生二次試験問題が手に入ったので、それを生徒にやらせた。解答を示すと、最優秀の生徒から仕事量の符号を無視しているとの指摘があり、もう一つ質問があると言われて、放課後の自習時間にお相手することにした。食事をしながら計算のメモ

を見たら、「ん」が落ちていただけでなく、途中の式にもミスがあったことに気づく。しくじりにあきれながら、昼休みに教室の黒板に訂正を書いた。今二人の答案を比べたら、彼女の方が正しいという確率が高いだろう。

約束の時間に教員室で待っていると彼女がやってきて、質問については黒板に書いてあったので分かりました(つまり、わたしがミスに気付いたのでもういい)、それよりも一緒に写真を撮りたいと言う。それでは中庭でということになって、緑の芝生と植え込みの花壇のところで並んで写真を撮った。撮影係りに友達を連れてきていた。ふだんジャージの体操服でいるのに、今日はわずかにベージュ色をおびた白いドレスを着ている。写真を撮るためにそれを着て来たのかと尋ねたら、「いいえ」と言葉をにごす。髪に色のついたヘアピンも挿している。人一倍しっかりしているけれどもやはり女子高生で、卒業のうれしい気分なのだろう。M先生には、雲南省かどこかの被災地へ救援物資として衣服を送ったので、残っているその洋服を着て来たと答えたそうだ。

最後の日本語コーナーにT先生と出る。他の人たちは日本人教師の会の食事会に行ったが、わたしは、この最後の時期生徒たちと話した方が楽しいだろうと思いい、こちらを選んだ。今日は宿舎の大掃除をしたことを話し、日本に「立つ鳥あ

とを濁さず」という言葉があることを話題にする。残っていた桜茶や水出しの緑茶を生徒たちに贈った。わたしの授業を聞いていない文系のクラスの生徒の中で、日本語コーナーで親しくなった女子学生には、抹茶の残っていたのを渡した。それらの味にどんな感想をもつだろうか。抹茶を贈った生徒が、卒業を前にセンチメンタルになっていて、また会えますよねと言った。生徒の方でもわたしにプレゼントをくれた者があった。気持ちのこもったものがあり、また立派な箱に入った銘茶もある。そういう経験は初めてのことだからうれしい。

次の日、今日は最後の授業で皆さんは明日学校を去っていく、物理ではなく日本語聴解の時間にしようと切り出して、なにやかやをしゃべった。生徒たちは、明日学校を去る浮足立った雰囲気から、初め騒がしかった。高校生にはふさわしくなかったが、励ましの言葉のつもりで白楽天の「東城尋春」の詩を黒板に書いたところには、こちらの話にのってきた。それを消して今度は、「擬詩」と題する四行二十八文字を書く。

瀋陽青年欲渡洋

海東老生來援航

八月之查至日辺

何時再會有親交

二〇〇七年八月十七日

海蝶

生徒たちは感心してくれ拍手が起きた。韻が合わず平仄は全然だめだということわって、八月之查（いかだ）の出典（杜甫）を解説した。彼らは太陰暦八月に日本に渡るのである。期待したように成功した。放課後のクラスでは生徒たちが少し高揚して、写真を撮ろうと言い出すと、寮の部屋ごとのグループが出てきてわたしのまわりに立ち、つぎつぎに写真を撮った。

黒板の「擬詩」を写真に撮った生徒もいた。あとで多くの生徒から、卒業記念用のメッセージ帳に「擬詩」を書いて署名してほしいと頼まれた。「平安」と書いた赤い組みひもと櫛を奥さまにと贈ってくれた生徒があった。また、物理の授業のとき一人だけ生物を自習していた生徒は、以前の約束を果たしていなかったと言って、陶淵明の「菊を採る東籬の下、…」の詩を朗読してくれた。多くの生

徒との対応におおわらわ。たいへん長い一日に感じた。得難い経験が一段落することになった。の気分も少し高まっていたのである。

翌日は、生徒たちもわたしも学校を去る日である。来年のために残すものを仕分けて荷づくりを済ませ、T先生とお別れになにやかや話す。昨日わたしが黒板に書いた擬詩をたまたま見た先生は、あとで文系のクラスの生徒たちにも紹介したそうだ。

三コマの授業が終わった生徒たちは机と椅子を運び出して、教室の大掃除をした。見物していると、日本の大学を卒業したら次にはアメリカに行きたいと話していた男子生徒が、熱心に掃除をしている。そういう作業でも、生徒たちそれぞれの気性が現われる。大掃除が終わったら、いよいよ彼らは、寮から自分たちの荷物を運び出した。荷物はたくさんあるから、三、四度往復して、迎えに来た父や母の自動車に積み込むのである。T先生・M先生と三人並んで見送っているのに、挨拶して去って行った。名残を惜しむ者もいる。三人の生徒が、学生食堂の売店で買ったものか、小さな袋入りのクッキーと飲み物を贈ってくれた。小遣いを出し合ったのだろう、ささやかながら気持ちもこもっている。別の生徒が立派

なペン立てをくれて、手紙が添えてあった。自分は日本語が苦手な話しかけるとが十分でなかったけれど、物理の授業は一生懸命聞いて成績もよくなってきた、と書いてある。ミスのない文章であった。彼らは、翌年日本の名だたる大学に入学した。とても興味深い卒業風景だった。生徒たちは高校三年間の成績などを書いた写真入りの「答案」をもらい、それが卒業証明書だという。大学受験にも使われるらしい。

続いて二人の先生に世話になった礼を述べて、すぐに学校の車に乗った。白老師が同乗して瀋陽北駅のバスターミナルまで見送ってくれる。車中、白老師にも擬詩のメモを渡して、クラスの生徒たちに贈ったことを話した。これはあなたが作ったのかと尋ねられたが、批評を聞くことはできなかった。

寄り道して大連へ

帰国するのに、向かったのは大連である。アカシア祭りに行くという話があったけれど流れていたし、孫さんが大連はいいところだと言っていたこともあり、大連に行きたいという未練が残っていた。大小二つのトランクと重いノートパソ

コンを持ってバスに乗り込む。道中、三人の才媛のくれたクッキーとジュースを味わいながら、景色を楽しんだ。この道筋は、日露戦争以来敗戦まで日本の満州支配にとって重要な交通路であった。もちろん案内人もいない独り旅の人間が、特別歴史を示す風景に気づくこともない。ただ道路に沿う小高い丘にまだ幼い木々が植えられて、緑化計画が進んでいることを知った。

予約した宿は大連賓館。瀋陽の遼寧賓館と同じく、日本の満州支配の時代の大和ホテルである。最後の旅は日中の歴史を尋ねることが一つの目的なので、このホテルを選んだ。ホテルは、中山広場を取り囲む大きなロータリーの外側の一角にある。ロータリーを囲むように建っている建物は、この旧大和ホテルなどと同じく古い建築様式で、歴史を体現している。しかし、それらの後方には高層の現代建築が林立していて、歴史が移り変わっていることを示している。人はいつもこのように歴史の変遷を眼の前にしている。それを把握する力がどれだけあるかが問題だ、そして、歴史の移り変わりを担っているのは個々の人間なのだ、というようなことを考えた。

大連には実は三泊する。旅順へ行こうと思い、フロントでいろいろ聞いてみた。

旅順港は今も中国にとって重要な軍港で、外国人旅行者には解放されていない。もしかしたら一人でタクシーに乗れば、市内に連れて行ってくれるかと期待したが、やはりだめだと言われた。翌朝約束の時間に、昨日予約した時の若者が迎えに来た。まず二〇三高地へ。車が駐車場に着いたら、そこからは独りである。日露戦争の映画を見たことがあるが、映画では二〇三高地は木の無いならかな丘であった。しかし現地は、日本人の普通の言葉づかいでは山である。山巒があり、起伏もあって、傾斜のきついところもある。夏の山はうつそうと茂っている。山道を上がり始めたら、駕籠かきがしつこく勧めて道の端に追い込むようにする。で、その場に座り込んだらやっとあきらめてくれた。彼らには生活がかかっているだろうが、こちらでも考えにふけりながら登って行きたいのだ。頂上のみやげ物屋の若い女性はわりあい日本語が上手だった。ここから旅順港の反対側の渤海湾も見えるのだと教えてくれた。

残念ながらかすんでいて旅順港は見えない。旅順港に砲弾を打ち下ろす高地として激しい攻防戦がここで行なわれたという話から、もっと近いと予想していたが、眼下に見下ろす位置ではなかった。ロシア軍はここにコンクリート造りの要塞を築いていた。その遺跡が残っている。要塞のまわりの斜面は急で、たしかに

攻撃が困難だったろう。ロシア側は機関銃などの新兵器を持っていたのだからなおさらだ。中国の案内板は、自分たちの土地を外国の二国が争った歴史の無念さをにじませている。

続いて、水師營の乃木・ステッセル両將軍の会見場へ行った。平屋の大きな草ぶきの建物だ。その草ぶきの屋根に夏草が生い茂っている。建物の中で日本語の上手な女性が説明しようかと申し出てくれたけれども謝絶して、展示してある写真類を見て写真に収めた。中に、日本軍が中国人を斬首している写真もあった。日露両將軍の会見は、国際慣例に則った紳士的な降伏文書調印であったとされているが、その土地の住民に対して国際法は遵守されなかったのか。建物の外には、日本軍の作った顕彰の石碑などが残してある。日露戦争でのかろうじての勝利が誇大に宣伝されて、後に軍人自身をも捕らえてしまった。第二次世界大戦末期のソ連軍侵入に対する関東軍のもろさが、現実感覚の大切さを教える。日露戦争の当事者は、彼我の力を計量しながら遂行したはずだ。わたしも好きな司馬遼太郎の、日露戦争の前後で歴史を善悪に分ける見方は、必ずしも教訓的ではない。日本の近代は、幕末の条件の中から築き上げられてきた。そこに、この国の歴史にもあるように、明と暗が絡まりあっている。それを多面的に学ぶこ

とが大切だと思う。

午後は、繁華街を通り労働公園へ行った。さらにリフトでテレビ塔のある山に上がり、大連の市街と港を眺めた。瀋陽よりもコンパクトな都市だが、日本の百万都市よりも道路・建物の規模が大きい。為替レートのせいで日本人が優越感をもっているが、モノの総量で中国は日本と肩を並べようとしている。元の対ドル相場が上がったら、ある日、日本よりも大きな国が現われたと、多くの日本人が気づくことになるのかもしれない。本当は突然のことではない。今の国際情勢が続けばそれは確実だろう。

翌日、人民路を見物しながら歩いて、中国東北部の重要な港湾を見るために、大連港へ行った。海を見て、港の風景を数枚写真に撮る。ウィーンの本当の自由が遅れたように、第二次世界大戦終了間際に日本に宣戦布告して中国東北地方に侵入したソビエト連邦が、ここ大連の管轄を返上したのは一九六〇年だそうだ。下関条約・三国干渉以来、回復まで六十五年。アヘン戦争・南京条約から百五十五年経って香港を取り戻したのに比べればまだ短いと言わべきか。歴史に強制されたのだけでも、「百年河清を待つ」中国人の歴史に対処する態度は、まこと

に息が長い。

八月下旬になったが、今日も暑くて汗が噴き出す。優雅な気分では最後の昼食をとうろくと思ひ、旅行案内書が勧めている大連シャングリラ大酒店に闖入した。五つ星の高級ホテルに入るといふような行為は、中国に来て初めてのことである。ドア・ボーイと案内嬢に迎えられて豪華で快適なロビーに入る。日本料理や中国料理、西洋料理もあるという案内嬢の説明に、中華料理を選んで二階へ。昼食用の点心セット（五十五元）を注文した。冷房の効いた立派な餐厅から、庭の大きなネムの木がピンクの花をつけて揺れているのが見える。午後遅く、ホテルの前の道を渡って、ロータリーになっている中山広場のベンチに腰を下ろした。建物の影へ日が沈むのを眺め、さらに三十分以上行き交う人々を見るともなく見る。ぼんやりと、旅の終わりそして四か月余りの中国滞在の終末の情感を味わった。

第二章 蘭州二〇〇八年



退職しての生活は、瀋陽に出かけたことによって大きく変更を受けた。次の年には瀋陽かあるいは蘭州に行くことが決まっている。帰国してからの日々はそのための準備期間という側面をもつことになった。しかも、蘭州の中国科学院近代物理研究所に行くとなれば、そこで一定の研究成果を上げなければならぬまい。ワークステーションなどがある仕事部屋を失ったことの不便さを痛感しながら、物理の仕事を再開した。蘭州から受け入れのメールが届いたのは十月下旬のことである。瀋陽の育才外国語学校へ連絡して善後策をとらなければならぬ。いよいよ忙しくなった。ところで、わたしには要介護度五で身体障害者一級の母がいた。この大変さを家内が引き受けてくれて、瀋陽行きが実現していたのである。年末に家内が一時入院してこの問題が顕在化した。母を老健に入所させることになり、家族もわたしの中国行きを応援すると言ってくれた。

翌二〇〇八年二月末、再び蝶になって蘭州へ飛び立った。

寄り道

甘肅省の省都蘭州は遠い内陸部にあるので、蝶の住んでいる町から直接飛んで行くことができない。そこで、近代物理研究所に推薦してくれた孫教授のいる上海を経由して行くことにした。上海までは、共同研究者のKさんを誘って行った。上海交通大学のゲストハウスは、「学術活動中心」と名付けられている。部屋数六十四、二百人収容の大会議室と、別に中小の会議室も備えている。ここで中規模の集会を開くことができる。一階食堂には、国家主席であった江沢民の揮毫した大きな額が掲げてあった。一流大学を目指せという言葉が書いてある。江沢民前主席はこの大学の卒業生ということだ。

翌日は物理の議論をした。孫さんの同僚で日本に長期滞在して研究者になった趙さんとも議論した。昼食にはほかに理論物理の主任と副主任も同席。昼食後、趙さんの自家用車でキャンパスを案内してもらった。大きな建物が学部ごとに、木々や芝生そして水路と池の間にゆったりとした設計で配置してある。青緑色の瓦で朱色の柱をもつ伝統様式の東大門と、両翼に半円形状に列柱を伸ばしたヨーロッパ風の南門とは、そこから校内にまっすぐに長く伸びる広い道とあいまって、

とても壮麗なものだ。中国人が、大学のような施設を建造するときにも、構えの大きいものを好むことが知られる。国家的資金の注入によって新キャンパスが建設されたと思われる。見たこともないほど広大な敷地だ。学内案内図で知っただけでも、学生寮が八十棟ぐらい。三万人近くの学生が住む一つの町である。

あとで孫さんに主任・副主任が若いと言ったら、正副主任をはじめ同僚は孫さんよりもみな若く、四十五歳以下だという答えが返ってきた。それは文化大革命の影響なのだと。五十代の孫さんあたりから上の世代は、文化大革命中に下放と称して地方に送られ、まともな教育が受けられなかったからだ、というのである。政治の混乱は社会に深い傷跡を残す。中国の学問の全般的な水準が世界と肩を並べるのに、多大な努力が必要だろう。日本で風に翻弄された蝶は、一つの社会で文化が衰退する危険はいつもあると思う。

今回の上海滞在は半ば行楽のためであった。三日目、孫さんの手配で有名な水郷周荘へタクシーを飛ばした。ガイドは、昨日も会った交通大学の女子学生徐平梅さん。マーケティングを勉強しているけれども、放課後の専門科目外の授業で、孫さんの物理を受講しているということ。彼女は、われわれを案内するために、

昨夜予習をしたそうだ。周荘の見どころを巡った。この辺一帯に運河を築いた富豪の藩万山の物語が、何枚もの屏風板に浮彫で描いてある。徐さんは、富豪が朱元璋によってさびしい末路を迎えたことを説明してくれた。興味深い物語だ。屏風絵だけではよく理解できなかったろう。万金を積んで開いた水郷の顛末を見た春はうららかであった。

蘭州に着いてから、周荘（中国の現代表記は周庄）へ案内してくれた徐さんにお礼のメールを出した。つい例の癖が出て、戯れに漢字を並べた詩のようなものを添えた。題して「両三戯語」、

東風渡海来逝江

周庄水辺梅花香

潘氏富貴不足頼

酒家良肴充腹腔

数日して返信が来た。文末で「The poem is lovely. So I have written an ugly doggerel just for fun.」と言ったあつに、次の詩が書いてあった。

陽春三月游周庄

風景撩人蹄膀香

太平曾時中日情

今朝再讀緣未央

わたしの四行は発音も知らない者の真似事だが、返詩は同じ韻を踏む技巧がこらしてある。季節に合わせ彼女の名を入れて梅の花が香るとしたら、同じ位置に香の字が置かれている。「潘氏酒家」で食べた周莊名物の豚の脚も詠み込んである。その地の風光を多くの画家が愛して、かつて日本の女流画家も滞在したことがある、と彼女は言っていた。楽しいメールのやりとりであった。わたしが漢字を並べる戯語こそ *doggerel* なのだけでも。

蘭州その一

新しい出会い

翅を休み終えた蝶は、上海の虹の橋をあとにして甘肅省蘭州へ飛んだ。内陸部の高地にある蘭州は三月初めには寒いだろうと考えていたけれども、機内アナウ

ンスは現地の気温が十七度と言った。實際降り立ったら寒くない。東海の蝶が予想していたよりも過ごしやすいかもしれない。空港に迎えに来たのは柳という人だった。日本の研究所に二、三年滞在したことがあるそうだ。日本の職階で助手に当たるだろうか。運転手つきの研究所の車で蘭州市に向かった。道中一時間ぐらい、山々に木はほとんど茂っていない。道脇の斜面に苗木が植えられているのが見えるだけだ。ところどころに雪が残っていたが、全体として暗褐色をした景色が続く中を行くのである。日本の蝶にはたいへんさびしい風景だ。

案内された宿舎は、研究所職員のためのアパート群の中の一室であった。荷物を置いて鍵を受け取るとすぐ、まだ五時前だが、柳さんが夕食に行こうと誘う。そこから遠くないレストランで牛肉と海産物の鍋物をふるまわれた。この内陸部にも鍋に入れる比較的新鮮な海産物が来ているのだ。宿舎に戻ると、外国人応対係りの梁という人が、ここでの当座の暮らし向きについて説明してくれた。不便なことに、宿舎でインターネットが使えないことが分かった。また、洗濯機がないから、向かいの部屋で使わせてもらうようにと言われた。その向かいの人物があとでやって来て、いつでも声をかけて洗濯機を使いなさいと親切に言ってくれた。ドイツの大学の大学院生 D 君で、原子物理が専門だと自己紹介した。中国で

結婚した夫人は中国人だという。近代物理研究所には、世界各国から研究者が来て短期間滞在し、このアパートの一室が宿舎に提供されるらしい。

翌日、柳さんが、こちらの区画と道を挟んだ向かいにある近代物理研究所に案内した。まず、研究所で一番高い十二階建ての最上階にあてがわれたオフィスへ。机上にコンピュータが用意されている。水道の水が飲めない中国ではたいいてある飲料水の大きなボトルがあり、部屋の片隅にトイレもある。独りで気兼ねなく過ごせるだろう。次に実験棟の方へ。わたしは理論研究者だが、ここは大きな粒子加速器を持つ実験研究所である。規模が大きいから、研究費に理論研究者を受け入れるゆとりがあるのだ。中国の加速器を利用する研究拠点の一つで、狭義の物理関係分野だけでなく、加速器から出る粒子・放射線を利用する医療分野など、さまざまな分野の研究が行なわれている。

わたしを受け入れてくれたのは、低エネルギー原子核実験分野の実験家である。その主任教授である周小紅さんと張玉虎さんの二人は、それほど広くない部屋の向かい合った机に座っていた。初対面だが温かく迎えられた。後に知ったところでは、二人は毎年日本の原子力研究所に実験に出かけるそうで、日本人に

なじんでいるのだ。ほかにも同じ階に四つ、別の階に一つ部屋があり、そこにスタッフがいる。定年を過ぎた人が、柳さんたち二人と同じ部屋にいた。別の定年を過ぎた教授二人がそれぞれ一室を使っているようだ。それに対して、周・張二人の教授が相部屋なのはおもしろい。敬老の精神だろうか。大学院生の部屋もあり、ずいぶん広い。低い仕切りでたくさん小さなブースに分けられていて、それぞれ机と椅子とコンピュータが置いてある。

その日の午後、周さん張さんといろいろ話をした。わたしのやっている計算を知った張さんが、自分の実験のデータを見せて、中国の雑誌に予備的な報告を出しているが、もし理論の分析ができたらアメリカの雑誌に投稿したい、と言った。幸運なことに、わたしはちょうどその原子核領域の計算を準備しているところだった。うまく行けば共同の仕事が出来て、客座教授の任務が果たせるかもしれない。幸先がいいと思っていたら、紹介された女性研究者の李教授に、近くチベット寺院に行くから一緒に行こうと誘われた。

研究所での仕事と生活が始まった。四日目にあらかじめ時間を打ちあわせて、向かいのドイツ人青年のところに洗濯機を使いに行った。夫人の周さんもいて洗

剤を入れて洗濯機を始動してくれる。仕上がるはずの時間に行ったがまだ終わっていないくて、ジュースをごちそうになりながら少し話した。若い二人がどうやって結婚することになったのか聞いてみたら、彼が北京へ中国語を習いに来たとき知りあったのだそうだ。夫人は北京大学出だ。この研究所でドイツ語のクラスをもっているということ。部屋に戻って出かけようとするところに、パキスタン人の家族が来た。二歳足らずの女の子が一緒だ。到着の日に相部屋になると告げられていたのである。わたしの方は別の部屋に移るのだが、その部屋の手直しが終わるまでしばらく同居になる。夕方、夫人が独りで帰って来て鍵がなくて困っているのに出くわした。梁さんがやって来てのやりとりを聞いていると、女の子が熱を出して入院し、病院には父親が泊まることになったようだ。夫婦は到着早々に災難だ。パキスタン人は英語を話せるのに、母親ではなく父親が病室にとどまる理由は分らない。

蘭州に来る前にわたしは、グーグル・アースと地図で研究所の場所を探し当てていた。住所の通りの名を地図で探すと市街地だった。大きな加速器が街中にあるのかと意外に思ったが、衛星写真はそれらしい大きさの建物を映し出し、そこ

が研究所だろうと見当がついた。蘭州駅からまっすぐ北に延びる道路に面している。駅から二キロメートルぐらいだろう。道路の名は天水路。中国では各地の都市名が道路の名に使われる。わたしは、天水が西安を出て甘肅省に入ると最初の都市だということを知っていた。杜甫が戦乱後の大飢饉を避けて一時滞在したところだ。天水路という名は高貴な響きがあって気に入った。

その天水路を南に下ったところ、蘭州大学の向かいに大きなスーパーマーケットがある。胡鈞という大学院生が最初に案内してくれて、炊飯器や台所用品と食料を買った。その後もよくわたしの世話をしてくれた。気持ちのいい好青年だ。彼がさかんにガールフレンドと言うので、結婚するつもりかと聞いたら、実は二月に結婚したと言う。アパートを買ったと。値段を聞いたら、四十五万元。自分は雲南省の出身で、彼女は蘭州から一時間ぐらいの町の出身だが、両方の両親が三十万元用立ててくれたので、あとは二十年ぐらいのローンで払うところ。ところで、その家は内装工事が七月までかかるという。中国では、新築アパートは内装せずに売りに出され、買主が購入後に自分の好みに合う内装工事を発注する、ということを知った。現在はそれぞれ別のところに住んでいるのだ。胡君の方は、研究所のアパート群の中の独身者用の部屋に住んでいる。

おいおい分かったことは、彼は大学院生だがスタッフの一員に採用されているということだ。少し給料をもらっているのだ。独身者用の部屋も研究所の一員だから住めるのだろう。興味深いことは、結婚に際し研究所が一時金を支給したということである。そのお金を内装工事にまわせると言っている。見込まれているということがあるのかもしれないけれども、まだ大学院生として研究者になる訓練期間中に、安定した将来の生活設計が出来ているというのは、日本では考えられないことだ。総じて、中国の大学院生に対する処遇は、奨学金や学生寮など、日本よりもずっとよい。これは、日中の教育・研究の将来に影響せずにはいないだろう。

黄河第一橋のある都市

最初の土曜日、オフィスにいるところへ、柳さんから Yellow River に案内しようという電話がかかってきた。微熱があるけれども出かけた。市内のことにくわしい大学院生も一緒だ。蘭州は、黄河沿いのそれほど平地の広くない場所にある。軍事的な拠点都市として発展してきた町だから、戦略的に守りやすい土地が

選ばれたのであろう。黄河の北側には山が迫っていて、市中心部は黄河の南にあり、山で限られている。南岸には遊歩道や公園が整備されていて、おおぜいの市民が休日を楽しんでいた。何人もの大人が風揚げをしている。音に名高い黄河は、名の通り黄色い濁流である。流れは速い。水辺に行って流れに手をつけてみた。特別変わった点があるわけではないし、ここは上流だけれども、中国文明を育んだ黄河の岸辺に立ってその水に触れたことがまずはうれしい。

岸辺に簡単な椅子や長椅子を置いてお茶を飲ませるところがある。われわれはその長椅子に座って、この名物の八宝茶を注文した。花のお茶で氷砂糖が入れている。それに、コルクの栓をつけた保温ポットから湯をそそいでくれる。コートを着ているし天気もよかったのでそんなに寒くはない。微熱の頬に河の風を受け、のんびりとその八宝茶の甘さを味わいながら、行く河の流れを見つめて風情を楽しんだ。また異国に、それもずいぶん土地柄の違うところに来たのだと思う。羊の皮を縫って膨らませた浮きを九頭分くりつけた筏を見た。土地の人々はこれで流れの速い黄河を渡っていたのだろう。そこから中山橋まで移動。橋のたもとに黄河第一橋と書いた大きな石碑が立っている。観光客だろう、さかにその前で記念写真を撮っている。わたしも一枚撮ってもらった。柳さんが、日中戦争

の時この橋を通ってソビエト連邦から物資が運ばれてきた、という話をした。

去年瀋陽の高校生が、蘭州は空気の良くないところだから気をつけてくださいと心配してくれた。実際空気はよごれていて、十二階の部屋から遠くをよく見通せない。その上、空気がとても乾燥している。張さんが、喉を傷めないように水分を十分取るように、と忠告するほどだ。オフィスの床に水を撒いて乾燥を防いだけれど、それもすぐに乾いてしまう。着いてから小雨が降っただけなのに、三月の半ばを過ぎると柳が芽吹き始めた。常緑樹もわずかつ新鮮な緑に変化している。ここでは木々が切実に春を待っているのだ。

休日の午前、甘肅省博物館へバスで出かけた。公共汽車の路線を表示した地図を買って道順を予習しておいたのである。少し早めに着きそうなので、地図にある小西湖公園で降りて散歩をした。まだ気温は低く感じるのに、もう桃やレンギョウや名を忘れたが日本にもある花々が咲いていた。やはり春の花の開花が早いのだろう。研究所周辺では花を見かけなかったの、うれしい驚きだった。子供連れや老人や若い人が、待っていた春の到来を楽しんでいる。食事をするような店が見当たらないので、通りに戻りタクシーで博物館へ。ところがどうしたこと

か門が閉まっている。ただ補修のため休館したという掲示があるだけで、いつから開館するかも書いてない。地元の人に案内されてきた西洋人のグループも引き上げて行く。仕方なく中山橋まで引き返し、黄河の遊歩道を散策。

ある日、胡君に手助けを求めて携帯電話を買いに行った。外国製品は人気があつて値段が高いようだ。四千元近くのものである。安いのを探して二百元の中
国製を買った。胡君のはNOKIA製品で千数百元したそうだ。路上で百元分の通話料のチップを買ったら五十元。たくさんの路上販売人がある。中国の物品流通システムはよく分からない。いろんな雑貨を売るのに、至る所にある小売店から路上販売人までいる。これで、そのうちアメリカに次ぐ経済規模になるのだ。どのくらい今の小売システムが残るのだろうか。それは社会システムやコミュニティにも関係するから、今後の成り行きが興味深い。ところで、わたしの住んでいるアパート群の門で段ボールを集めている人がいる。それでどうやって生活するのか理解できない。研究所の主な建物には一日中守衛がいる。通りには毎日清掃する人々もいる。とにかくたくさんの人たちが何かの仕事をしている。これらの経済費用はどうなっているのだろうか、それによって膨大な人口が食べていつて

いるのだと思うけれど。それでも通りには、自分の手職を書いた板切れのそばに座って、仕事を待っている人がいる。研究所の近くの交差点にある歩道橋には物乞いが座っている。

パキスタン人親子との同居は十日足らずで終わった。すっかり内装が一新された今度の部屋は、前の部屋よりも広くてベッドルームが一つ多い。部屋の一つにはバスタブ付きの浴室が付属している。別にもう一つバスタブと洗濯機を置いた洗面所がある。新しく冷蔵庫・洗濯機・電子レンジ・電磁調理器などもそろえたようだ。荷造りを解いてタンスに整理した。アイロンや電気スタンドなども買い足したが、電気スタンドの台をとりつけるボルトがなくて、タクシーでまた引き返し、取り替えてもらう事件も発生。それにしても、部品の不足した新品が売り場に並んでいるというのは、物品管理が行き届いていない。

毎朝早く目が覚めて疲れているので、早めにベッドに横になっていたら、チャイムが鳴った。出てみたら、二人の西洋人と案内してきた中国人が入ってきた。ロシア人が二人来ると聞いていたが、こんな早く来るとは思わなかった。彼らも別の部屋から移ってきたようだ。自己紹介によれば、ロシアの加速器のある研

究所からの来訪者で、イオン加速器関係の仕事をしているE氏と化学を専門とするL氏。一か月の滞在という。しばらく独りでゆっくりできる、疲れから回復したいと思っていたのに、また緊張感を解くわけにいかなくなった。しかし相手は中年男性二人だから、こちらもせいぜい自由にふるまうことにしよう。バスタブつきの部屋に入ったのは、床に就くのが早いわたしにはよい選択だった。つぎつぎに経験したことのないことに出会っている。

わたしは食卓で食事をしていたが、ロシア人L氏はいつも、中国茶をカップに入れると居間のソファで本を開いて、それからパンとヨーグルトの朝食をとる。もう一人のE氏は陽気で短い会話をしていたが、物静かなL氏とはお早うと声をかけ二言三言言葉を交わすだけであった。ところで毎朝規則正しく開いているのは『聖書』と思われたから、いつも『聖書』を読んでいるのかと聞いてみた。すると、そうだという返事と、おまえは『聖書』を読んだことがあるかという質問。わたしは、『新約』は読んだ、『旧約』の一つ二つも読んだと答え、こちらで読もうとしていた岩波文庫の『出エジプト記』を見せた。

こうして、おとなしい彼が積極的に話し出した。おまえは物理学者で、ビッグバンというようなことを信じ、進化という考えを受け入れているのであろう、し

かし、世界は神によつて創られたのだ、というようなことを語った。母親は正統派クリスチャンだったが、父はそうではなかった、などと。わたしも、両親は熱心な仏教徒だった、しかし、仏教では世界を異なるように見る、世界が誰かに創造されたというような考えを出発点に置かない、それでも、精神的なものを尊重するのだ、と話した。おまえは信者かという問いには、信者ではないが仏教的な考え方を尊敬すると答えた。彼が神について語ったときの眼の輝きは印象深かった。この静かな人の物腰の基盤には信仰心があつたのだ。思わず話がはずんだのに、彼はここでの仕事が終わつて、明日には北京經由でモスクワに帰るという。いつの日にか会えたらという型どおりの言葉で、今朝の有意義な会話は終わった。夕方、善良なロシア人はベッドなどをきちんと片づけて去った。

早春が足早な歩みを見せる頃、去年の就労ビザの期限が切れるので、更新のために通りの健康検査を全部受けた。腹をエコー検査されたのは初めてである。視力検査は、漢字の「山」が上下左右どの方向を向いているかを答える。おもしろい体験であつた。胡君の案内で望んでいた黄河に浮かぶこともできた。遊覧船に乗つて飲み物でも飲みながら楽しみたかつたけれども、人数が揃わないとだめ

だと言われて乗ったのはモーターボート。あいにく曇天で肌寒い天気だった。雪解けの水だろう、水かさを増してとうとうと流れている黄河を、ボートは水しぶきをあげて船足速く走る。黄河の神「黄河母神」が祭られているあたりまで行つて引き返した。下流側もそんなに遠くまでは行かなかった。本当は蘭州の東で屈曲して北流するところまで船旅できればうれしかったのだけでも。

船着き場のある中山橋のたもと近くに、白塔山に上る索道がある。先日登らなかったから、今日はそこを目指した。この索道は黄河を空中で渡り、黄河と蘭州の町並みを眼下に収めることができる。山腹には青緑色の屋根の多くの伝統風の建物があり、先日は寺院という説明を受けたけれども、胡君の話では観光スポットを美しく見せるのが目的らしい。たしかに、これらの建物に人影はまばらで、積極的な使用目的があるようには見えない。白塔山頂上から埃でかすんだ蘭州市を見た、中国の辺境とも言えるこんな内陸部まで来たと思ひながら、その景色を目に焼き付けるように。下山中ふもと近くで、胡君がノーベル物理学賞を受賞した李博士の小さな記念碑を指差した。夫人が甘肅省の人で蘭州によく来ていたらしい。蘭州大学で講演したことがあるそうだ。李博士は米国民になったが、ノーベル賞受賞は中国人にとって誇りなのだ。

＊＊様、ご無沙汰しています。お元気ですか。

小生は蘭州に来て、デューティーのない客座研究員として日を過ごすという得難い経験をしています。こちらの給料をもらっているのです、いったん退職したのに、少しは何かをしなければとけっこう忙しくしています。達観というのは難しいことのようにです。……

今研究所の教職員の住んでいるアパート群の一室にすんでいるのですが、先日の日曜日の昼前買い物に出かけようとしたら、門のところに赤い昔の衣装を着た人が何人も集まっていて、その中に赤い輿（輦）が見えました。すぐにカメラを取りに帰ろうとしたら、わたしを受け入れてくれた周さん夫妻が来たので、「何事ですか。結婚？」と聞いたら、どこかの会社のイベントでしようという答え。とにかくカメラを取って戻ってきたら、あなたの言うとおり結婚式だったと教えてくれました。

伝統衣装を着た人たちは、招待所（外来者宿泊所）で花嫁の出てくるのを待っていました。花嫁が輿に乗ると、花嫁行列は銅鑼や太鼓や笙を鳴らし、八旗や飾り

物を捧げ持って、敷地内の花婿のアパート前まで進みました。総勢五十人近くいたでしょう。階段入り口には「喜喜」のシンボルが貼ってあって、五階にある花婿の家にも別のお祝いのシンボルが貼ってありました。二十分ぐらい待ったでしょう、やがて花婿と花嫁が下りてきて、花嫁は輿に、花婿はその前を歩いて、花嫁行列は華やかに通りに出て行きました。近くで祝賀パーティーをしたようです。ちょうど、退職後も契約して研究所に來ている老教授に会いました。中国でこのように婚礼を見たのは初めてだと言うと、老教授も、わたしもこういうのは初めてだと言うではありませんか。今の中国で、こういう伝統的な儀式をするとは珍しいのです。わたしは、被いの隙間から見えた花嫁の横顔が異国風だったのを不審に思っていたのですが、老先生の話では、花嫁は三年前カナダに行き、花嫁とそこで知り合ったということでした。カナダの女性だったのです。国際結婚を祝うために、特別に伝統の様式を採用したのでしょう。ブライダル・プランナーが無線でやりとりしていました。

花嫁になるというのは一生の中で一大事ですから、とても興奮していたと推察できます。その上、西洋人が文化の異なる東洋に來て、伝統の衣装をつけて花婿の家に輿入れし、花婿の両親に對面する儀式などをしたことは、強い印象となっ

て一生忘れられないでしょう。興味ある光景を見ることができました。

西遊記

ロシア人のやって来た翌日の日曜日八時前、天水路を挟んで研究所の向かいにある金城賓館に向かった。今日は、李女史がスペインからの来客E教授夫妻をチベット寺院へ案内する日だ。ほかに研究所の人も数人行く。E夫妻に挨拶すると、わたしは二人の大学院生と一緒にハイヤーに乗った。大学院生二人は同姓だ。中国には姓の数が少ないから不便である。わたしのように人の名を憶えるのが苦手の者にはよけいにやっかいだ。片方の郭君の方が後部座席でわたしのお相手をして、いろいろ説明してくれた。彼は日本の歴史に関心があるようだ。吉田松陰・木戸孝允などの名を知っていた。人名を中国音で聞いても理解できないから、そういうところは筆談である。わたしが漢詩が好きだと話したら、杜甫が李白のことを詠んだ「白也詩無敵……」で始まる「春日憶李白」の詩を書いて示してくれた。暗記しているのだ。

郭君は泰安の出身で山東大学を出て近代物理研究所の大学院生になったのだそ

うだ。もう一人の郭君の方は、新疆の出身で蘭州大学に来たという。現代の中国では、人の移動が頻繁だと察せられる。後に聞いたところでは、周さんは甘肅省出身だが、張さんや柳さんは東部から蘭州に来たという。広大な中国で、非常に異なる風土と多様な文化を持った地域の統合が進んでいる、と考えられる。地球規模の統合と同時進行しているのだ。瀋陽で会った青年たちは日本まで出かけて行く。

さて、チベット寺院へ行くと聞いていたが、青海省の省都西寧にある塔尔寺（タール寺）という寺に行くのだという。車は黄河に沿う道を西へ走り始めた。中山橋から遊歩道を西へ二、三百メートル行ったところに、『西遊記』の例の四人の金色の像がある。そこからいよいよシルクロードの回廊に入るのだ。三蔵法師は馬に乗り、先頭に額に手を当てる西を望む孫悟空がいる。今日はその玄奘を真似て西域へ、ただし日帰り旅行である。

黄河を北岸へ渡ると間もなくシルクロードの幹線から逸れて、車は黄河の支流沿いに西方へ走って青海省に向かった。山々は、草か灌木で枯れんばかりの黒緑色。わたしの目にはほとんど乾いたはげ山のように見える。よく見ると、畑が耕

され始めて、水が導かれたのであろう、ところどころ土の色が違う。この乾燥した土地に古くから河の水を引いて耕作してきたものだろう。地図で見ると高地を表わす土色が濃くなっているの、あまり開けたところではないだろうと錯覚していたが、平地は耕されている。それも日本に比べれば広い。ここは相当の人口を支えることができるだろう。畔のポプラや柳などの高い木々が枯れた枝を広げている。河の近くは林のようになっているが、緑豊かな国から来た者には荒涼とした感じがする。『西遊記』の物語は奇怪だけれど、長安から来た人にも、その風景は異域の感が強かっただろう。赤土だけのはげ山もあって、その先が少し想像される。

そのうち、道に沿って鉄道が走っているのに気付いた。これは最近開通したラサに行く鉄道ではないかと思う。郭君に訊いたら、前席のもう一人の郭君がそうだと答えた。線路に沿う鉄柱も新しく、バラスの色もまだくすんでいない。単線のような。これが青海の高原に上って行くにつれて、町から離れ人家もいなくなり、荒々しい自然だけになっていくのだろう。唐の文成公主がチベット王家に嫁いで行ったとき、この道程は何日かかったのだろうか。宿舎に帰って地図を見ると、青海湖近くまで行ったのだ。できたら青海湖まで足を延ばしてほしか

った。

塔爾寺は、西寧の西のはずれにあるようだ。チベット僧が多数歩いている。多くの男女の参拝者を見た。女性の左前合わせの衣服は和服に似ていると思う。知識としてだけ知っていた五体倒地での前進を初めて目の当たりにした。乾燥した埃だらけの大地を寺に向かって進んでいる。寺院では、多くの人が五体を投げ出してはまた立ち上がり祈っている。日本の手を合わせるだけの礼拝とは大いに違い、印象的だ。チベット寺院の装飾は色彩が鮮やかで多彩である。そして鹿や牛の剥製が、中国とも異なる独自の文化であることを物語っている。入り口にチベット文字と漢字とを書いた如来八塔があった。小金瓦堂と大金瓦堂、二つの黄金の屋根をもつ建築がある。チベット仏教の活仏の考え方から、ここはある人物ゆかりの特別の土地で、チベット仏教の聖地の一つらしい。

塔爾寺の入場券の写真は、緑の木々と山は草のような緑を示しているから、夏にはもっと晴れやかだろう。何かの花のつぼみが開きかけていた。ここに来る道中では、春の耕作が始まって、女性が色とりどりのスカーフを頭につけて種を蒔いている姿を見かけた。モスリムかと訊いたら、地元のこと詳しい郭君の方が

そうだと教えてくれた。チベット寺院のあるこのあたりにもウイグル族が住んでいるのだろう。それにしてもここでは水が貴重であることが分かる。水を流してものを洗う日本と違う文化が育たざるをえないのだ、と思う。またさまざまのことを考えた。ところで昼食のとき疲労感が強く、二、三度頭痛がした。標高二千五百メートルの高地だったからだろうか。

その日塔爾寺で十人ぐらいの警察隊を見かけた。後に知ったのだが、前々日にラサで住民と警察との衝突により死者が出るといふ事件があつて、警戒をしていたのだ。インターネット・ニュースによれば、ダライ・ラマの亡命機関は死者八十人と伝え、中国側の発表では死者は十人を超えないとしている。蘭州でも百人余りのチベット人学生がデモ行進をしたらしい。ダライ・ラマはしかし抑制的に、北京オリンピックは開催されるべきだと発言している。塔爾寺を訪れた時わたしは、緊迫した空気を感じることができなかった。五体を地面に投げ出してはまた立ちあがつて祈るチベット人の胸中は大きく揺さぶられていて、それだけよいに祈りは痛切であつたのかもしれない。

蘭州その二

北京再訪

四月の下旬、朝起きたら雪が積もっていた。八重桜の花をさらに雪が飾るという異例の美しい光景に会う。ところが柳さんは、「陽春白雪」という言葉があるではないか、とすました顔をしていた。去年は五月に雪が降ったそうだ。この日北京から、飛行機の便名を教えてくれという電話がかかってきた。以前からの知人に再び中国に来たことをメールで知らせたら、北京に来ないかと誘われて、翌々日行くことになっていたのである。その人は中国科学院理論物理研究所の趙教授という。定年を過ぎて七十近いがまだ大学院生を受け入れていて、今も研究活動に従事している。

北京空港には趙老師自ら迎えに来てくれた。歳をとると古い友人に会うのがうれしい、と言って歓迎された。たしかに少し老けたように見える。ラッシュアワーの自動車道から、完成間近の北京オリンピックピックのためのスタジアムが見え、変

貌する北京を印象づけられた。案内された理論物理研究所は、十三年前とはすっかり違う。以前泊まった構内の宿舎も建て替えられている。一階二階は所員向けの食堂で、三階にある民間業者が経営するレストランで、その晩の夕食をこちそうになった。趙老師は、手ごろな値段で食べられるので家族で来ることもある、と言っている。十三年経って北京市の生活の水準は格段に上がっているのだ。三日目の夕方近く、時間が空いたので思い立ってタクシーを拾い街へ出て、王府井をぶらついたときにも、北京が一新されていることを知った。

滞在最後の日、趙夫妻に紫禁城を案内してもらう。故宮見学は二度目だが、その規模の壮大さにはやはり感嘆せずにはおれない。前には太和殿や他の建物の屋根に夏草が生えていたが、北京オリンピックに向けて修理改装が行なわれて、きれいになっている。太和殿はまだ改装中であつた。測量や調査が行なわれたようだ。北の玄武門から入った。そこに近い内廷は溥儀が幼少の頃から生活したところで、今は公開されていて、写真や身のまわりのものが展示されている。宣統帝が子供の頃からモダンな生活をしていたことが分かる。家具やシャンデリアなどヨーロッパ製品がたくさんある。これらの品々も今は歴史を偲ぶ展示品となつた。わたしは瀋陽で見学したヌルハチの福陵を想い出す。

帰途飛行機から見た黄土高原の樹木のない平原と山々は、大地の峻厳さを示して目に焼きついた。面としてその広さを実見すると、ここに木を植えて砂漠化を防ぐことの困難さが判明する。はじめ地面の上の黒いところが何か分からなかったが、それは雲の影であった。悠々とむき出しの大地の上の影と行く雲は緑の春を探している。

***さん

蘭州に初めて着いたとき、空港から七十五キロメートルの長い道の両側の山々にはところどころ薄くくすんだ灰緑色が見えるとはいえ、はげ山が続いて荒涼とした印象を受けました。北京へ行くため二度目に通ったときは、もう少し落ち着いて観察できました。木々が緑を濃くする時季なのでその気配が見えます。よく見ると、山々の等高線に沿うように六十センチメートルぐらいの帯状の平らなところが作られて、そこに植林してあることに気付いたのです。まだ一メートルにも届かない若木です。それが道の両側に延々と六十キロメートル以上続いていたのでしょうか。これだけの植林にはたいへんな労力が要ったにちがいません。

感動をおぼえるほどです。場所によってはスプリングラーが設置してありますが、この乾燥した気候では、一度植えても何割かは枯れて育たない木が出るでしょうから、あとの手入れも必要でしょう。

最近知ったフランスの Jean Giono という人の『木を植えた男』という本を想い出しました。それは飾りのないしかし力強い文章の短い作品です。絵本にもなっています。遼寧省でも郊外の山々に植林してあるのを見ました。中国で大変な数の人々が人力で植林を行なっていることが知られます。三十年後にこれらの山々に緑の林が甦ったら素晴らしいことですね。ぜひそうなってほしいものです。あなたが将来その木々の中に立ったら、それら無名の人々の努力に感謝することでしょう。……

言い忘れてはいけないことがあります。大観園を訪れました。残念ながら宝玉・黛玉や宝釵ほかの人たちには会えませんでした。人形が留守番をしていました。大きな池を巡るように、作中人物たちの家々があります。彼らがどのような生活空間の中で暮らし、ドラマを演じたかを想像することができました。怡紅院から廻って行って瀟湘館を出たところで、困ったことにデジタルカメラの電池が切れ

てしまいました。紫禁城で撮りすぎたのです。一眼レフのいいデジタルカメラを持って行っていた趙老師があとでCDに焼き付けてくれました。趙老師はまた、一九八〇年代後半にここでテレビドラマの撮影があり、その後整備されたと話してくれました。そのとき黛玉を演じた女優のイメージが中国の人たちを強く印象付けたそうです。みやげ店でその圧縮版のDVDを買いました。のどかな風情を味わいながら、楽しい時間を過ごしました。

しかし、もう一人の＊老師、『紅樓夢』を五回も読んだという人が小説の内容に触れながら説明してくれたら、もっと楽しむことができたことでしょう。

蘭州滞在外国人一行

北京へ旅立つ前の日、わたしのアパートに新しい同居者が来た。四半世紀前にアメリカに渡って、家族とサンフランシスコに住んでいる謝という中国人。今はアメリカ国籍だという。陽気で、たしかにアメリカ人タイプになった人だ。北京から帰った翌日には、今度は三泊四日の旅に参加するという忙しい日程が待っていた。甘肅省が大学や研究所に来ている外国人を招待してくれるのだ。謝さんと

わたしとはバスの隣り合った席に座り、いろいろ話してお互いを知ることができた。

招待された外国人は主に甘肅省に來た英語教師である。アメリカ・カナダ・オーストラリアなどから來ている人は少数だ。英語が母国語ではない人の方が圧倒的に多い。ドイツ・スウェーデンなどのヨーロッパから、そしてエジプト・モロッコ・赤道アフリカなどから來ている。二人の西洋人は腕に入れ墨をしていた。わたしはその人々の構成と文化的な背景に驚いた。大学の英語教師を内陸部にある甘肅省では求めにくいのだろうと推測される。別に若い日本人が二人いた。蘭州大学に日本人留學生がいると聞いていたが、この二人は日本語教師として蘭州に來たもの。一人は中国人女性と結婚していた。

バス二台を連ねたわれわれ一行は、まず会寧県にある紅軍長征會師樓へ案内された。瑞金を出た紅軍は、国民党政府の包圍から抜け出て、追撃を受けながら行軍を続けてこの地に會同した。退却戦は古來最も困難な戦だ。当初三十万あった紅軍は、この地に會同したとき三万弱になっていたという。しかし一九三六年十月この地に集結した紅軍へ、政府軍の攻撃の手は届かなくなっていた。この情勢

の中で、奉天から陝西省に移動していた張学良が、督戦に來た蒋介石を軟禁するという西安事件が起きたのだ。二か月後の十二月のこと。というようなことを、ここを訪問する機会を得て改めて知った。この会師（軍集結）は長征が終了する出来事となったので、それを記念して建物が建っている。人民解放軍の歴史を顕彰し、長く記憶にとどめるための展示館である。

説明文の中に「日本軍国主義：」と書いてあるのに反発するような日本語が聞こえた。今の若い日本人で歴史をそれほど知っていない人には違和感があるのだろう。わたしには、二十世紀に、地図が示す一万二千五百キロメートルもの退却戦が行なわれたというの方が驚きである。中国だからそういう出来事が起きたのだと思う。中国の歴史上、黄巾の乱や紅巾の乱など、何度も大衆反乱が国中を席卷し、その中から新しい王朝を建てる者が出た。紅軍の長征はこの流れをくむと見ることできよう。後に上海の魯人記念館を訪れる機会があったおり、会同した紅軍へ魯迅の発信した電報を見て、この旅を想い出して感慨深かった。中国の歴史が大きく転回しようとしていた時に、結核を病んで死期の迫っていた魯迅の触角は機敏に働いたのである。同じ十月のうちに彼は死んだ。将来の中国の希望を託す思いであつたらう。同じ状況を見て、日本のファシズムは日中全面戦

争へ突き進んで行った。

バスは寧夏回族自治区を通る山越えの道を進んだ。こんな機会がなかったら来ることもなかっただろう。山には少し木々が見られ、平地には小麦の畑があり、菜の花畑もあって、ある程度肥沃な土地と見えた。甘肅省平涼市に下りてきたら、その感じがより強くなった。農地へ水を供給する水路に水が流されている。平涼市全体で人口二百万ということだが、蘭州よりもずっと小さな中市だ。その西郊のまだ舗装も済んでいない整備中の道を進んだら、元農地であったところにくられた五つ星のリゾートホテルがあった。ホテル自身もまだ整備中だ。お金のかかったホテルだと分かる。梁、謝の二人に、この施設に見合うほどの滞在客が来るだろうかと思ねたら、そうは思わないという返事。途中から公安の車輛がわれわれのバスを先導し、晚餐会には若い副市長が出席して歓迎の挨拶をした。さらに、市の関係者が各テーブルに回ってきて、ワインのグラスを互いに飲み干すという儀礼が行なわれた。謝さんが、こういうのが中国流だと言う。この五つ星ホテルは平涼市が観光開発を狙ったものだろう。われわれ外国人の宿泊は、開業早々の利用と思われる。

謝さんといろいろな設備のある温泉に入ったあと、改めて配られた日程表を見ると、裏側に平涼市のことや目的地の崆峒山のこと書かれている。それによれば、平涼市は蘭州よりも北側を通るシルクロード支線の東の出入り口として、古くから開けていたらしい。そして崆峒山は西母王の聖地として中国西部の名山だと。周の先祖はこの地方から関中平原に進出したのだという。西南側を山が走っていて東流する河に沿った平地は比較的緑が多い。地図で見ると、関中平原の奥というふうに見える。西母王の伝説と周の先祖の地という話が、黄河文明の黎明期へわたしの空想を誘う。ホテルはその崆峒山が見えるところに建てられていて、コブダイのような形をした特徴ある峰が遠望できる。

翌日われわれは崆峒山に行き、ダム of 近くからロープウェイで上がった。わたしは西安に行ったおりに華山の頂上に立ったことがある。そびえたつ華山に比べれば、低いし登りやすい。崆峒山はむしろその山容によって古代人の心を捉えたのである。道教の聖地であり仏教の寺院もあるが、この山の聖性はそういう宗教とのつながりよりも古いだろう。自然物の聖性は、その地方に住む人間の伝承の中に保存される。関中に本拠地を置いた秦の始皇帝がこの山に登ったという話

は理解しやすい。漢の武帝も登ったらしい。説明文には、司馬遷・李白・杜甫・白居易・林則徐など名のある人々が訪れ、詩を残したとある。

山頂から下りて法輪寺の駐車場近くまで来たとき、モロッコから来ている女性に、並んで写真を撮りたいと声をかけられた。日本人に親しみをもっているのだろう。妊娠して大きなお腹をしている。その話では、四か月前に中国人ビジネスマンと結婚したという。今の仕事が終わったら夫のいる華南に行き、将来中国に住むという。旧大陸の西の果てから東の果てまではるばるやって来て、文化の大きく違う国の男と家庭をもつというのである。小柄で愛らしい女性のどこからそんな勇氣がうまれるのだろうか。翌日の食事の時だったか、ずばずば言う謝さんが、その男は *stupid* だと評した。謝さんは中国生まれの人と結婚してアメリカで暮らしている。自身の経験からそういう批評をしたのだろう。女性は今頃から顎までスカーフで覆い、顔だけ出したイスラム教徒である。たしかに、古い国の中国で暮らすのはやさしいことではないだろう。ドイツ人D君と周夫人はそれをどう聞いただろう。もっともD君は、その名の発音に似せて中国名で呉侠客と名乗っている中国通だから、問題を感じないだろう。海から来た蝶までまぎれこむこの

旅行団には多種多様な人間がいて、旅行がもし長ければもっと興味深いことに出会えただろう。公安の車に先導され、さまざまな顔立ちをして、赤道アフリカの長い衣装など珍しい身なりをした者のまじるこの集団は、中国西部のいなかでは注目の的だった。モロッコ女性はパキスタン夫人と仲良くなったようで、蘭州に帰ってから一緒にいるところを見かけるようになった。北アフリカの最果てからアラブの東にあるイラン・パキスタンまで、似たようなスカーフと長衣を着るイスラム教徒の女性がいる、ということのを再認識させられた。

グローバルゼーションの波は、中国奥地の地方都市にまで打ち寄せている。平涼工業中学（高校）というところを参観した。国家重点級学校ということで、特に一部のクラスは英語で教育が行なわれている。アメリカから十一人の教師を招いて教育しているそうだ。授業中のクラスも見学した。自分たちで設定した研究課題を調べて、得た成果をポスターにした教室にも案内された。各ブースで生徒たちがわれわれの質問するのを待っていた。全部英語のポスターで、英語を上手にしゃべる。中国では教育についても、いろいろな試みが行なわれているのだ。翌日、崆峒区白水鎮というところの農業示范園区も見学した。すももとあんずがビニ-

ル・ハウスで育てられていた。日本の農業技術を導入しているという。実の品質はまだそれほどよくはない。この地方はりんごで有名らしく、街道筋でりんご畑をたくさん見かけた。

昼下がりホテルに帰りついて客室のある別棟の建物へ向かっていると、整備された大きな池の向こうの茶館の入り口が開いていて、中央の箏が置いてあるそばに人影が見えた。一緒に歩いていた呉侠客・周夫妻に声をかけて三人で入って行った。茶館は「怡茗閣」という扁額がかかった堂々たる建物だ。周さんが聞いてみたら、この茶館はまだ内装工事中で店を開いていないということ。しかし親切に中に入れてくれ、願いを聞き入れて、箏のそばにいた若い女性が一曲弾いてくれた。われわれはテーブルにつき、別の女性が紙コップにだがお茶まで注いでくれた。箏は二十一弦だ。日本の箏は弦の数がもっと少なく十三弦だということを教えた。奏者が言う、今はジーパンをはいているが、茶館が開業したら伝統衣装を着ることになるだろうと。音楽学校を出たばかりで歳が若く、純情そうに外国人に戸惑っている。もう一曲リクエストして聴いた。ドイツ人青年は、休日にクラリネットを吹く音楽好きなので、箏に触って音階に耳を傾けた。池に囲まれたうしろには芝生が広がり、遠くにコブダイ形の霊山が見える。

四川大地震、中国事情

五月十二日二時半ごろ地震があった。十二階建ての最上階にあるオフィスは大きく揺れた。一分以上も続いたのではなかったろうか。この大きな揺れに中国の建物が耐えられるだろうかと思ひ、机につかまりながら不安であった。揺れている間に中腰で下の方を見ると、低い建物の人々はすでに外に避難しているのが見えてよけいにあわてた。揺れが治まって外に出るのにも、エレベーターは動いてしたが、念のため歩いて降りた。

危険が去ったと知れば人間は安心してしまふ。しばらくしたら呉俠客君から電話がかかってきて、この地震ですべての運転が止まったから、加速器を見たくないかと誘われて、すぐに応諾した。二つのリングをもつ加速器棟の中に入って見学。間近に観察するという貴重な体験である。一年前に新しくなってまだ調整中ということだ。夕方のテレビ・ニュースは、四川省で地震が起き、死者の数は百人余と報じている。まだ建物の下敷きになった人がいると。マグニチュード七八というから大きな地震だ。

翌朝インターネットを見たら、一万人以上の死者が出るのは確実のようだ。人の住んでいる地域に震源があって、大きなマグニチュード（修正された値は八）の比較的浅い地震だから、非耐震構造の多い中国で大きな被害が出るのは避けられない。わたしも恐怖を味わったから他人ごとではない。北京オリンピックの年に中国は多事に直面していると思った。発展している経済・社会にどのような影響を及ぼすのだろうか。翌日の夕方までに確認された死者の数は一万四千人になった。それ以上の行方不明者がいるという。CCTV9は連日特別番組を組んで放送している。政府の対応は早かったようだ。テレビは、温家宝首相の現地での住民との会話などを報道している。この人にはいわゆる大物の風貌はないが、懸命の対応をしていることが伝わる。報道は幾分政府の宣伝臭がするけれども、マスを相手にできるかぎりの平静を維持する方策としては認されよう。彼の行動を映す映像は、パフォーマンス以上のものに見えた。CCTV9は、地震発生から二週間ライブでぶっ通しの地震関係の報道をした。この報道ぶりも新しいのかもしれない。予期せぬ大震災で中国社会に新しい展開が進むだろうか。初期の段階で中国側がアメリカの偵察衛星の写真の提供を求めた、ということまで話題になった。

研究所が四川大地震の被害者へ贈る義捐金を集めている、と呉俠客君が教えてくれた。わたしは教授の給料という八千元をもらっていた。住居費は九百元で、たいてい一般職員用の安い食堂で食べている。二か月分の給料だけでもたくさん残っていた。中国で得たお金は中国に返して帰国する心づもりでもあったから、日本ではしないだろうほど義捐金を出そうと考えた。しかしあまり多すぎてもフランスを欠くかもしれない。どのくらいが適当か判断できないまま、二千元ほど周教授に託した。

翌日、研究所の国際関係担当の次席ポストにあるという人物から面会を求められた。そして、甘肅省のラジオ局の女性記者を引き会わせて、取材のためのインタビューを受けてくれと頼まれた。義捐金を出したことを指摘して、何か聞きたいというのである。謝さんもインタビューを受けたから、外国から研究所に来ている人間に取材しようということだったのだろう。その事務官の通訳を通して、インタビューでもあるし、要領をえない受け答えだったろう。次席ポスト氏は、わたしの帰国が近づいた頃、送別の宴に招待してくれた。周さんや張さんなどの教授連が同席した。酒を入れて淡く蛍光を発する石の杯セットをみやげにもらっ

た。これも中国流の客に対する応接のやり方なのだろう。

胡君に五泉山公園というところへ連れて行ってもらった日は、休日とあってけっこうな人出だった。入り口に漢の武帝の驃騎將軍霍去病の騎馬像がある。甘肅に遠征して匈奴を降伏させた青年將軍はこの地に兵を駐し、蘭州は唐宋以来絲綢之路の重鎮であった。と。今ここには遊園地と動物園がある。われわれはそこへは行かず、道なりに池を通って索道乗り場へ行く。蘭山頂上は町からの標高差が大きいから、雄大な眺めだ。頂上にはいくつかの建物があつて、郊外まで遠望できる。うねって流れている黄河の北の方は、市の近くだけに木が生えて灰緑色に見えるが、その先はほとんどはげ山の連なりだ。蘭山は東西に尾根が続いていて、市街地の反対側の南は谷になっている。その向こうはまた高くなり斜面に段々畑が上まで続き、そちらの山はおおよそ緑で覆われている。しかし林ではない。書かれた歴史以前にはもっと緑に覆われていたのだろうが、この乾いた果てしない高地を古来人が往来してきた。そこから騎乗の人々が侵入し、逆に東から征服しようという困難な事業が行なわれてきた。人間の考えること、人間の行なうことはなかなか平穩なものではない。人に意志というものがあつてそうなのか、それ

ともあまり意識しなくて本来的にそういう行動をとるのか。

地震が起きたあとの日曜日、甘肅省博物館を見学に行った。前回閉館だったのは、新たに入館料をとらないで展示するための準備だったらしい。全国の博物館の入場料を無料にする措置がとられたようだ。見習いたいよい決定だ。古生物の化石、歴代の陶磁器、絲調之路と三つの展示を見た。甘肅省は広いのでたくさん数の古生物の化石が集められている。恐竜、マンモス、…と続き、おしまいに古人類の頭蓋骨が置いてあったのはセンスがいい。おのずと、絶滅した多くの種があり、人間は多様な生物の中の一つの種であることを考えさせる。陶磁器の説明を見ると、八千年前の甘肅省にも高度な土器を生産する人々がいたらしい。中国中原の文明は早いぶん古くからの西との交流によって発展したと考えてよい。西との交流は後の時代まで希求されて、絲調之路を人々は行き交った。西方はむしろ東との交流を望んだのだ。交易された品々の説明パネルに、絹・紙・火薬・羅針盤・印刷術がこの道を通して西方へ伝わったと書いてある。中国の誇らしい歴史である。

外国の地にあつて新聞を見ないから、わたしはインターネットとテレビで情報を得ている。胡錦濤主席の訪日が近づいた日、CCTV9で日中関係を取り上げた「Dialogue」を観た。日本人は北京大使館の人で、中国側は国際交流関係の学者であつた。両者は親善を盛り上げる発言に終始した。日本人の方は用意した発言要旨を時々見ながら話し、見ている日本人としては少しもどかしかった。司会の楊はいつも多方面の討論に立ちあつてゐるから、東シナ海の問題を衝いて発言を引き出そうと試みていた。大使館員はあたりさわりのない受け答えをした。教養あるイギリス外交官なら、ピリッとした言い方でさりげなく自分の考えを含ませたかもしれない。

地震の報道が続いた間にも、テレビは中国の活発な外交を伝えていた。中国共産党の要人が北アフリカを歴訪し、別の人物が東欧を訪問しているようすなどを連日放映した。地震は中国の社会に激震を与えたが、それは中国政府の目的の明確な活動の中で起きたのである。そして、新しく就任したロシア大統領は地震の揺れの消えやらぬうちに来訪し、韓国新大統領の訪問もあるというぐあいである。五月末のニュースは、台湾の国民党代表がmain land にやって来たと伝えた。「Dialogue」は、金門島にいる台湾人女性と話を交わすという趣向まであつた。社会

は一朝一夕に変わらないし、忘れやすい人間はしだいに地震のことを過去のこととするだろうけれども、この新しい断層は、グローバルゼーションによる社会の変化の中に織り合わされ、少しずつ人々をそれまでと違ったように行動させることになるだろう。

二〇〇八年、わたしはなかなか得難い時期に中国にやって来て、変貌しつつあるその出来事を目撃している。

蘭州その三

杭州旅遊

張さんの実験データを理論的に解析する計算は順調に進んでいた。数値計算は、インターネット経由で、日本にいる共同研究者のコンピュータを使ってやる。ある日、周・張二人と話していたら、五月の末に研究会に出かけるといふ。研究フアンドをもらっている同じ分野の人たちの研究状況の中間総括が目的だといふこ

と。成果を判定する人も数人来るらしい。場所は南宋の旧都杭州だと聞いて、わたしはすぐに一緒に行きたいとお願いした。周さんが研究会参加ということで旅費を出そうと言ってくれた。しかし、どういふ雰囲気かは見物するとしても、中国語でやる議論は理解できない。自費で行くことにした。

* * さん

さて、また旅行に行ったのですかと冷やかされそうですが、五月の終わりに杭州へ行きました。わたしを受け入れてくれている二人の教授が杭州へ会議で出かけるという聞いて、議論すべき相手が不在になるのなら、中国人が一度は行ってみたいと思う処へ付いて行こうと思ったのです。……

杭州は中国の人の言うとおりで素晴らしいところですね。湿度の高い日本に住みなれた者が乾燥した蘭州に住んでいて、そこから杭州に行ったのですから感激はひとしおでした。うっそうと緑に覆われた山々と水を湛えた大小の湖をとても美しいと思いました。木々も日本のものとほとんど同じ種類のもので、懐かしく感じました。西湖は、潟で閉ざされた湖沼を清潔な湖にするために改造され、この悠々とした風景は人の手で美しくされたのですね。西湖十景といわれる有名な観

光ポイントの九つを巡りました。

日本のガイドブックには、西湖という名は越の美女西施から来ていると書いてあります。細い雨が降っていた日、しっとりとした旅情を味わいながら歩いていると、もう咲いているネムの花が雨に濡れていました。すぐに芭蕉の「象潟や雨に西施がねぶの花」の句が思い浮かびました。この句は秋田県の象潟で詠まれたのですが、象潟は西湖と同じく大小の島々を浮かべた名所でした。芭蕉は西湖のことなどを書物で知っていて、ネムの花を西施の比喻に使ったのだと思われます。その句は雨に煙るこの気分にぴったりでした。西湖にはあじさいの花も咲いていました。蘭州の人にこの花の名は何というのか聞いたら、「九轉綉花」という答えが返ってきました。わたしは、この花は日本原産で、白居易がそれに「紫陽花」という名をつけたのだということ、そして日本でもあじさいにその漢字を使うのだと、話して聞かせました。この杭州刺史は白堤を築いて、西湖を美しくし、また「白蛇伝」伝説の舞台を用意したのでした。話は尽きません……。七言四句で終わります。

楠木緑鮮蘇堤岸、小舟破鏡滑水上、杭州煙霧潤旅情、明天蘭州我心早。

追伸、最後の日の朝、蘇堤から白堤の断桥残雪のところまで一人で歩いたとき、男女二人の写真を撮ったのでそれを添付します。白素貞の写真も撮りたかったけれど……。

蘇堤の付け根には蘇東坡像があります。ここに記念館があるのを最後になって気づきました。しかし、開館時間よりも早過ぎて見学することはできませんでした。ただ、回廊に眉山、蘇軾と署名した手紙や赤壁賦などの詩文を石碑にしたものが二十余り展示してあるのを見ました。……この蘇東坡像はシンプルに様式化されたなかなかいいものです。白堤近くまで来たとき、剣を杖のようにした女性の立像を見つけました。これは秋瑾像にちがいないと思って近づくとやはりそうでした。台座の文字は孫文によって書かれたものです。今ではわざわざ中国近代革命の闘士の墓を訪れる人も少ないのでしょうか、ほかに人影はありませんでした。男性像と一対にするためと、日本に留学した中国女性ということもあって、この写真を添えます。

二十一世紀のあなたは、秋瑾の悲劇的な人生とは違う道を進んでいますね。晩年の蘇東坡は不遇な目に遭いましたが、先輩の白居易の号のように楽天主義を貫

いて生きました。少し天を仰いだ蘇東坡像はその樂天主義にふさわしいと思いませんか。……

杭州遊覽のことをもっと書きたいが、旅行案内書に譲って、一つの出来事だけを記そう。タクシーの座席に座り込むように入る時、運悪くドアが閉まって来て眼鏡に当たり、つるをレンズに固定している小さなボルトが折れてしまった。困って運転手に眼鏡店と書いて示したら、しばらく走って眼鏡店で降ろし、ここからなら河坊街はあちらの方だと身振りで教えてくれた。杭州の商店街は蘭州に比較するとずっと垢ぬけている。眼鏡店はモダンなつくりだ。女性店員に漢語がしゃべれないと言いながら、眼鏡を見せて渡すと、すぐに男性店員が修理にとりかかってくれた。座って待っていると、女性店員が鏡を向けてわたしの顔を指差して何か言う。見ると、眉のところからわずかに出血している。ティッシュペーパーで拭いてもよくとれないので、「水」と書いて頼んだら、望み通り流しのある場所に案内してもらえた。レンズに直接つるを固定する型なので、うまくできるか心配しながら待っていると、男性店員が修理を終えて持ってきてくれた。ボルトが心持大きいけれど、これなら元通りだ。「多少錢？」と訊ねたら、お金は要

らないという返事。感激して、手をとってお礼を言った。最初の店員にもお礼を言いながら店を出た。

研究会最後の日の朝、短い散歩をした。トンボが蘇堤の水面をなめるように飛び、柳の枝が水に触れればかりに何本も垂れて、今日も湿気で煙った向こう側のうっそうとした林の上に、雷峰塔が天に向かって立っている。今日初めて通る遊歩道もよく整備されていて、金枝梅などが咲いている。あずまやなどが配置され好ましい。寐照亭というところには、「唯問白雲何処去、不知明月幾時来」という対連が掛けてあった。それから、最後のセクションに出た。普通の発表会とそれほど違うようには見えないけれど、質問しているのは審査員なのかもしれない。張さんが発表の中でわたしの名を言って計算結果も示した。参加者名簿の末尾に加えてもらったわたしの面目がたった。昼食時、北京で世話になった趙先生のそばに座る。そのあと、上海から来ていた孫さんと話す。蘭州が終わったかどうかどうするつもりかと聞いてきた。脳の髄膜腫の手術を受けるだろうと答えたら、さらに、中国にまた来るつもりはないかと訊かれた。確答はできないけれどありがたい話だ。

蝶の暮らし

杭州へ旅立つ前の日に謝さんが去って、また広いアパートに独りになった。数日留守をすると何かが変わったという気がするものだが、旅から帰った翌日買い物に行ったら、品物を無料でビニール袋に入れることをしなくなっていた。レジの脇に規則変更のお知らせが書いてあった。環境問題の対策が中国でも始まったのである。人口の多い中国でこういうことをすれば、かなりの資源節約になるし、ごみ問題にもよい影響を与えるだろう。

北京から帰って来て周・張の二人と雑談しているとき、次はどこへ行きたいか聞かれた。洛陽・鄭州・開封と答えたら、そのあたりはあまり大したことではないと言われた。むしろ敦煌などを勧められた。現代中国人には、魅力あるところではないらしい。中国の歴史に興味があつて中原の風景を見てみたいのと、鉄道で旅がしたいのだと理由を説明した。それなら鄭州に知人がいるから、旅の手伝いをするように頼んであげようということになっていた。また旅に行くとなれば、ここでやるべきこととはかどらせなければならぬ。

日々をおとなしく過ごし、休日に五泉山公園の動物園に連れて行ってもらって、パンダや狼を初めて見るといような生活にもどった。端午の節句は、五月の連休を減らした代わりの休日となった。散歩に出ると、農民巷というところに公安の車がいて、道路にひもを張って通行止めになっていた。昨日ニュースで言っていた大学入試のための学力考査ではないかと気づき、その通りに入ってみた。やはりそのようなだ。試験場の中学校付近には二十人ぐらい親らしい人たちがいて、何々学院というパンフレットを配る人もいる。激しい競争だし、親たちも一人っ子の将来が気がかりにちがいない。

インターネット・ニュースが伝えている。日本のPHP研究所の検討グループが、五年以内に中国のGDPが日本のそれを超えると予測していると。議論は日本がどのように対応すべきかという指針を提示しようとするものだろう。わたしのような者にもほとんど自明のことと思われるが、詳しい検討を経て尊重すべき予測年数が出されたのである。

追記・二〇〇八年の日記にそう書いたのだけれども、その予測よりも早く二〇一〇年に中国のGDPが日本を上回ることになった。世界経済の歩みは速い。

気分転換に、蘭州博物館を訪れたことがある。元は白衣寺という寺院だったように、中庭に塔が立っている。蘭州市の歴史を示した展示室があつて、蘭州市の成り立ちが説明してある。清末期の写真で当時のようすを知ることができた。秦の時代に郡が置かれ、漢代に金城と呼ばれる城市が整備されて以来、歴代の城壁は変遷しながら、清代に最も大きく二重の城壁に囲まれていたことが模型で示されている。漢族の方が多数になったのは宋代のことだと。ほかに新石器時代の土器から青銅器まで少数が展示されている。歩行者天国のある張掖路も探検した。ここでもデパートではずいぶん値段のはる洋服を売っている。家電商品も日本の値段に近い。歩行者街の下には地下街もある。通りのベンチに腰掛けて飲み物を飲みながら、通行人を観察した。日本でもめったに繁華街に出かけないから、正しく比較はできないけれど、日本の街との違いは、顔立ちよりもファッションの違いからくるのだと思う。道の両側の建物は、下が商店で上の階は住宅になったところが多い。そのことも街の景観を違って見せる。

中国に滞在していて初めて中国人家庭を訪問する機会があつた。正確に言えば、

胡君と新婦はまだ別々に暮らしているのだが、購入したアパートの内装が仕上がってわたしに見せてくれた。彼らの新しいマンションはなかなかいい。中庭には木々が植えられ、その下の地下街に店やスポーツ施設などができるらしい。その区画全体はまだ総仕上げの工事中だ。家具その他を十万元以上かけて買ったという。食器乾燥機つきの食器棚は背の低いものだが、日本のものと比べても遜色ない。部屋の内装に二万元。絵画デザインの教師という樊夫人の好みに合わせて、天井や照明などみな機能的で明るい造りである。このカッブルの両親は裕福なのだろう。これらの金額は、日中の物価比率を考慮して、何倍かして考えなければならぬ。胡君はまだ二十六歳の大学院生兼研究所員で月二千元の収入だが、新婦の給料と合わせれば、物価の安い中国ではほどほどの快適な生活ができるだろう。日本の2DKよりも広い家に住むのだから、平均的な若い日本人と比べてけっして引けをとらない生活と言える。頬笑みを誘ったことに、まだいない子供のためのブランコがもう置いてあった。

わたしは日本から送った本をみな読んでしまい、『陶淵明全集』を拾い読みではなくまた最初から読み始めていた。四言の詩から始まっているその部分は、『詩

経』のころの古い素朴な調子を帯びている。オフィスのある高樓から蘭州東城を望みながら、「人生、寄のごとし」をこの身に感じ、静かにはなほだ思った。

蘭州その四

六月の終わりに、娘夫婦も同居しているわが家から帰国を早めてほしいと言ってきた。娘に早産の気配があり医者から安静にするように指示され、三歳の動き盛りの男の子もいるので、家内が助けを求めて来たのである。梁さんに相談したら問題ないということなので、わたしは一週間早く帰ることにした。それで、旅の世話をしてくれるという鄭州大学の趙教授の都合で、のびのびになっていた鄭州への旅行はとりやめることにした。

気の早いわたしはトランクに入りきらないだろう荷物を船便で送り出した。カメルーンから来ている人と会ったのは、その日の昼食のときである。食堂まで彼を案内して来た中国人が帰って行ったので、近くに座ったそのカメルーン氏に手助けをするつもりで話しかけた。この食堂には初めて来た、今までは研究所の外

のレストランで食べていた、料理がどういふものかよく分からないまま注文している、と言う。中国料理が口に合わないようで、ときどき自分で作るそうだ。陽気な人物である。それからしばらく話をした。カメルーンではフランス語と英語が公用語ということ、つまり単純ではない歴史があるだろうことを知る。昼食後にアパートに帰るのかオフィスに戻るのかを訊いてきて、オフィスに戻ると答えた。休息しなければ疲れるだろうと心配された。どうも昼寝をする習慣があるようだ。わたしがオフィスに戻るのも彼もそうすることにした。道々日本へ電話をかけるのにどうしているか尋ねられたので、インターネット電話を利用していると答えた。彼はそれを知らないらしい。そこで彼のオフィスへ同行して Skype をインストールすることに。わたしのマイク付きのイヤホンも一つ譲る。別の日カメルーン氏に食堂で会ったら、七月というのに、カーデガン様のものを羽織っていた。今朝は涼しすぎたと言う。たしかに今朝は雨が降って涼しかったけれども、最近寒がりになったわたしも、アパートを出るころにはそれほどは思わなかった。赤道下の国から来たらここは涼しいのだろう。食事が苦にならなくて為替レートが不利でなければ、南の国の人にとってはよい避暑地だ。

インターネットで中国の外の情報を得ていたのだが、七月の初旬にインターネットが使えなくなることがあった。サーバーが拒絶しているというメッセージが出る。別の建物の研究所の人たちのところへ行って確かめたら、そこではつながる。Yahoo の日本と中国関係のニュースを覗きすぎて、サーバーがわたしのコンピュータを拒絶しているようだ。情報の隠蔽や市民の自由な活動の抑圧が中国の最も遅れているところだ。これが開放されるまでに年月が要るだろう。インターネットが使いにくくなったのは、北京オリンピックが近づいてきたことと関係していたのかもしれない。オリンピックの火炬リレーのことを連日テレビが伝えていた。通りの至る所で、路上でも、北京オリンピックのシンボルマーク入りの旗と五星紅旗を売っている。火炬の蘭州到着を見物する機会はそのがした。

中原への旅

鄭州行きをとりやめる連絡をしたら、鄭州大学の趙さんからメールが入った。急にキャンセルしたのに驚いている、歓迎するからどうぞ来てください、と。周さんも考えてみたらという口ぶりである。昼過ぎまで考えていたら、古都への旅

の魅力が勝った。張さんとの論文の理論計算の部分の草稿も滞在中に仕上がる目処がたったので、行くことにした。

七月九日夕刻、わたしは北京西駅行き夜行列車に乗っていた。列車の到着まぎわまで待合室で待つ中国式は初めての経験である。軟座は四人のコンパートメントで、わたしのは上段の寝台。次の停車駅龍西まで、通路の腰掛に座って外の景色を眺めた。線路は、両側が小高い丘の間を流れる河に沿うように続いている。この道筋は河西回廊から西安へとつながるシルクロードの幹線である。峡谷の上の丘には木々がまばらで、帯状の谷間の平地が耕作されている。丘には畑もある。暑い時期なので、陽射しの強い日中を避けてのことであろうか、日が落ちてからも畑仕事をしている人たちがいる。二、三人ずつのんびりと丘の上で遠くを見ている人々も見かけた。今の季節に小麦を刈っている。緑の畑はトウモロコシらしい。

翌朝六時にベッドから降りて、また通路の腰掛から外の景色を三時間余り眺めた。列車はすでに関中平原を過ぎ、函谷関の先の朝霧がたちこめた山間を走っていた。蘭州あたりよりも木が多く茂っている。中国でよく見かける丘を垂直に切

り取ったようになっていてこぼこの場所が続く。それらの山肌には木が無い。垂直な面には岩も見えず、乾いた土の肌だ。灌木の茂る中に亡骸を葬った土饅頭があつて、赤白のあざやかな紙飾りが墓標代わりの杭に付けてある。三門峽駅を通過したあたりはまだ山がちだったが、さらに東に行くにつれて起伏は小さくなり、土色の山肌の見えるところが減っていく。

洛陽に近づいて土地は開け、きび畑の緑の平地となり、ポプラの木が小道や畔に沿って並んでいる。洛陽駅を過ぎてさらに東に進むと、また起伏のある地形になり、谷や小山や丘のある一帯が続く。関中平原を根拠地とする周が西から圧迫を受けて都を移した洛陽は、東の平原に対して戦略的に守りやすい場所だったことが分かる。その先は黄河の堆積土がつくった大平原である。地図を見ると、北西の山山西地に縁取られ東は山東の山地で限られるまで、東南は淮河から長江下流域へと連なる大平原だ。洛陽はその扇のかなめにある。その東へ約百キロメートル行くと鄭州がある。ポプラの木々などに遮られて遠くまでよく見通せないけれども、この緑豊かな穀倉地帯が中国古代文明の栄えたところだということがよく理解できる。それらの景色を見つめながらさまざまなことを考えた。三時間では足りないと感じるぐらい、今朝の列車の旅を楽しんだ。何人かの人たちが食べ

物や飲み物を持って後部車輛から来るので、探検に出かけたら二つ目の車輛は食堂車だった。入るとすぐウェイターが座れと指示し、メニューを持って来る。二種類のセットメニューの安い方（十五元）を注文したら、肉まんじゅうと玉子などの料理であった。

鄭州駅には、蘭州の近代物理研究所を出た鄭州大学の二人の若いドクターが迎えに来てくれた。旅行案内書によれば、河南省の省都が鄭州に移されたのは第二次世界大戦後のことで、それ以前は開封が省都だったらしい。中国の幹線鉄道の一つは、北京から山西山地沿いに鄭州を経て長江中流域の武漢へ、さらに広州へ通じている。それに西安から東へ向かう鉄道が鄭州で交差している。交通の要衝なのだ。ところが、鄭州駅前は整備中で雑然とした感じを受け、タクシーで通りを通るときも、奥地の蘭州よりも立派な町のようには見えなかった。わたしは、帰国してからリービ英雄の中国紀行文を読んで、河南省が中国の中でも貧しい省であることを知った。河北省の人々が南に隣接する河南省を見下しているというのである。かつての中国の中心領域も、主要産業は農業で近代経済の下で取り残されているのである。タクシーで着いたホテルの名はその名も黄河飯店。迎えて

くれた趙維娟さんは女性教授である。英語の得意なドクター王が主に話した。わたしの滞在計画について話が始まり、物理の話をいつするか訊いたら、それはしなくてよいと言われた。話もしないで観光案内をされるのは気が引けるけれどもしかたがない。正午にホテルの一室で昼食をとった。趙さんの十五歳になる息子も来た。わりあい英語を話し少し言葉を交わしたが、一人っ子は何不自由なく育てられているようすである。

河南省博物館は古代中国の中心領域の博物館だけあって、収蔵品は見ごたえがある。中国で珍重された玉製の斧の展示は印象深い。七千年前の新石器時代に始まり夏・商(殷)まで続く連続した様式の変遷を教える。それからもちろん青銅器。これまで何度か見ているので感動が薄れてしまうけれども、重々しい存在感がある。古代の人々にとって、国の宝として特別の感じのものだったろう。その他の展示品も、古代から貴族たちが見事な品々を使用してきたことを教える。短い時間では足りないほどの展示物がある。ゆっくり見ればもっと教えられることがあっただろう。商代都邑を囲んだ城壁跡は地元の人たちにとってはありふれたところと思われるようだが、希望して連れて行ってもらった。目測で高さ五ない

し六メートル、幅は十数メートル。土で出来ていて石やレンガで覆われていない。考古学的に商代初期のものとされたのは最近のことらしい。商の中期にはここが首都だったという。その古都を守った城壁の上を歩いた。土の城壁は古い感じを与えて古代への思索に誘う。土盛りの上に生えた木々の木陰で、市民が将棋やトランプをしている。そばに小さな河が流れているので名を訊いたら、金水というのだそう。ここが商の都であったころには、金水はその繁栄に花を添える河であつたろう。今は夏で、人口過多の町中にあつてありがたい匂いがする。

翌日は、ドクター宋が同行してくれて、宋の都開封を訪れるバスツアーに参加した。鄭州の郊外にさしかかると、開発区に規模の大きなたぐさんの建物が建設中であつた。そこには思いきった設計プランが立てられているように見える。鄭州も遅れを取り戻すために大規模な開発が行なわれているのだ。その先に東の開封へ向かう大道が走っている。大平原の真ん中を、十車線の大道が、かすんで向こうが見えないところまでまっすぐに伸びている。開封まで約七十キロメートル。道の両側には花木などが二列整然と植えられている。これほどの道路は日本にはちよつとないだろう。河南省を發展させようとする決意を表わしているかのよう

だ。人口およそ一億人、ロシアを除けばヨーロッパのどの国よりも多い人々の暮らす河南省が、ひょっとしたらやがて一国のような規模になる日が来るのかもしれない。もっとも、まだ走っている車は多くはない。中国の道路の両端の車線はオートバイや速度の遅い車輛が走る。その端の車線を、西瓜や瓜を乗せた荷車を三輪車やトラクターが引いて走っている。それに夫婦が乗っている図の牧歌的なこと。その図は、現代中国の経済と社会を表現している。将来中国のGDPが日本のそれを超えた後にこの大道を見る日本人は、日本のコンパクトで能率的な経済と対比して、スケールの異なる大まかな感覚の中国を再認識することになるだろう。

やがてバスは開封の市内に入り、市の城壁を抜けて中心部に着いた。ここには四周に城壁が残っているらしい。江南からの運河が通じた物資の集積地に、宋は都を置いた。もちろんここは西方のシルクロードからの交易の中心でもあった。蘭州で漢族が過半を超えたのが宋代であったことがそれを裏書きしている。宋の版図は、北には遼、西には西夏が国を建てたので、漢や唐の版図に比べて小さかった。しかし当時、開封は世界で最も栄えた都市であった。ユダヤ人商人も住ん

でいたと聞く。中国文化、特に芸術が最も洗練された時代である。現代も、かつて運河網によって栄えた都市にふさわしく、大きな池がある。ただし、黄河の氾濫に何度も襲われ、昔の都は地下に埋もれているそうだ。その池の真ん中を通って、バスは開封府に到着した。昔の開封府の名を冠したテーマパークである。省都が鄭州に移されて発展から取り残された開封市は、観光に力を入れて活路を見出そうとしている。

開封府の門を入ると、左右の建物には司馬光と蘇軾の執務する姿を模した像がある。王安石よりも王安石派に追われた司馬光と蘇軾の方に人気があると思われる。科挙の試験がどのように実施されたかを説明する建物もある。中国の高級官僚を養成する科挙の制度は、宋代に入って本格的に運用されるようになった。中央集権の帝国であることと科挙の制度が、封建制度の日本の政治の仕組みと大きく違うものにした。世襲制だった日本と異なり、中国では司馬光や蘇軾のような大知識人が政府高官になった。ところが、政府高官が知識人であるかどうかにより関係なく、日本がそれなりに発展して歴史を経て来たというのも興味深いと思う。

宋代の開封の繁栄を描いた一巻の絵巻物がある。「清明上河図」である。開封

には、その絵巻一卷に描かれた情景を再現するテーマパークがある。絵の名をとって清明上河園と呼ばれている。往時を偲ばせる施設や店がつくられ、池には昔の艤装をした船が浮かぶ。ポロ競技場があるのには驚いた。中国でもやっていたのだ。闘鶏場もあり、ここでは実際に賭けごとをすることができ、けっこうな人数の人たちが賭けたから、共産党政権下の中国社会に、賭けごとがまだ残っていることが推察される。真夏の暑さに疲れた鶏がけしかけられて闘っていた。別の建物では、編鐘と古楽器の演奏で宋代の衣装を着た女性たちが舞うのを見ながら、注文した茶を飲んだ。明るいう外に出ると、百日紅、蓮、夾竹桃の花が咲き、ざくろや柿などの木の緑が濃い。

三日目、趙さんと王さんの案内で洛陽へ。行きは列車を利用した。二階建て車輛の二階の席。もう一度鄭州―洛陽間の鉄道沿線の景色を楽しんだ。駅に着いたら車がチャーターしてあって、日本語を話すガイドも手配してあった。女性ガイドの名は徐、大学で二年間日本語を習ったそうだ。老年の日本人教師もいたということだ。瀋陽で会ったような教師を退職して日本語教師になった人かもしれない。道中徐さんが、わたしに日本語で、趙さんに中国語で案内した。最初に龍門

石窟に向かう。市街を抜けていくとき、青銅製の馬の引く戦車のミニチュメントが車から見えた。そこにある商業ビル一帯の地下深くで周の時代の墳墓が発見され、そこから出土したのだという。周代にこれほど立派な戦車があったのだ。青銅を使いこなし、大きくて造形も精巧なもの。

龍門石窟は、伊河の流れに沿う崖に掘られている。観光地として整備されていて、河岸の石畳の道には柳が植えられている。河からの風が暑気を少しやわらげてくれる。入り口の門をくぐって行くと、大小数多くの諸仏・菩薩の像が刻まれている。則天武后の顔に似せて造られたという盧舎那仏像はとりわけて大きい。昔は崖からひさしが出され、柱が支える建築になっていたという。美貌の誉れが高かったというし、製作者はより良く表現しただろうから、柔和な美しい顔立ちの像だ。武后は、摂政にまでなっても満足せず、新しく王朝を建てて女帝になった。彼女と臣下は王朝を創建するのに、仏教的なイメージをまとわせて権力を強化したかったのだろう。柔和な顔はその事績とは不釣り合いに見える。以前に西安を訪れたとき、高宗とともに葬られた乾陵を見物したが、后妃武氏の墓誌には初め文字が彫られていなかったという。書きようがなかったのかもしれない。

石窟の尽きた所に、伊河にかかる橋がある。その浅い水に入って網を張って魚をとっている人がいた。盧舎那仏は伊水の対岸からその涼やかな顔立ちが分かるほど大きい。こちら側は木々のよく育った香山で、この場所全体が風光明媚なところだ。蒋介石の別荘があったということだ。ホテルを指差して徐さんが、今ではあそこに共産党政府の要人が泊るのだと言った。こちら側にも石窟があるが、それをとぼして白園に行くことを提案した。そこは白居易が晩年を暮らしたところで墓がある、と旅行案内書に書いてある。低い尾根に詩人を葬った墳丘がある。中国人は家譜を重んじる。墓の周辺には、韓国やシンガポールにいる白氏の子孫たちの石碑がいくつか立っていて、日本のファンたちの石碑まである。木陰には茶店があり、楽天堂という額のかかった建物でみやげ物も売っている。わたしは、香山居士と号した白居易はここでどんな思索の生活を送ったのだろうか、高宗が武后におぼれた後に、その轍を踏んだ玄宗と楊貴妃の物語を長恨歌に詠んだ詩人は、対岸の盧舎那仏像よりももちろん香山の風光を愛したにちがいない———と思いを巡らせた。

追記…インターネット上の Wikipedia にも白居易がここに住んだと書かれていて、それが誤りだということに気づかなかった。二〇一一年に出た岩波文

庫の『白楽天詩選』を読んで、洛陽のはずれに大邸宅を買いそこが終の棲家だったことを知った。調べ直したら、香山にあった香山寺と彼の墓もともとと伊河の上流側にあったという。立派な墳丘と墓碑は後に作り直されたのだ。大邸宅に住む居士はわたしの境遇とは違うが、その楽天主義の生き方に学びたい。しかし、尊敬する蘇軾は白氏を軽いと評したらしい。

午後、関林と呼ばれている関羽の首塚へ。まだ『三国志演義』を読んでいない蝶にはありがたさがよく分らない。次に、後漢時代に創建され中国で最も古い由来を誇る白馬寺へ行った。最初の打ち合わせのとき、関林・白馬寺よりも洛陽博物館に行きたいということを王さんには二度言ったが、採択してもらえなかった。博物館の所蔵品で洛陽の歴史を見聞したかったのに、少し心残り。

蘭州を去る

鄭州から帰ると蘭州滞在も残り少なくなった。張さんと議論して共同論文の草稿がほぼ出来上がり、わたしが帰国したあとに張さんが全体の仕上げをすること

になった。近代物理研究所で給料をもらっていた分の働きができて一安心。研究所の人たちとの別れの宴などもあって、しだいにあわただしい気分になる。ドイツ人青年呉俠客と周夫人の招きで、中山橋近くの韓国料理店で焼き肉を食べたのもそういう別れの一つであった。帰り道、夕暮れ時の黄河沿いの遊歩道を一緒に歩いた。対岸に光に照らされて噴水の上がっているところがあり、白塔山の中国風の建築や山下の大きな建物が電灯で飾ってある。夕方の景色を見たのは初めてであった。多くの人々が河岸の道をそぞろ歩きして夏の夕べを楽しんでいる。こちら側で音楽をかけて踊りの輪ができていると思うと、社交ダンスをしている人たちもいる。夕食のとき話したのだが、中国の人たちは生活を楽しんでいる。生活の質が日本よりも劣っているという見方は必ずしも正しくない。

蘭州を去る前の日に黄河上流のダム湖へ出かけた。外国人对応係の梁さんが、蘭州を去るわたしが希望するなら連れて行こうと企画してくれたのである。呉俠客夫妻とカメルーン氏はすでに見物していたのだが、計画があるなら参加しようとして来た。パキスタンの親子も初めて行くのだ。ダムは、蘭州の奥の山に分け入る劉家峽というところにある。日本の高校社会科地図にも載っている大規模

なダムである。周夫人の話では、江沢民前国家主席はこのプロジェクトの責任者だったということだ。中国政府の力を入れた事業だったのだと思われる。成功裏の完成は江沢民の政治家としての経歴に箔をつけたのだろう。長江に巨大ダムを造る計画に黄河での先例があったのだ。

ダムサイトからモーターボートに乗って、上流へ一時間ぐらいさかのぼった。ダムでせきとめられて溜まった水は、ダム近くで最も水の色が黄色から遠い。少しずつ土砂が沈殿して透明度を増しているようで、河清を待つという言葉をイメージさせる。この人造湖を取り囲む山々には少し灌木が茂っているが、水を湛えているのにとっても乾いていて、水を欲しがっているように見える。湖の半ばを過ぎると水の色はまたしだいに黄色みを増していった。黄河上流の水量もずいぶんあるのだ。ダム湖が終わり河になると、兩岸はしだいに崖になり、それが深く切り立っていった。黄河が削り取っていった地質学的な時間を教える。崖と山の迫る岸辺のわずかに草が生えているようなところには、羊や牛が放たれている。しかし人家はどこにも見えない。

やがてわれわれ一行は、炳靈寺というところで降りた。案内書によれば、蘭州から百キロメートルぐらい離れているそうだ。そこには天下第一埠という標識が

立っていた。黄河はこのあたりで川底の傾きが大きく、急流になって水が落ちて行く。傾斜の急な岸が上がったところに寺がある。その上方も山の斜面で、車の通るような道は見えない。昔からこの寺には黄河の流れに乗って通ったのだろうか。こんな場所に寺を建てた人間の意思を推し量ることは難しい。炳靈寺の脇の小さな谷川沿いの崖には、いくつも石窟が掘られ、石仏が刻まれているのである。このあたりでは名が知られていて、訪れる人もあるのだ。守りをする人の家がつあった。

アパートに帰りつくと、同行の人たちとメール・アドレスを交換し、長の別れの言葉を交わして、蘭州最後の夜となった。閉じた眼に、天下第一埠の前をとうとうと流れる黄河の濁流と、その流れが悠久の時をかけて削り取ってできた数十メートルの断崖が思い浮かぶ。

第三章

上海二〇〇九年



二年続けての中国行きを終えたわたしは、節目かもしれないと考え、医師から勧められていた髄膜腫の手術を受けることをいったん決心したが、別の医師の意見に影響され考えを翻して予約した手術を中止した。生き方を模索して、翌年の春には、海辺の生家に住居を移す準備を始めた。畳敷きの部屋を介護に便利な板張りに改修し、さらに、大きな家具や書棚と書物などを移送する。上海の孫さんから、次の年度に交通大学に來ないか、フアンドに申請したいと、誘いが來たのはそんな三月のことであつた。二人目の大学院生が入学することになつたので、手伝つてほしいというのである。新たな仕事を始めるのは難しいが、短期間の研究手法の伝授という任務ならできるだろう。フアンドの申請をお願いし、中国の新学期九月初めにまた大陸へ渡ることになった。

翌二〇〇八年二月末、再び蝶になつて蘭州へ飛び立つた。

上海その一

海を渡る

大陸へは一度船で行ってみたいと、前々から蝶は考えていた。すでに瀋陽に出かける時のメールに、道元や最澄・空海の名を書いていた。近代になっても、森鴎外や夏目漱石などヨーロッパに渡った日本人は、最初に上海へ寄港している。幕末の高杉晋作も上海へ行ったではないか。これらの人々は海から大陸を見たのである。そう考えてインターネットで上海航路を調べてみると、下関からの船便がある。長州生まれの蝶は迷わずそれを利用することにした。船は、正確には上海ではなく、隣の蘇州市の太倉港というところに着くらしい。それも、長江河口から入り込んで行くのだからおもしろいだろう。

二〇〇九年八月三十日、下関港国際ターミナルに着く。船便で出入国手続きをするのは、昔ドーバーからフランスのブローニュへホバークラフトで渡ったと

き以来である。乗船時間が近づいて、促されるままに埠頭に出た。列に並んでいる乗客は少なく、二十人を超えないだろう。船は、貨物の輸送を主目的として大きい。名はユートピア号。夢見る蝶にはうってつけの名だ。人生の新しい展開を求めて始まった大陸行を、今年もよい名の船が彩ってくれる。五時前、船は岸壁から離れた。初め正面に壇ノ浦があった。火の山と布刈神社の上の山、関門橋の向こうには万珠か千珠の島影まで見える。やがて船は船首を反転させて、穴戸の外へと滑り出す。

埠頭で乗船チェックをするとき、うしろに並んだ年配の女性二人が話しかけて来た。この列には中国人もいるだろうと思っていたが、日本語である。その二人が、船が動き出すと、わたしのいるデッキに出て来た。話をして判ったことは、二人は姉妹で、敗戦前まで上海に住んでいたということ。懐かしくてよく中国に出かけるらしい。今回は、下関から船便があることを知って、特に姉が望んで、船旅をするために長崎から来たのだそうだ。一九四四年姉が小学五年生のとき船で帰国したが、当時機雷を避けるなどのこともあり、十数日かかって日本に帰りついた、という話だった。

デッキに立ったままいつまでも船からの景色を楽しんだ。海峡を抜けると小倉北岸の工場群を眺め、夕陽が海にきらめいてつくった陽の道を大きな船が横切るのを写真に収める。右舷からは、下関市の西海岸と遠くに関門橋の二つの橋脚が見え、火の山ももう一度見えた。火の山というのは昔のろしを上げたことにちなむ名だろう。そこからなら外海から来る船を見張って、瀬戸内海の東へ情報を伝達できる。外海側には、パイロットを待っているのか時間待ちをしているのか、十数隻の船が停泊している。さらに北には本州西端の海岸線が続く。しかししだいに夕闇が降りてきて、玄海は闇に溶け込んでいく。船はかつて北海道中と呼ばれた海にさしかかる。

六時過ぎ、食堂に行き食券を渡して席に着こうとしたら、先ほど下のデッキから会釈をした人に、こちらに来て一緒に食事をしようと誘われた。話し好きの人でいろいろ聞かせてくれた。十年ぐらい前に退職して、バックパッカーのように世界を歩き滞在してきたと。東欧や東南アジアの国々の名が出た。中国は長く、言葉もかなりできるらしい。今は蘇州大学に入学して中国語を勉強しながら、ビザを得て滞在していると。この間日本には通算一年ぐらいしか帰っていないそう

だ。国民健康保険にも加入していないということ。もらった名刺には、日本名の発音に似せた中国名が印刷してある。大学での成績もその名で発表されるのだそう。わたしなどよりもずっと積極的に老境を耕している人がいる。

食堂で食事をしている人はあと二組しかない。中国名Z氏はもう一本ビールを注文して、わたしにも注いでくれた。ビールは青島ビール。食材は日本調達のものだそう。Z氏は、この貨客船の就航の時に取材などがかかわって、事情に詳しくかった。この船は二万六千トンで、横浜・神戸からの上海便の一万数千トン級よりも大きく、快適である。ところが、本日の乗客は十七名。来年の上海万国博覧会の一つのチャンスなのに、蘇州市太倉港へはあと四航海で休航してしまう。と。運よく休航する前の時期に巡り合えたのである。その名残の航海で、わたしの三度目のユートピア探しの旅が始まった。大きな船だし海は時化ていないけれど、船はゆるやかに揺れて、カーテンがゆっくりしたリズムで踊る。わたしは、ビールの酔いは醒めて、船酔い止めの薬でもちこたえているようだ。半ば酔い半ば醒めて人生という波間に浮かび、『ユートピア』を参照しながら模索の旅へ。

翌朝十一時ごろ朝の雨は上がったが、陽射しは雲にさえぎられていて涼しい。絶海を行くこの船に小鳥が一羽身を託していることに気づく。総選挙の結果を知ろうとテレビをつけたが、日本のテレビ局の電波は届かなくて、中国のテレビ局の三チャンネルだけ映る。そのニュースは日本の総選挙結果を詳しくは伝ええない。自民・公明両党の議席数が一〇四で民主党他が三四〇だということと、テロップの示す民主党の議席数三〇八ということだけが分かった。選挙の公示日のあとすぐの諸新聞の伝えた予想通りの結果ということだ。アンケート調査がそんなに簡単に予測を成り立たせるのだ。マスメディアの影響は絶大で、大衆は形成される雰囲気にとやすく染まるということを教えている。上面の調子に流されて日本の政治社会の構造は変わらないのだろうか。二人の姉妹と話していても、日本の将来への不安が見える。これから向かう中国の方が、前途が明るいのではないか。

一日中陸地の見えない海の上を船は進む。わたしは円周で縁取られた海平面の中央にいる。海のうねりとその上の小さな波のゆらぎだけが時の経過を数える。見上げると、ゆっくりと変化する雲も、長い長い歳月のつかの間の、同じもの無い風景をつくっているのだろう。海の蝶が雄大な自然の中でたじろいでいる。

陽がだいぶ傾いてから空が明るくなった。水平線に沈む太陽を見ようとデッキに立ったが、残念ながら水平線の上に横たわる層雲の中に没した。しばらくその雲の向こうが明るく残照をとどめていたものの、結局そのまま日没の暗さに変わっていく。食事に行つて東の窓の外を見ると、十日余りの月が上がっている。夕闇の中に漁り火が見えるようになった。もう大陸沿岸まで来たのだろうか。風呂に入つて日記を書く頃、急に船が大きく揺れた。ドアをノックする人があるので出てみると、隣室の二姉妹が、船は停泊して二時頃パイロットが来るのを待っているのだ、と教えてくれた。再びデッキに出て、周囲の漁り火と月を眺めた。月の光に照らされて海原が揺れている。見あきない光景だ……。なんということか、カラオケの声が聞こえる。

三時過ぎに一度眼が覚めたがあたりは暗い。またうとうとして、五時二十分頃に明るくなっているのに気付いた。カーテンを開けた窓から日の出前の曙が見える。船室は右舷にあつて、そちらには何も見えない。デッキに出るとすでに日は昇っていた。左舷に出たら陸地が見える。流れが黄色みを帯びた濁流であることに気づき、上海付近かとも思ったが、左手には荷の上げ降ろし用の台がいくつも

見える。間もなく二隻のはしけが左舷につけた。接岸したのは朝六時二十分。コンテナ昇降機が十四台ある。その上の作業員の乗る場所に「太倉」という文字が書いてある。太倉港に着いたのだ。右舷の船室に座って外を観察していて、長江右岸の上海付近の陸地を見そこなったのである。それにしても長江河口は広い。地図によれば、北側には大きな島があるはずなのに、空気が澄んでいなくて何も眼にすることができない。ただたくさん船が行き来しているのが見えるばかり。深く水に没して喫水線のすぐ上に積荷のある老朽船もたくさん見える。念願の海上から大陸を観ることを逸して、中国経済の大動脈の中にすでに入り込んでいたのである。

上海交通大学での日々

上海交通大学に着いたのは午後一時頃。去年の春宿泊したゲストハウスに二か月ほど滞在する。二階のレストランで遅い昼食をとると、孫さんのオフィスで事務上の手続きなどを処理し、物理学科に新しく併設された粒子物理宇宙学研究所という建物へ行った。図書館に続く既存の建物の四階がリフォームされて充てら

れている。最近中国では、特別待遇のポストで海外に出た頭脳を呼び戻すことが行なわれているらしい。ここでも何人かの中国人研究者が外国から着任したそうだ。そういう人が研究所所長で、孫さんは副長だ。所長は分野の異なる人で、孫さんよりも若い。大胆な取り組みが中国で進んでいる。ここが新しいアクティブな研究所になるだろうという感想を告げたら、そう思うと孫さんも言う。椅子が三十ぐらいいあるセミナー室の外に出ると、屋上が洋風のテラスに仕上がっている。いくつか木が植えられて、ベンチがありパラソルが立ててある。最初の訪問者のわたしは恥ずかしながら小者だが、研究所の一室が提供される。

大学院生の楊迎春さんと金華君とが、部屋の準備をしてくれた。昨日太倉港までわざわざ迎えに来た金華君は、結婚して子供が一人ある。華東師範大学の修士課程を出て、別の大学の教育職に就いている。パートタイムで大学の仕事をするかたわら、博士の学位を取るために今年交通大学の博士課程に入学したという。中国ではそういうことが許されるらしい。他方の楊さんは一年前に入学したが、同じ経歴だ。大学の職を辞して博士課程に来たもの。今は、寧波にある大学に勤めている夫と別居して、キャンパス内の大学院生用の寮に住んでいる。さらに驚いたことに、女の子があつて内モンゴルの楊さんの両親のところで学校に通

っているという。夏休みに娘に会うために、列車で一日以上かけて実家に帰ったそう。沸騰している中国で多くの人々が前途を改善しようと努力している実例を、目の当たりにした。なかなか苦勞なことだろうけれども、ここには希望があると思う。

この日キャンパスで、迷彩服を着た女子学生の一隊とすれちがった。中国の大学では一か月ほどの軍事教練が義務のようだ。中国軍の兵員数は、日本の自衛隊の兵員の十倍程度で二百万人を超える規模らしい。人口比率で同程度だ。人口が多く入隊者も多いので徴兵制はとられていない。それでもいざというときのために、上級兵員候補生として大学生に訓練を行なうのだろう。部屋から、大きな池の向こうの運動場で、いくつかの隊列を組んで行進の訓練をしているのが見えた。拡声器で行進曲が流され、大きな命令の声と規則正しい足音が聞こえてくる。今の日本人には珍しい光景である。翌日早く目が覚めて、外の騒がしさに気付いた。時計を見るとまだ五時。夕方にもやっていた。宿舎で教練を指導する軍人が泊っているのを見かけた。それぞれの国は歴史的条件下で進むのだ。

キャンパス生活を始めるのを楊さんが手伝ってくれた。大学の事務室で身分証をつくった。その場で写真を撮ってカードができる。わたしの身分は「訪問学者」となっている。これはプリペイド・カードで、食堂などキャンパス内の支払いに使う。学内にはコンビニエンス・ストアほか、構内での生活に必要な品物を売るいろいろな店があり、カードはそこでも使える。楊さんに、迎春という名は『紅樓夢』の主人公宝玉の妹と同じ名前で憶えやすいと言ったら、笑っていた。前の日に寧波に住んでいたと聞いた時、日本の道元という留学僧が寧波に上陸したという話をした。それを寧波にいる夫に電話で話したら、夫は知っていたそうだ。尊敬する道元の滞在を記念するものがあるようだ。

孫さんとの議論の中で、去年蘭州でした計算の中によい材料があるということが出た。仕事になるだろうというのである。今回もまた幸運に恵まれそうだ。孫さんは学科長会議など研究以外の仕事に手をとられるようになっていく。欧米の自由な研究職にいた彼が初めて経験する苦労だろう。孫さんは研究費も増えて、今度新しいワークステーションを購入した。それを使えるようにする仕事に金君

の最初の任務になっていた。入学したての彼は勢いこんでいて、こちらの話をよく聞かないで、画面操作をすぐ次に進めようとする。

土曜日、金君の案内でKさんと上海見物に出かけた。豫園のあたりを見物して、上海のシンボルタワーである東方明珠の展望台にも立った。空気の透明度が悪く、遠くはかすんでよく見えない。低い方の第二展望台には、四方に省都の方角と距離が示してある。最も遠いのはウルムチの三千七百キロメートル。東方の海を除いて三方に国が広大であることを示している。台湾の二つの都市台北市と高雄市についても、台湾省と書いてあって、あくまでも中国の省であるという建前が明示されている。日本の北方四島と同じ扱い方だ。日曜日には、船首に二つの龍頭をもつ双龍船から、黄浦江兩岸の夜景を楽しんだ。黄浦江右岸は、二十年のうちにこのように壮麗になったのだ。まだ多くの場所で建物が建築中である。そのうちニューヨークのマンハッタンに匹敵するようになるだろう。双龍が反転し浦江をさかのぼりだすと、十六日の円い月が高層建築群のうしろに現われ、船が進むにつれてつぎつぎに建物の間を縫うように移動していく。美しい眺めだ。

今度の使命を果たす仕事が始まった。ある日の孫さんとの会話で、彼の奥さんと一人息子はアメリカに残っているが、その息子はシカゴの大学の修士課程にい

ると聞いて、中国に帰って仕事に就く機会があるか訊ねたら、難しいだろうという答え。中国の社会は規則によって動いていないので、人との交渉が重要で押しが強くなければならぬけれども、そのような経験がなく、こみいったことを中国語で話すこともできないから無理だと。夫妻は、将来中国に帰ってくるか、息子が留まるだろうアメリカで暮らすか迷っている。

入学生とおぼしい姿があつて食堂が混雑するようになった日、宿舎の会議場や通路に、ベッドのマットが並べられていた。宿泊客の急増に対応しようとしているらしい。わたしの部屋のある奥の棟につながる廊下にまで続き、その最後に一八五の番号札が置いてあった。中国第三の難関大学に一人っ子が入学するというのは、家族にとっては大きな出来事なので、家族一緒に来るのだ。孫さんの言っていた通り、父母だけでなく祖父母の姿も何人か見える。朝食の時それらの人々の立ち居振る舞いを観察すると、都会化された人とそうでない人、社会的地位の高そうな人などが何となく区別できる。例年通りそのような準備がされたけれども、上海の宿泊施設が充実してきたのか、今年は廊下にまで寝た人はいなかったようだ。

九月十四日朝、金君から入学式を見に来ないかと電話があった。式典があると聞いて、見物したいとわたしが言っていたのである。インフルエンザ流行を防ぐために空気の遮断された体育館ではなく運動場であるから、見物できるという。運動場に行くと、陽射しの暑い中、学科ごとに列をつくって並んでいた。学部長たちだろうか、壇上の椅子に座っていた十人余りが紹介され、三人が祝辞を述べた。屋内でないことが典礼の雰囲気殺いで、雑談している学生がおおぜいいる。退出した者もあった。運動場のトラックを五十人ぐらいの銃剣を肩にした隊列が歩いて来て、国旗掲揚後に退場した。兵士ではなく教練を受けた学生たちだったのかもしれない。学生の整列した右側には、「継往開来、勇摩高峰、把交通大学建設成世界一流大学」と書いた赤い大きなパネルが並べ立ててあった。

九月中旬の金土日の三日間、交通大学で中国物理学会が開かれ、構内で一番大きな講堂での全体会議を見物した。正面に中国物理学会二〇〇九年秋季學術會議と大書されていて、その下にたくさんスポンサー企業の名やロゴマークがあった。日本の物理学会では、こんなに目立つように寄付した企業名を掲示しないように思う。理解できない中国語を聞きながらスクリーンを見て、十分余りして外に出ると、建物の脇にこの建物の名と由来が掲示してある。名は「菁菁堂」。日

本の昭和大学の学長が来て、寄付によって建てたものだという。堂の名は『詩経』から来ていると。そういえば、オフィスのある建物に続く図書館は、米国在住の華人の寄付で建てられたと同じような碑に記してある。入り口両脇で獅子が迎える図書館の名にはその人の名がついている。寄付した人の名のついた橋もある。この大学には寄付によって出来た多くの施設があるのだろう。

去年自家用車でキャンパスを案内してくれた趙玉民さんが、わたしのオフィスの隣に移って来た。話し好きな人で、部屋の下見に来たとき二時間近く話して行った。自分はよい教師からよい教育を受けないで、日本に長く滞在し自分で勉強してきたなどと。独特の性格の人物。頼まれて、次の週に彼と彼の大学院生たちのために物理の話をした。日本に長く滞在したことがあり今も日本に行くことのある趙さんは、日本の原子核物理の研究で若い人の力が落ちていることを心配している。わたしは日本のシステムの脆弱化という言葉を使った。翌日大学近くの四川料理店で鍋をごちそうになり、また会話がはずんだ。一緒に仕事をしたそうなのそぶりも見せたが、今年の暮れ家内と母を連れて故郷に帰る予定で、物理はなかなか出来なくなるだろうと答えた。そのとき、母は非常に重いアルツハイマー

症だということにも触れる。英語力の無いわたしは、適切な言葉が分からずまた日ごろの苦勞から、「problem」という単語を使った。趙さんはわたしの言おうとしたことを理解した上で、穏当さを欠いた言い方と感じたのだろう、なかなかおろそかにできない返答をした。「**さん、あなたはわたしよりも年長だけれども、言わせてもらえば、親の世話をするというようなことがわれわれの人生だ」と。その忠告をありがたく受け止めた。

大学院生への話は断続的に進んで、われわれの手法で研究を始めることになった金君に、具体的な計算法を伝授していた。実践訓練用の課題を考えて計算プログラムを作り、彼がそれを理解して使えるようなところまで行った。孫さんは国慶節の連休にアメリカの家族のもとへ帰り、その足でハワイである日米物理学会の合同会議に出ると言う。

上海その二

上海歴史探訪

ある日、復興公園・孫中山故居記念館・周公館を訪れた。復興公園はフランス租界にあつて、元は中国人の入場が禁止されていたという。その痛みを偲ばせるように復興という名が付けられたのだろうか。公園に入ったのは十時頃。土曜日の今日は、東側の車の進入を禁じられた道路でもダンスを踊っていたが、公園内はやはりダンスをする人、コーラスに加わる人、太極拳をやっている人など、たくさんの人たちがいる。その上何かの行事の日らしく、血圧を測ってもらっている人などもいた。公園に入るとすぐ大きな二人の立像が右手に見えた。顔立ちからマルクスとエンゲルスだと知られる。一段高くなったそのあたりに人はいない。住民にはありふれた光景でしかないのだ。資本主義はやがて終焉すると予言した二人は、世界から資本が流入して急激に膨張・蓄積されつつある中国で、百五十年経つてもなお活動を続ける資本の本質を苦くかみしめて立っている。

公園から思南路に出て南の周公館へ。小さな建物だ。一九四六年七月から翌年の三月まで、周恩来がここに滞在して蒋介石と交渉に当たった所という。中国共

産党駐上海代表処。日本との戦争が終わって、中国の進路を探る交渉であった。その実他方で内戦の準備が進んでいる時期である。参観券には贈券と判が押してあって、無料で入館できた。一階の周恩来の執務机とベッドの置いてある部屋には、周恩来が二十年來使っていたというトランクが展示してある。洋服掛けには上着と帽子がかけてあった。その帽子は紳士然とした人をほうふさせるのにふさわしい。上海で渡り合った蒋介石と周恩来は、周が士官学校で校長だった蔣の下にあった時以來、因縁の間柄であった。西安事件で国共休戦に持ち込んだ周は、日中戦争時代の蒋介石政権の重慶にも駐在していた。蒋介石は、この難敵の紳士にてこずりながら、しかし一方で毅然さに敬意を払っていたにちがいない。周恩来は功業の人ではなかったけれども、二十世紀の偉大な政治家であった。激動の時代に世界の侮れない政治家たちと互角に渡り合った。

周公館という名は周公旦を思い浮かべせる。そういう意図から名付けられたのである。周の武王の弟は周王朝の礎を築いたが、周恩来も新中国の基礎を固めるのに貢献した。周公旦の子孫の国魯の孔子は、周公旦を聖人として顕彰した。そして新旧二人の周公は人品のよさというイメージを喚起する。周恩来が日本人捕虜・戦犯に中国人に行き渡らなかった米を支給したというエピソードは、あの

端正な風貌にそなわった品性を教える。彼の机と帽子を写真に収めて部屋の外に出ると、入り口に座って本を読んでいた若い女性二人が何か言った。しぐさを見ると、カメラで写真を撮ってはいけなかったらしい。しかしそれ以上はとがめられなかった。彼女たちは大学生で共産党の青年部に属するのだろうか。交通大学に来ていた日本人だと言ったら、「へー」というような顔をした。二階と三階は女性を含めた随行の人々の部屋であった。わたしがいる間ほかに見学者はいなかった。

今度は思南路を北に歩いて孫中山故居記念館へ。こちらは周公館よりも門構えも立派で館員も多い。門を入って行くと門衛が近づいてきて何か言うが、言葉が通じないと知って、入場券売り場を指差した。髪の毛の薄い老人が入ってきたので割引の効く人間と思ったのかもしれない。館入り口の孫文坐像を写真に撮った。するとさっきの人が近づいてきて手真似で写真を撮ってやろうと言うから、お礼を言いつて撮ってもらった。入館した最初の部屋には歴史的人物の印象深い史料が展示してある。清朝を打倒して三民主義の民国を建てるという意志が、「驅除韃虜 恢復中華 創立民國 平均地権」という書に表現してある。ここには中華思想がある

が、共和国を建てるということが表明されている。展示室を巡るとさまざまなものを目にするができる。

宣統帝溥儀が退位するという協定書もあった。清朝に出来たばかりの内閣制の総理大臣袁世凱が協定書に署名している。後漢の帝位の禪譲を受けた魏以来多くの譲位があったが、帝政の廃止が実現したのは二十世紀になってから。始皇帝以来の皇帝制度の終焉は、時代の流れとはいえ中国にとって画期的な出来事だ。遠い将来まで展望を開く大きな一歩だったが、辛亥革命後群雄割拠の情勢になると、袁世凱は大總統位を孫文から奪い、さらに皇帝位に就いたことを宣言した。孫文の開明との差は歴然としている。開明と権力欲は多くの場合異なるベクトルをもつようだ。「天下為公」という孫文揮毫の額が、現代中国の大小の権力を握る者たちとまた日本の政治家たちを射抜く。

この時代の中国の動きは興味深い。もっと知りたい。日本人の多くは中国を遅れていたと考えているけれども、小回りの効かない中国が国際舞台で後れをとっていただけなのかもしれない。経済と社会は、日本に比べて能率の点で劣っていたとしても、それほど違いがあったのではないのかもしれない。上海は東アジア

最大の交易都市だったろうし、文明に触れた多くの人々がいたのだ。隣の孫文・宋慶齡夫妻の住居は豪邸ではない。むしろつましく、瀋陽軍閥の張学良の邸宅とは違う。しかし文化的にとでも進んだ夫婦の住居であったことをうかがわせる。アメリカに留学した宋慶齡は賢夫人であった。当時の日本の日本の上流階級の人間と比べても、文明に触れて本当に身につけた文化人だったはずだ。

己丑の革命六十周年

国慶節の前日は小雨がちらついていた。日本からの寄付で建った講堂「菁々堂」へ、交通大学の人々が祝う前夜祭を見物に出かけた。正面上方に「祖国万歳」とあり、舞台前面上の横断幕に「隆重慶祝新中国建国60周年」と書いてある。学生と教師だろう、十足らずの出し物があった。詩の朗読、歌曲の朗唱、西方の衣装とスカートをつけた新疆の女子学生六人の舞踏、黒い衣装の別の六人の女性たちのモダンダンス、男女の紅軍軍服のコーラス隊とドレス姿のボーカルの歌、別の男女の歌など。新疆の女子学生たちの舞踏は、今年新疆ウイグル自治区で騒動が起きているから、意味を含んだことだったろう。最後に全員が立ちあがって、

舞台上の男女と祖国を称える歌を歌った。

これを見物して、人々が建国六十周年の高揚感にひたっていることを肌と感じた。中国の年の数え方で、六十周年は暦が一巡しためでたい年だ。一九四九年の革命が再び巡って来た己丑の年に大いなる成功を収めつつあることを、皆で祝福しているのである。よいタイミングに中国に来てその祝いの現場に立ち合うことができた。アメリカ住まいの長い孫さんが、明日はテレビで北京の祝賀パレードを見る、と言う。続いて雨の上がった会場の外、この日のためにまわりを広い花壇にして飾られた国旗掲揚台の向こう、思源湖のほとりで、盛大に花火が打ち上げられた。一つの大学の打ち上げる花火としては破格に盛大なものだ。すぐ近くで高く上がるのは、ほとんど頭上ではじけて大きく花開く。たいへん間隔を短く大量の花火を速射砲のように打ち上げるやり方は圧巻であった。何度も、何十頭もの龍が頭を振りながら昇っていく。今の中国の勢いを象徴している。

翌十月一日には、国慶節の祝賀行事をテレビで見た。午前八時から十時半近くまで続く長丁場。要人が天安門楼上に姿を見せると、高らかに「開始」が宣言されて儀式が始まった。静まりかえった中を、儀仗兵が足音をそろえて進み出て、

五星紅旗を掲揚する。続いて、国家主席・中国共産党総書記ならびに中央軍事委員会の長である胡錦濤が、オープンカーに立った姿で天安門から出てきた。車は、赤いじゅうたんを敷いた掘りの上の中央の橋を渡って、紫禁城南の東西を走る大道に出た。すると將軍であろうか同じように車に乗った人物が東側から進み出て何事が告げると、軍の命令権者である胡が答えて、閱兵が始まる。立ち姿の胡錦濤を乗せた車は、兵士が整列し戦車やミサイルが並べてある道を、東へ三キロメートル余り、昔の北京城の東の門があった所まで進んだ。途中何度か、最高指揮者は並んだ兵士たちに、はりのある大きな声で呼びかけた。閱兵が終わると、車は再び天安門に引き返し、今度は楼上から見物している市民に手を振る。

いよいよ軍隊のパレードが始まった。たいへんなエネルギーを注いで準備された大がかりなショウである。事前の番組で、兵士たちの行進の訓練が一年近く続いたことを放映していた。銃口の高さが揃っているか、銃口の間隔は等しいか物差しで測るのだ。目隠しをして行進する訓練風景もあった。兵士の身長も揃えられたのだらう。一糸乱れぬ姿勢と調子で、陸軍・海兵隊から海軍までの兵士、警察、軍事学校の十八歳の隊列などが続く。中には、長身の女性だけの部隊も二つあった（この映像を見た若い女性の中から大学生までが入隊を希望するといふこ

とが、あとで起きたそうだ)。さらに戦車隊・砲兵隊・機械化部隊・空挺部隊・海兵戦車隊・情報部隊の車輛が続ぎ、各種ミサイル・防空部隊、最後には核弾頭搭載の大陸間弾道ミサイル八基が整然と進んだ。今年初めて登場した新しい兵器もあるとテレビは伝える。パレードは四十分余り続いた。軍事パレードはモスクワ赤の広場で昔からおなじみだが、今年は中国が、世界の眼を意識しながら、特別盛大に軍事大国であることを誇示しようとしたのである。日本の右翼が唱える単純な敵対関係をとることが不可能だということは明らかだ。ここでは、毛沢東がアメリカの最新兵器を「張り子の虎」だと評した言葉をかみしめる必要があるだろう。

続いて、各種団体がパネルなどを操作しながら行進した。新中国歴代の指導者を想い出させるように、毛沢東・鄧小平・江沢民・胡錦濤の大きな絵に合わせて録音した声を流し、各時期のスローガンも掲げられている。共産党の役割を称える隊列もある。つぎつぎにくり出しえんえん一時間も続く。これらの隊列に加わることは一つの顕彰でもあるだろう、後続のお祭りの隊列の「だし」には功労者が乗っている。各省の隊列に対しては、五十六の民族グループの「和諧」を強調

するアナウンサーの声がかぶせられた。こちらのパレードは、世界に見せるためよりも国内の人民に見せるためにあるわけだ。

行進の後、諸航空隊の百五十機が上空を飛行した。爆撃機・ヘリコプター部隊・空中給油機などもある。最後にカラフルな煙を上空にたなびかせて五機の戦闘機が飛んだ。操縦士はみな女性ということだ。中国では革命期の歴史もあって、女性兵士に違和感が少ないのだろう。それがよいことかどうかは別として、新しいことを採用する点で中国は日本よりも保守的ではない。行進が続く間、人民広場のそばではパネルを操作して、スローガンなどつぎつぎに変えていた。百官を紫禁城内で謁見することや大軍の閲兵は、古代中国からの伝統があるのだけれど、近代的な大衆動員はヒトラーやスターリンが開発した。二十一世紀の発展した中国ではゆとりも出てきて、現代的なスタイルに変化している。今まで軍事委員会主席による閲兵は軍服を着て行なわれていたそうだが、今年の胡主席は黒い人民服を着ていた。象徴的にまだ背広ではない。しかし他の要人はみな背広とネクタイ姿。

このパレードが、人民共和国の強固さを誇示し、人民を教示し、組み入れ、統合し、功労者を顕彰するなど、さまざまな意図をもっていることが理解できた。

去年の北京オリンピック、来年の上海万国博覧会と合わせて、この三年は中国の歴史を画する時期であった、と後世に振り返られるだろう。

国慶節の夜の祝典もテレビで見た。初めによく構成された花火が打ち上げられて開始。第一部は各地のフォークソング。最初に新疆ウイグル自治区の歌。歌手もその生まれだろう、西方の血が濃い顔立ちである。次にチベット。今年・去年と少数民族の蜂起が起きたところである。三番目は朝鮮族。中国のアキレス腱である民族問題を、「和諧」という言葉で乗り切ろうとする政府の努力を示している。四部構成になっていて、その節目に花火が打ち上げられた。去年の北京オリンピックの祭典は関心がないので見なかったけれど、今年の祭典は世界史のページを飾る挿絵になるだろうと思いつながら見物した。要人や招待客は天安門上から見物していたが、フィナーレには楼上から降りて、道路上の踊りの輪に加わった。若い女性や子供たちと手を取り合って進み、ワルツの曲に合わせて踊る。演出ではあるが、その時は彼らにも笑顔が浮かんだ。最後に、天安門広場やまわりの建物から花火が今一度盛大に打ち上げられた。その華やかな光景を上空遠く

から映し出す映像は、一国が達成した隆盛を祝賀する。その残像の中でアナウンサーが、新しい六十年が始まるのだと語る。

十年余りこの上昇は続くのだろうか、その隆盛の利得はたとえば五十年続くのだろうか。歴史を振り返れば、唐・宋・明の繁栄を想起させる。四千年来この巨大なるつぼに流入した人間たちが継承してきた文明は今、ヨーロッパと現代アメリカの文明を吸収して、新たな盛期を迎えたのである。アメリカはそれに対抗するのに忠実な日本を必要としているが、その視線は中国に向いている。いつかそのことがはっきりした時、日本人は急に注意を中国の方に切り替えるのだろうか。そんなことはあってほしくない。過去にも現代にも日本の文化の深くにある中国の影響を正しく理解して、立派に対処すべきなのだ。他方で、近代中国が近代日本に負っているところもある。ヨーロッパ文明との格闘の中で得た経験で、日本は一步先んじている。人口十三億の中国に対し、日出ずる国として矜持をもってつきあう道があるし、それを目指すべきだと思う。

紹興に秋を尋ねる

滞在一か月金君と多くの時間を過ごして、わたしの使命は達成される見通しが

ついできた。孫さんがアメリカに帰っている間に近場のどこかへ行こうという話が出た。わたしは紹興を希望した。日帰りは無理なので、金君が同行して一泊することになる。費用を削るため彼と相部屋である。十月三日昼過ぎ、上海南駅発の「和諧号」で紹興へ向かう。上海を出た列車は広大な平野を進んだ。蘇州より東の平野は、長江と太湖の土砂の堆積によってできたものらしい。杭州に近づいた時わずかに低い山が見えただけ。呉のあった蘇州から杭州まで、境界となる自然の障害はないようだ。杭州の錢塘江が都を紹興に置いた越にとつての要害といえるだろうか。この全域に網の目のようにある水路が戦術的な要因となりえたかもしれないことを除けば、呉と越を分かっていたのは距離だと思われる。その隔たりが別々の歴史を形づくっていたのだろう。紹興の後背地にはあまり高くない山々があり、その山の終わった北側の平野の、飛び地のようにある丘を城塞として都市が発展したのだろう。紹興にも縦横に水路が走っている。

ホテルのチェックインを済ませて、ホテルのミニバンで魯迅故里まで行き、近くの観光案内所で、市内の見どころ全部の入場券がセットになったものを買った。百四十元のところが、国慶節後の連休中の割引で九十九元。郊外三か所へのバス

もこの期間は無料。閉門直前の魯迅故居へ入った。魯迅は初期ここで小説を書いたという。祖父の家が接してある。多感な時代に家が傾いたことは、作家の人間精神への鋭く深い洞察を育んだと推察される。やがて東北大学医学部になる学校への留学と、祖国の事態を見ての帰国も、重大な転機だったろう。ペンネームの魯が母親の姓だということを知った。翌日記念館で見た文の中に母に言及したものがあつたから、何かの思いが託されているのだろう。この故居は中流から上流の屋敷なのだろう。基本的に同じ四合院のプランで作られている。周恩来が幼児期を過ごした家もそうだった。知識人の家庭には書斎があり、書棚には歴史書などが入っていたのだろうか。あるいは、観光客のためにモデル的に歴史書の揃いが展示してあつただけなのかもしれない、魯迅や周恩来の育つた家とあれば似合ひであるけれども。

そこから人力でこぐ三輪タクシーで、市の中心部にある越王台へ行く。老人がわれわれ二人を乗せて、石畳の道を苦勞しながら進んだ。ところが、越王台は閉まっていた。小高い森になった丘を登ると越王殿というのもあつたが、こちらも門を閉じていた。しだいに暮色が濃くなつていく。帰途は傾斜地にせせらぎが造つてある公園風の散策路を通つて下つた。そちら側から見ると、越王台は改修中

であることが分かる。観光客でごった返す街中と違って、夕方のここには数人の人影しかない。わたしは散策路を歩きながら、越王勾踐と呉王夫差の物語を思い浮かべた。

夕方、沈園に行きそばにあるレストランで食べた。昔の共産党の活動の絵などが壁にかかっているから、それに関係していた場所なのだろうか。それとも、現代中国ではすでにクラシカルな雰囲気醸し出すそれらの絵は、ただ装飾用に利用されているだけなのだろうか。沈園に入って見て歩く頃には、快晴で美しい中秋の名月がしだいに上がってきた。庭園はぜいたくではないが落ち着いた造りだ。『地球の歩き方』に、南宋の詩人陸遊と折り合いの悪い母によって別れさせられた妻との物語が紹介してある。後年、再婚した元妻の唐琬とこの沈園で邂逅して、その心中を詩にして壁に書いたという。二人は従兄妹同士であったと金君が教えてくれた。幼少時に母を亡くした唐琬は陸遊と兄妹のように育てられたらしい。今は陸遊のその詩が石に刻んで置いてある。そして、唐琬が詠んだという見事な返しの詩を刻んだ石が並んでいる。紹興に生まれた南宋第一の詩人は、北の金に對して抗戦を主張する忠臣でもあったから、後世の受けもよかったであろう。二

つの詩は、同じ詩題・同じ形式で呼応し、美しく切々と取り返せない過去を振り返る。詩の題は「釵頭鳳」、二人の結婚に際し陸遊の贈ったかんざしを詠む。

ちょうど中秋節で、回廊の軒に絵や言葉を書いた提灯が吊るしてあり、それを見て巡るという趣向もあった。日本の同じような行事も、中国にその淵源があると見える。おおよそ観終わった頃、八時から、池の向こうに舞台をしつらえた野外劇場でナイトショーが始まった。短いショーが五幕あった。最初が陸遊と唐婉の物語。この地方の演劇を越劇というようだが、ここでは寸劇で、女性二人の役者が扮して歌い舞った。高く上がってきた名月の下で鑑賞するのだから、本格的な越劇だったらもっと味わえただろう。夜空には、諸葛孔明の発明と言われているほのかに赤い熱気球がいくつかふんわりと飛んでいた。

翌日、もう一度魯迅故里を見て、連休に合わせて紹興市が運行している無料バスで、東湖、会稽山、蘭亭を巡った。東湖では鵜飼をやっていた。こんな不思議な漁を考えついたのも広い中国のどこかなのだろうか。有名な会稽山は、予想とは違い、市南東の山々が始まるところにある低くて特徴のないありふれた山だった。夏王朝を建てた禹はなぜこんなところで「会稽の盟」をなしたのか分からない。

い。ここに禹の陵がある。社殿や周辺は最近新しく整備し直されたと見え、事績が真新しい石に彫られ、社殿にも描かれている。始皇帝もここまで行幸したということだから、説話は意味のあることだと人々が考えていたのだ。ともかく、金君の説明でも、中国人は禹を名目上の先祖と考えている。

いったん街に戻って昼食後、バスで三十分ぐらい西南へ走る。蘭亭。山に沿って川が流れている一帯のかなり広い土地に、諸記念物や亭などが配置されている。東晋の名流貴族である王羲之の別荘があった所。案内書によれば、勾踐がここに蘭を植え、漢の時代に駅亭が設置されて蘭亭と呼ばれるようになったのだと。右府將軍は、四十一人の客を招いて曲水の宴を開いた。瀟洒な遊びに参加した四十人足らずの人たちの作った詩の序を書いて「蘭亭序」。少し酒に酔って書いた書があとで清書したものよりも優れていたのだ、結局最初の書を採用した。書き直しのあるものだ。それが名声を高めて、書聖とあがめられるようになった。唐の皇帝が自分一人のものにするために墓にまで持って行き、真筆は失われたという話もすごい。バス停に戻る時、秋蘭を提げて蘭亭を辞する人を見かけた。

最後に市中の周恩来故居と記念館へ。周家も没落して周恩来は別の地で成長し

たのだ。わたしは瀋陽滞在中に、彼が瀋陽に居たこともあるということを聞いていた。天津で同窓だった夫人との間には子がいない。二人の写真は好ましい夫婦の姿を映している。別の一葉の写真が、時の総理であった人の養女が死に追いやられたという、「文化大革命」の狂気を暗示している。共産党員でもある金君に、建国時の指導者たちの中で誰が好きか訊いたら、周恩来という答えであった。秋瑾ゆかりの家へ行く時間は残っていなかった。

去年周荘へ案内してくれた徐さんがアメリカに留学したという話題が出た際にお礼のメールに詩を真似たものを添えたらお返しの詩が戻ってきた、という話をしていた。紹興を観光中にそれを想い出した金君が、詩ができないかとわたしをけしかけた。上海に帰った夜、彼の誘いに乗って漢字を並べ、案内してもらったお礼のメールに付けて送った。

Dear Jin Hua,

Thank you very much for having taken me to a trip to ShaoXing (紹興). I really enjoyed the trip. You suggested that I write a poem.

But I cannot make Chinese sentences. I can only put seven Chinese characters in four lines as follows.

「紹興尋秋、些排列漢字」

其一

蓬萊游子自海來
中秋閉門越王殿
名月皎皎虫奏樂
喜樂千秋夢中踐

其二

中秋月下座沈園
池前越劇生悲心
陸游唐婉詠心裏
月桂開花清香新

翌々日、返信が来て、詩が添えてあった。

Dear ***,

It is my pleasure to travel with you to Shaoxing. I am so surprised that you have a high level to write Chinese traditional poem. Although I am not good at poem, I try my best to write one to you by courtesy.

「与***老師游紹興」

盛世甲子逢佳節、魯迅故里喜相游。沈園蘭亭會稽悅，異邦師徒情誼留。

.....

中国語を話せない者が詩に似たものを送ったので、金君は幻惑されたようだ。発音と平仄を知らずに書くのである。中国語としてもおかしい点があるにちがいない。

上海その三

三峡を下る

連休後半に精励したあと重慶へ飛んだ。台風のため出発が遅れた中国国際航空の飛行機は東京から重慶へ向かう便だったことを、着いてから知った。タクシーで朝天門碼頭へ。日中戦争時代に蒋介石が内陸部深くに置いた首都は平野にない。小高い丘の斜面に多くの建物が建っている。長江はここでは大地を切り裂くように流れているのである。重慶地方は四川省から分かれた行政区になっている。名高い四川の霧で少し煙っていた。その霧が古い記憶を引き出す。昔、北京からラサに行くツアーに参加したのはよいが、軽い風邪をひいて高地へ行くのを差し止められ、成都に一人残されたことがある。幸い大したことはなかったので名所を訪ねた。諸葛孔明を祭る「武侯祠」と劉備玄德の墳墓、そして杜甫草堂のあった浣花溪である。初めての中国で独りタクシーを朝霧の中百五十キロメートル駆つて、峨嵋山へ行くという冒険もした。李白の詩選集を携えていて、「峨嵋山月半輪の秋」という句にそそのかされたのである。月餅の売られている初秋のこと。

蒋介石の別荘だったというホテルに泊まった。歸りにバスの便がなくて途方にくられ、筆談で交渉し貸し切りバスに乗せてもらおうという本当の冒険旅行だった。懐かしい旅を想い出しながら、乗船する船を探す。入場口で何か言われて二元払う。それは急な斜面を川岸へ降りる巨大な平行四辺形の乗り物であった。「長江公主」という船名から長江では格の高い旅客船と期待していた。ところが、この公主殿下はかなりお歳を召されている。

夜が明けると船は静かに朝霧の川の流れへ乗り出した。右手から濁流が流れ込んでいる。朝天門は長江と支流の合流点にあるのだ。四十人足らずいる旅客は三つのグループになって三人のガイドの案内を受ける。外国人には英語のガイドがついた。別に旅行好きのドイツ人グループがいてそちらにはドイツ語を話すガイド。説明によれば、重慶の人口は三千二百万人。中国で二番目に大きい。標高数千メートルから流れ出た長江は、重慶で海拔百八十メートル。重慶から三峡へ山の間をぬって流れているのに、こんな内陸部でそんなにも低い。日本の川とはまるで違う。三つの峡谷を経て平原に出る宜昌まで六百五十キロメートルの標高差は、わずか百二十メートルという。上海まで直線距離で九百キロメートルの宜昌

で海拔六十メートル。三峡ダムで海拔百七十五メートルまで水を溜めることができる。最大落差は冬の乾季に百十メートル。ダムにせき止められた水は、大雑把に言って、重慶までおおよそ水平面をなすのだ。長江はここで川ではなく、実態はとてつもなく長い湖に近い。三峡下りは溪流下りとは違うものになったのだ。

ダムができて多くの町や村が水の底に沈んだ。途中で寄る鬼城や巫山の町は、百メートル高い丘や山に引越したのだそう。今見えている斜面がちの場所に窮屈そうに建っている家々は、すべてこの十五年のうちにできたのだ。移住しなければならなくなった人の数は百万人を超える。大都市や各省への移住が勧められたようだ。政府はそれらの人々に、移住先に応じて補助金を支給したという。平均所得が少ないことがやりやすくしたとはいえ、他の国ではできないことだ。中国の経済進捗度と政府の体制がそれを可能にしたのである。その話に合わせてガイドは、二〇〇九年に全中国の農家の無税化と小学校の学費の無料化を実施したことも教えてくれた。実に大胆な政策を実施するものだ。

午前中に鬼城に上陸、観光。三峡のコースではここがちょうどよい上陸地点なのだろう。中国では名の知られているところか。近くに壁の大きな人面が長江を

見ている五階か六階の建物が見えた。鬼城を案内した男性の現地ガイドが、ホテルとして建てられたけれど今は無人だと説明した。なるほど建物は完成してなくて、窓もはめられていない廃墟である。鬼城のそばにもう一つゴースト宮ができたわけだ。現代中国には、一山当てようと観光事業に投資して失敗する人も出る。中国語の鬼はゴーストだが、その鬼の住む城は川から見える小高い山の上にある。建物は平凡でそれほどよいものではない。ただ、最後の頂上の本殿へ行く道の入り口に、この鬼城の全体を無意味にしようような、諧謔に富みまた深遠でもある対連が掲げてあった。曰く、「紅塵生涯原是夢、幽冥黃泉亦非真」。

昼食のとき、同じテーブルの紳士が話しかけてきたので、かろうじて、日本人で上海交通大学に滞在していると答えた。あとで英語で聞いたら、同じく上海から来たということ。しかしそれ以上話は進まず、次からは食事のとき会釈をする程度。割り当てられたテーブルには九人座って八人は中国人で、わたしは中国語の会話を分からぬまま聞いて、独りだまって食事をするようになった。その人物の連れは朝食のときスーツにネクタイ姿で来た。わたしはカジュアルな格好をしていたが、二人とも夕食にはネクタイ姿であった。なにしろ船長主催のバンケットというふれこみだったから。たしかにメニューを書いてテーブルに置いてあつ

たし、食前にはシャンパンで乾杯した。料理も中国式の晩餐でおいしかった。船長が挨拶をして、それを二人の通訳が英語とドイツ語にするという丁重さ。わたしは中国語の会話に参加できないから、他のテーブルの欧米人の箸遣いなどを眺めた。

夜、公主殿下の大広間でナイトショーが催された。三人の女性の踊りと歌、今度とはモダンなダンス。そして強力な男が胸に巻いた五本の針金を切って見せた。その前に、この船に乗り合わせて流暢な英語をしゃべる若い男の息子が、ホールにあるピアノを弾いた。クレードンマンの曲だったか。廊下で会った父親に、「あなたの息子さんは上手にピアノを弾いたけれども、何歳からピアノを始めたのか」と訊いたら、三年半ぐらいやっているという答えであった。司会者は北京から来た十二歳と紹介したが、今シドニーで暮らしているということ。父親の英語はオーストラリアに住んで鍛えられたものと分かった。一緒に来ている祖父が北京に住んでいるのだらう。現代中国人に多い一つの生き方である。

昨夜ガイドが明朝白帝城のそばを通過すると予告した。このツアーに申し込むとき案内文には参加者が多ければ白帝城に上陸すると書いてあったのに、それは

実行されないオプシオンなのだ。早朝、喫水が水を切る周期的な音で目が覚めた。李白の有名な詩に詠われた場所に行ってみたかったのに、船はそこから発つではなくただ通過した。劉備の没したという白帝城は、ダムで水かさの増した長江の中の小島になっている。船からは頂上にある建物はほとんど見えず、故事を偲ぶこともできない。兩岸の緑の山々が水に没する川に霧が降る中を、わたしの乗っている小さくない船は静かに滑るように進む。

巫山県に入って小さな遊覧船に乗り換え、小三峡と呼ばれる大寧河を上って行った。この河は陝西省から流れてきているとのこと。この合流点のあたりは七十メートル沈んで、山の上に町が新しく建設されたのだそうだ。人口数万の町が引越したのだ。河から見える家々はどうやって生計を立てているのかと思うほどの斜面にある。斜面の狭い土地に移った農家はその急な斜面を耕しているのだという。現地ガイドが、日中戦争のとき自分の父は日本軍の爆撃機を避けてほら穴に隠れたというエピソードを語った。非人道的な都市爆撃を、ナチス・ドイツが内乱時のスペインで実行した後に、日本軍も重慶に対して行なった。それが今の世代に語り継がれている。重慶を爆撃した日本もロンドンを空襲したドイツも、後に呆然とするほどのしつぺ返しを受けた。日本人はわたし一人だったが、

ドイツ人ツアー一行もいたから、爆撃という言葉をどのように聞いただろうか。日本人もまた、東京大空襲や広島・長崎への原爆投下を語り継ぎ、戦争というもの、の非を唱えなければならない。

操舵室近くの船尾に立っていたら操舵手とは別の男が近づいて、操舵室に招き入れて、お茶を飲まないか、コーヒーを飲まないかと親切にする。清潔そうでないので、持っている水でいいと断った。何か言いたそうだから、漢字で書くように言うと、自分の掌に「看日本錢」と書いた。だんだんうさん臭くなってきた。わたしが「我不持日本錢」と書いたら、残念そうにして何か出した。見ると、何枚かの小さな板を屏風のように連ねて、古風な春画が彫ってある。わたしは「不要」と言って買う気がないことを示し、タイミングを見計らって操舵室を出た。すると操舵手が口に指を当てて「言うな」というしぐさをした。楚の懷王が夢で神女に会ったという説話に関連付けてこういう品を売っているのだろう。巫山の神女のことを知ったのは、永井荷風の『断腸亭日乗』を読んだときのことである。その神女は、うすい霧雨の中、川面から切り立つ山の尾根に立っていた。ずいぶん高い断崖の上にあるから小さく見える。長江を行き来する人々の目にとま

り、話題にされるうちに話が膨らんだのだろう。ライン川のローレライよりもこちらの方が人里離れた深い山の中にある。森閑とした雰囲気は旅人の夢を一層そそのめるのだ。

三つの深い峡谷下りはほとんどそういう情景の中を行く。船中三日の旅の間をもてあます人もいる。麻雀の卓を囲む中国人がいた。西洋人の中には書物を読む人もいる。わたしは退屈することもなく船旅を楽しんだ。昨夜ナイトショーのあったホールの前方は大きい窓で、つぎつぎに眼に入ってくる前景を楽しむことができる。そこにある椅子に腰かけて景色を見つめたり、甲板を歩いてみたりする。また、興を添えるためにこの旅に携えてきた『杜甫詩選』の二、三篇の詩を読む。成都の草堂を棄てた杜甫は、家族を伴ってこの流れに身を任せ、結局その漂泊の旅の果てに死んだ。しかし、その境遇で詠んだ詩篇のなんとしみじみと美しいことか。一人旅の物静かな英国紳士と中国の印象について話をしたほかは、わたしは独り旅情に浸っていた。

四時半、三つ目の西陵峡の西の入り口にさしかかる。このあたりの深さは九十メートルという。五時半、広いところに出て一時停泊。六時、また出発。まもな

く三峽ダムに到着。暗くかすんでよく見えない。先ほど停泊したのは、ダム湖を降りる順番待ちをしていたようだ。六時半から始まった夕食が終わる頃に、船はエスカレーターに乗った。約百メートルの落差を五段に分けて降りる最初の水槽に入ったのである。水槽にはわれわれの長江公主と大きなコンテナ船と荷船が六隻も入った。入ると入り口の水門を閉じ、水を六分ぐらいかけて抜いて降り、次の水槽に入って行く。こういう仕掛けはヨーロッパ人にはなじみのはずだが、みんな物珍しそうに見ている。わたしも、船尾と船首を行ったり来たりして、進行を見届けた。壁についた水の跡からどれだけ降りたかを見上げると、およそ二十メートル。ドイツの川で水面の高さの違うところを船が通過するようすを見物したことがあるが、この三峽ダムの仕掛けは規模が巨大で圧倒された。この水路を建設するのに、ダムの北側の山を切り崩したのだ。一つの水槽は目測で二十数メートル×二百メートル（？）。ガイドの語るところでは、ダムは中国が自力で建設したが、この水路の建設にはドイツの技術指導を受けたのだそうだ。船は、四時間近くかけて五段のエスカレーターを降り、ダムの下の村の埠頭に停泊して朝を待つ。

目が覚めて村の方を見ると、老黄陵廟という廟がある。ここは観光客の多く訪れるところだから、きれいな建物だ。その村に上陸してバスでダムサイトへ。かなり離れた駐車場でバスをいったん降りてシャトルバスに乗って行く。嚴重な警備態勢がとられている。現代社会ではテロなどの攻撃を警戒しなければならぬ。しかも中国には、数十万人の自国民を犠牲にしてまで黄河の堤防を爆破して、要衝鄭州へ迫る日本軍を防いだ歴史がある。有事に際し三峡ダムを守るという考えが自然に出てくる。ダムの方へ突き出た北側の山塊の裾の、船のための五段の水路とダムとの間が、見学場所としてしつらえてある。そこに立つと三峡ダムの規模に改めて驚嘆する。堤の長さは二キロメートル。空気が澄んでいないから向こうの端はよく見えない。わたしはダムを背景にした写真がほしいと思い、同行のツアー客に撮ってもらった。それが、この旅で自分の写っている唯一の写真になった。

現地ガイドが説明する。一九九三年に工事が始まり、二〇〇三年に水を蓄えるようになった。工事に四万人が働いて、駐車場のあつたそばにはそのときの労働者のための宿舎が並んでいる。今も五千人ぐらい住んでいるが、将来は取り壊されるだろう。父親は、ここで働いてそのときの給料が月二千元であった、今は重

慶近くのダム建設工事に行っていて月給は三千元だと。現在二十八基の発電機があつて、さらに八基が設置されるという。

ダムサイトからは、五段階の水路を見下ろすことができ、船がつぎつぎにダムの下の水面まで降りていくようすを観察できる。わたしは先ほどエスカレーターという言葉を使ったけれども、見物場所のダムサイトのその水路と反対側の堤防付け根には、エレベーターも建設中だという。小さな水槽を思い浮かべてはいけない。エスカレーターで一万トンまでの船が通過でき、エレベーターでは五千トンまでの船を入れて一気に約百メートルを降りるのである。その水槽の広さは百二十メートル×八十メートル！。さまざまのデータがとにかく大きな数だ。ダム建設に付随して移住した人々の数から始まって、関係するすべてが巨大なプロジェクト。長い年月をかけてそれを遂行した人々の注いだエネルギーはたいへんなものだったろう。

西陵峡の残りの流れを下って、山地が終わるところにある湖北省宜昌のはずれに到着してツアーは終わった。余裕があれば武漢まで下って赤壁の古戦場を目に

したいところだけれど、しかたがない。蘇東坡の「赤壁の賦」を読んで埋め合わせよう。西安から来たという青年と白タクに同乗して宜昌の空港へ向かう。

短い滞在の終わり

大学に帰るとまた精励の日々が待っている。孫さんもアメリカから帰り、金君の計算課題を相談して、実行計画を立てた。趙さんから彼の大学院生に計算手法を教えてほしいと頼まれて、手助けすることもあった。金君は、交通大学のその大学院生が若くて優秀なので、研究が競合することを恐れた。世界中で自然科学分野での競争は激しいけれども、沸騰する中国社会での競争は一段と厳しいから、理解できなくはない。だが、心配するほどのことは起きないだろう。ともかく、ここでわたしに残されている時間はない。

滞在日数も残り少なくなった土曜日、孫さんが急に朱家角に行こうと言い出した。少し早いを送別のもてなしだ。去年行った周荘よりも大きな水郷である。ここも狭い道に多くの店が軒を連ねている。放生橋というのがある。すぐ近くに寺があり、魚の捕獲を禁じて放生を奨励していたようだ。その善行の真似ごとをす

る目的で、観光客のために金魚を売っていた。日本の放生会ではないやり方だと思ふ。細い水路を遊覧の舟が行き交っている。その岸辺の椅子に座って、出始めたばかりの蟹を食べた。もっと大きいものと思っていたが、食べられる身は多くはないのだ。これで上海名物の蟹を食べたことになる。途中で買った蛙も食べた。それから、課植園という名の屋敷と庭園を見物。清朝末期に献金をして位を得た人物が造ったもので、建築は一九〇三年というから新しい。一部は西洋建築だ。読書を課してまた農耕にもいそしむという意味で「課植」と言うのだそうだ。もう退職しているわたしが実践しなければならぬ生活ではないか。

わたしの使命はおおよそ達成されようとしていた。博士課程に入って取り組むことになった分野はなじみがないという金君のために、計算プログラムなどもあらかた作った。それを検討して発展させれば、わたしが去っても仕事を進めることができるだろう。孫さんがヒントを与えてくれた方の仕事も、論文草稿に着手していた。

滞在の終わりに一日、滞在の終わりに一日、列車で蘇州へ日帰り旅行をした。越の都紹興へ行ったから、呉の都も見物したかったのである。蘇州駅に着いた

ら、日本人と見た女性の客引きにしつこく勧められて、お仕着せの観光コースを回ることになった。越王勾踐に敗死した呉王闔閭が葬られた虎丘は、大したことはないと運転手に一蹴されて行けなかった。代わりに三国時代の呉の孫権が母親の恩に報いるために建てたという報恩寺に行き、北塔に登って蘇州市街を眺める。それから舟で水路に浮かんだ。船頭がこの水路をたどれば北京に行けると言う。そんなことができたらしいけれど、日本の観光客は赤いランタンの下がつた水路に案内された。蘇州の名だたる庭園のうち、観賞できたのは留園だけ。そして寒山寺。ここは中国人にも人気の場所とみえて、観光客があふれていた。張継の詩「楓橋夜泊」を刻んだ石碑の前は、記念写真を撮る人が順番待ちをするほど。あの名詩を落ちついて味わう雰囲気欠ける。世俗の生き方を嫌った寒山と拾得も辟易しているだろう。現代は、隠退している者でも、彼らのように飄逸の生活することが難しい。

第四章

上海二〇一〇年



三度の中国滞在もこれでおしまいという覚悟で帰国したわたしは、予定通り十二月に住居を故郷へ移し、いなか暮らしのリズムを探っていた。そういう三月初めに、孫さんからまた上海に來ないかというメールが届いた。介護制度の助けを得てわたしの母の世話をしている家内も「行ったら」と言う。しかし、日々の時間を過ごす構えは変わってしまっている。前回までのそれなりの任務の達成を、未練な行動をして台無しにしたくない。ためらいがあるということ、行くとしても金君の計算の完成へ助力ができるだけだろうということ、その目的に絞るなら来学期を待たずに一月ぐらいの短い滞在が適当だろう、と返事に書いた。同じ年度に再度のファンドは難しいだろうと思っていたら、了解を得たという知らせが來た。

二〇一〇年四月末、蝶は上海へ向けて飛んだ。

上海その四

世界博覧会の頃

金華君は、前回滞在した交通大学のホテルよりも費用のかからない宿舍を学外に見つけてくれていた。華東師範大学のホテル「教師の家」である。ところが翌日、上海世界博覧会のある今の時期このホテルには外国人を泊めることができないから、隣のアパート群の一室に移るように要請された。上海世界博の混雑を事故なく管理したい公安当局の指示のようだ。実際に世界博が始まると、バスで団体客が来てこのホテルに宿泊した。大人数の来訪者のために上海中の宿泊施設を工面することがなされたのだろう。宿舍から交通大学へはバスで通った。郊外のことでも各バス停には、世界博の期間の特別の措置だろう、案内人もしくは安全係がいて掃除などもしていた。ずいぶんの人を配置しているものと推察される。大学教員の金華夫妻は、大学から世界博の入場券を二枚ずつ支給されたそう。国を挙げてのお祭りが近い。

***様

四月三十日夜八時から十時まで、CCTVニュースという名に変わったチャンネルで、上海世界博の開会式典を観ました。胡锦涛主席は運のいい人ですね。北京オリンピック、中国建国六十周年の国慶節、そして上海世界博と、最も晴れがましい式典に国家主席として開会宣言をすることができたのですから。そういう気で見ると、その顔が福相に見えます。式典は、国際社会に隆盛の中国を印象付けるように、現代のさまざまな技術を駆使して、華やかに演出されていました。いくつかの国のエンターテイナーも登場しました。先頃の青海省での地震被害をこの場に取り込んで、チベット族の少年と少女が民族衣装を着て参加するという場面もありました。

屋内式典から屋外に移って、黄浦江兩岸でくり広げられた光の祭典は華麗でした。世界最大の液晶パネルをしつらえて動画を映し出し、花火とレーザー光線、光で照らされた噴水、二つの橋の手のこんだ電飾など、国の力を注ぎこんだことが分かります。浦江には、赤い浮き玉を並べ、それぞれ参加二百数十か国の旗を掲げたボートも行進し、中国人好みの大々的な祝典でした。日頃この種のショウ

にそれほど関心がないわたしは、二〇〇八年に蘭州から日本に帰った時、北京オリンピックの式典をテレビで見ませんでした。三年続いた三つの大式典は、昇り龍中国が自らの発展を確認し、他の国々にそれを示す歴史的な出来事なのだと思います。

古くから同じ文明圏にあって、先に近代化をなしとげた隣国の人間としては、追いつかれやがて追い越されるだろうことを思えば、一抹の悲哀を感じないわけにはいきません。しかし、摂政・関白の父や兄をもつ京都側最上層貴族に属する慈円が鎌倉武士団の台頭を受けとめたような、歴史に背を向けない冷静さを持たなければいけないでしょう。

滞在中に上海世界博に行ってみたいと思っていた。ところで、再び中国に来たことを瀋陽で一緒だった人たちにメールで報告したら、その中のKさんから今上海世界博の日本産業館にいと知らせてきた。中国で三年教師をしていたけれど、思い立って開封大学大学院に入学して民俗学を勉強することにした。今度の上海世界博の支援活動をする学生はその活動が学業として認められるので、日本産業館で中国の大学生ボランティアを統括する仕事に就いている、というのであ

る。五月中旬世界博の案内を頼んだら、一日仕事を休んで付き合ってもらえた。Kさんが日本産業館の上司に頼んでくれたおかげで、VIP待合室に招き入れられるという福徳を授かった。おいしい日本茶のもてなしを受け、芳名帳に筆ペンで署名までした。出費を惜しまず作られたであろう映像で、企業イメージを中国人に植え付けようとしていることが伝わる。日本人は日本が独特な土地だと思いがちだが、その映像の背景の日本の植生は上海付近と大きく違うわけではないから、成否は、独自の美的表現となっているか技術的な処理が優れているかどうかにかかっている。

上海世界博のシンボル中国館はポスターなどでしばしば目にしていった。赤い柱と梁の構造を古代建築からデザインしたと聞いていたが、下まで行くと想像していた以上に巨大なものだ。博覧会後にこの場に残された時、その巨大さが記念的建築物の機能美を発揮できるかどうか注目される。最初にメガネを渡されて見た三次元映像は、この二、三十年の中国の都市と生活の変貌ぶりを映し出し、中国の発展を印象付けるもの。次は、清明上河図を長くて大きいスクリーンに映し、絵の中の人馬が動くようにしてあった。中国の歴史の奥深さを示した後、次には電動の軌道連結車輛というモダンな方法で、種々の構造物の中を通り抜けた。そ

して中国各地の子供たちの絵がたくさん壁にかかった回廊を通る。中国の未来を託すということだろうか。さらに、二酸化炭素排出削減の方向性を与えるために、風力発電機と太陽光発電パネルや、藻類による植物性油生産の装置が展示してあった。中国はたしかに風力発電や太陽光発電などの分野に力を注いでいるようだ。

別の日街に出たおりに、バスのテレビ画面が、上海世界博の入館者の多いパビリオンの名を示していた。それによると、一・二位が日本館・韓国館だという。中国人の関心が日本にあるということはいずれのことだ。ところで、上海の地下鉄やバスは、各車輻に二台ぐらいの液晶テレビを備えていて、ニュースなどを流している。地下鉄駅のプラットホームにもある。日本にないほどの充実ぶりである。わたしの乗るローカル・バスにもそれがあり、乗降の案内は中国語のあとに英語でもやっている。バスの時刻表がなくて不便な一方で、世界博開催がこういう前進をもたらしたのだろう。

蝶の暮らし

去年船で長江へ入ったとき河口を見損なっていたが、金君がどこか近場へ案内しようと言うので、河口にある崇明島に渡った。上海の北には最初に長与島があり、そこへはトンネルでつながっている。崇明島へは長与島から橋がかかっている。霧が渡船の運行を妨げたので、タクシーでそのルートを走り、橋の上から念願の長江河口を見た。道すがら見た農家の八割がたは新しい家で三階建ても多い。日本のいなかの家よりも延べ床面積は大きいかもしれない。このあたりの農家の生活は、物価を考慮すれば、日本の生活に比べて劣っているわけではなさそうだ。海が見えると期待した崇明島東灘湿地公園は広大な葦原の中にある。まだ整備途上で、木々は植えて間もないようだ。レストランも十分でないのが一つしかない。しかもここまで公共バスが来ていない。中国の観光地で普及している連結電動カートで、「東灘：」と書いた巨大な石碑のある土手の上まで行ったけれども、霧がたちこめて海は見えなかった。ただ葦の原が遠くまで続く…。

ある日ダウンタウンに出かけて、おもしろい光景に出会った。人民公園の日よけのある通路の両側に、年齢や身長や収入を書いたA4ぐらいの大きさの紙がたくさん貼ってある。男性のも女性のものもある。結婚の相手を探して掲示しているようだ。何人か仲介の役目らしい人物も見かけた。現代中国でも、親が他家の適齢

期の男女を探すという習慣が衰えていると見える。一人っ子政策の影響も大きいと考えられる。男系の姓の存続はまだ関心事だから、ひそかな対処が行なわれていて、統計的に男性の数が多いことが影を落としていることだろう。ここで目撃した光景は、人の考え方や行動に、ひいては社会形成に目に見えないしかし大きな作用を及ぼすだろう。

滞在も半ばを過ぎた別の夜、洗濯物を片付けているとき、CCTV11の「空中劇場」がおもしろそうな京劇をやっていることに気付いた。「宇宙鋒」というタイトルで、始皇帝亡きあとのあの奸臣趙高の娘が主人公。有名な悪臣の名を借りた劇なのだろう、娘の名は艷蓉となっている。父が政略結婚を図り、娘を政敵の息子匡忠に嫁がせる。しかし艷蓉の舅は趙高に加担せず筋を通そうとする。結局趙高に罪を着せられて処刑され、夫の匡忠にも追手が差し向けられるが、身代わりが切られたのを利用して、いつも艷蓉のそばにいる賢い啞の乳母の機転で逃れる。ここから艷蓉は黒に近い濃紺の喪服とおぼしい衣装で、短くした髪にかんざしも挿さない姿で登場。舞台に置いてあるのは卓と椅子だけ。その演出はかえっ

て女優の容姿を際立たせる。役者の演技力の見せどころなのだ。若い女優だったが、見事に演じ美しかった。

艷蓉は父に、匡家の遺族への処置を寛大にとどめる上奏文を書かせる。そこへ忍びで来た二世皇帝が、艷蓉の美貌を見染め、後宮にさし出すように命じると、父はその命令をむしろ喜ぶ。ところが艷蓉は、狂人になったふりをしてその命令から逃れようとする。二場の長いクライマックスだ。女優は、底に湛えた嘆きの表情の上に狂女の笑いを浮かべ、さまざまな姿態を演じる。二世皇帝の前に引き出された艷蓉は、さらに危機的な場面で、狂女を装いながら、前帝の時代の国の繁栄に比べての現在の悪政を痛烈に批判する。それは、群臣に鹿を馬と言わせるほどの権勢を誇る悪宰相の父を批判することでもある。皇帝は兵士に成敗させようとするが、艷蓉の必死の演技が勝って、それを切り抜けて終演。この場面の悲痛さは、観客を感動させずにはおかない。

このような女優の演技の立ち勝る京劇を観たあとには、近代中国が女形をやめたことが賢明であったことが知られる。人形浄瑠璃でも大いに感動できるのだから、女形が普通であった時代にはそれで観劇は楽しめただろう、劇は尋常でない場面で人間を照射するのだから。しかし、一度女優の舞台を観れば後戻りはでき

ない。ひるがえって日本の歌舞伎を見れば、それが守旧的だと判る。歌舞伎は限られた家系の俳優が重要な役を独占している。女形をやめて一旦女優を導入すれば、演技が優れ容姿のいい人が求められるのは自然の勢いだ。そうすれば、特定の家系の人々による役の独占はくずれるだろう。現代の歌舞伎界は、経済基盤としての家業を守ることを第一の原理としていると言える。日本の社会に根強いこの種の家元制度は、人間の習慣性と社会の許容度がそれを許すのだ。そして、能のような、ひょっとしたら観客を多く得られなくて、経済的に成り立たなくなるかもしれない芸能が、一定水準で継続できるようにしたのである。

わたしは成算なくこちらに來ただけでも、計算を収束に向かわせるアイデアが浮かんで、去年に続いての幸運を天地に感謝した。しかし、こういうことがまたあると思っではならないだろう。一点問題が残るけれども一区切りつけるべき段階だと思う。

孫さんが知人を連れて昼食に行くところに出会って、わたしも誘われて一緒に会食したことがある。一九四六年生まれのアメリカ在住の物理学者である。退職したら中国のどこに住もうか迷っているという。杭州などはいいですねと誘い水

を向けたら、あそこは家の値段が高すぎるという返事だった。孫夫人も今は息子のいるシカゴにいるけれども、将来アメリカと中国のどちらに住むか決めかねている。多くの中国人がアメリカなどに渡り永住権を得ているが、終の棲家をどこにするか頭を悩ますことになる。孫さんの知人は中国東北地方のハルピン出身ということだった。その話によれば、第二次大戦後のハルピンには白系ロシア人がたくさんいて、小学校のクラスにもいたという。朝鮮族と少数の日本人もいたということだ。ロシア人は人口の二十パーセント近くいたが、中国とロシアの関係が悪くなったとき、中国政府が多数のロシア人が居住することを望まなくて、それらの人々の多くが南米に移住したそうだ。ロシア革命から逃れた白系ロシア人はさらに別の土地へ移らなければならなかったのだ。東北地方の日本人残留孤児の問題が最近まで尾を引いていたけれど、政治と戦争とに翻弄された他の民族の人々もそこにはいたのである。

変遷する歴史の中で

金君は、以前からしきりにどこか行きたいところはないかと訊いた。わたしは、

今回は遠出をする時間がない、しいて言えば中国の旧都のほとんどを訪れたけれども南京が残っている、と答えていた。やがて、南京には彼の奥さんの両親がいて春節などの休みにはよく行くから、案内しようと提案された。この計画は、問題の個所がほとんど解決してあとは微調整だけになった最後の土曜日に、日帰り旅行として実現した。

ツアー・コンダクターは最初に中山公園へ連れて行った。孫中山の墓の規模は、近代人のものとしてはたいへん大きい。近代中国の「国父」に対して民国政府は大きな計画を立て、設計も多くのプランを募集して選んだようだ。建設に数年かかり、一九三一年に完成したもの。碑楼から上の斜面に広くて長い階段があり、門は中国式の建築。歴代皇帝に比するほどの陵墓を建設しようとしたようだ。遺体はふたに故人の仰臥した像を彫った石棺に入れてあり、丸天井のドームに安置してある。パリのナポレオンの墓所に似た西洋風の様式を取り入れたのだ。門に渡してある石の扁額で、上海の中山記念館で見た故人の筆になる文字が、「天下為公」と語りかける。金華君に、政府諸官の中にこの言葉が必要な人があるのではないかと問いかけてみた。遺体のある建物に入り口には、三民主義として知られた「民権」などの三つの文字が掲げてある。共産党政府も、近代中

国の父として孫文を大切にしているようだ。現在の政府が近代中国の正統な後継者であることを示す意図があるだろう。金君も学校でこの墓所のことを習ったと言っている。

ところで、孫文夫人宋慶齡はこの陵に合葬されていない。年少の宋慶齡は孫文死後も立派な同志で、共産党政府になっても丁重な扱いを受けた。しかし、歴史の渦中であって人間の事象を多く見た人は、今も政治的な意味をもつこの大きな墓域に墓をつくらなかった。その人は、自らの希望で空から散骨させた周恩來の事例も見えていた。八十八歳の最後まで理知的な女性であったと言えることができるだろう。

バスで山麓の中山門まで下る。南京博物院は大急ぎで観たので、十分楽しめなかった。インターネットで調べたところでは、院と名付けられた博物館は北京と南京だけということ。玉器や磁器をはじめとする文物がある。しかし宝物というほどの最上級のものはないようだ。中華民国の時代にもなかったのだろうか。わたしの予習が足りない。さらに歩いて地図に示してある明故宮を目指す。その途中で、中華民国政府跡があるのに気付いた。列車で買った地図をよく見ると、も

つと西の方には総統府があったようだ。この付近が南京の政治上の中心部だったのだ。一九三七年に南京を陥れた日本軍は中山門から入城したらしい。今われわれの歩いているこの道を行進したのだろう。期待はずれだったことに、明故宮というのはただの跡地にすぎなかった。基壇上に大きな礎石があり、そこに立派な樓門などがあったことは分かるけれども、皇帝の宮殿などは跡形もない。朱元璋の功業の跡はないに等しい。彼が多数の息子たちを各地の王に配して国家の安定をもくろんだ意図も、遺族の争いのためにここでは潰えたのである。

玄武門に戻って地下鉄で南京駅へ。中国名「侵華日軍南京大屠殺遇難同胞記念館」という戦争記念館へは行かなかった。初め金君と相談した時その名も挙げたが時間がないだろうということで省かれた。結局今回の旅は、時間が足りなくて下見旅行のようなものになってしまった。それでも、わたしの希望だった歴代の王朝の古都を訪ねるという第一の目的は達成された。昔中国で都だったほとんどの地を踏んだことになる。ついでに成都と瀋陽を加えるのは許されるだろうか。ともかく、最後に近代中国の首都にも来た。帰りの列車は現代の中国を走る。車窓から蝶は、長江をまたぐ揚州―鎮江間の長大な橋を見た。行きには、新たに建設中の高速鉄道の高架橋も目撃したのだった。

遅く上海へ帰り着いて地下鉄に乗ると、世界博に出かけた人も多くて座れなかった。すると、青年がわたしの肩を叩いて座らせてくれ、自身は立った。礼を言つて座つたけれど、自分が年寄りになったことを知らされた。自分ではまだまだと思いがちだが、若い人から見れば立派な老人なのだ。いつまでも今やっているようなことを続けることはできない、淡い夢から覚めなければならぬ。老齡を直視して、賢明な道があるだろう。

南京から帰つた翌日の日曜日、最後の散歩に、宿舍の向かいにある華南師範大學構内へ入った。ここは交通大学よりも小さいが、やはり大きなキャンパスだ。きれいに整備してある。抽象化されたあずまやの中央に石のベンチがあつたので、そこでサンドイッチを食べた。見るとその向こうに大きな石碑がある。名付けて桜花園、その下に日本岡三証券集団と彫つてある。日本の会社の寄贈で造園されたのだ。桜やつつじなどのほかに多種の木々が植えてある。黄楊の黄色味を帯びた若葉がまばゆい。そこからさらに散策し、師範大学の西門を出て優雅な名の蓮花南路を横切れば、上海交通大学の東門がある。

***様

今日は今度の滞在をしめくる最後の日曜日なので、広大な上海交通大学のキャンパスを歩きました。前身の南洋公学を設立した時の光緒帝への上奏文が、東大門に、横幅ゆうに十メートルを超える大きな石刻の文章にして公示してあります。字面を追っていくと、「日本維新…」という文字があり、次に「日本明治初元鹿島馬関戦屢失利諸藩皆擇遣藩士…」という文も見えます。上奏の年は一八九六年と説明版にあります。それが日清戦争で清が苦い敗戦を喫した年の翌年だと気付いて、パルスが一つわたしの神経回路を走りました。そこにある馬関の文字は、清の高官たちに強い印象を与えたに違いありません。敗戦の講和条約を結んだ地です。その馬関＝下関で三十数年前に日本の一つの藩が英仏米蘭の四国連合艦隊に敗北し、また鹿児島も英国艦隊の砲撃に苦渋を嘗めて、日本の現状を悟った諸藩は青年たちをヨーロッパに送り出し、それらの人々は維新後の近代化に尽くしました。そのことを明記して、敗戦した中国が有為の人材を育てる必要を説いているのです。南洋公学の後身である上海交通大学が、この由緒を大きく公示して、人々にその精神の銘記を求めています。

この文章を読んで感慨に耽りながら歩きました。今中国は、長い紆余曲折を経て、その成果を達成しようとしているのだと思います。この大学をはじめ、最優秀の学生たちが米欧の大学院に留学しています。その数は日本の比ではありません。すでに各界で、世界的視野を持った若い人たちが活躍しています。日本にもたしかに世界を知った多くの人たちがいます、特に専門領域に関しては。しかし実行される諸施策を見れば、大局的に世界の猛者たちと渡り合えるほどの広い見識を持った人は少ないのではないか、と思わざるをえません。物真似の側面の強かった明治の人たちの方が、よく学びもつと闊達に行動したのではないでしょう。経済人は経済競争に関して奮闘しているのでしょうか。しかし、政府や民間の人々の見識は狭く内向き過ぎるように思います。日本の外のことを本当によく知っているとは思えません。おりから自民党政府が倒れ、新しい政府ができましたが、一般的状況として、諸機関がよく機能しているとは思えないですね。清の光緒年間と違っていいのでしょうか。近い将来に日本人がこの文章をかみしめなければならぬ日があることを恐れます。いや、すでに今それをしなければならぬのではないのでしょうか。……

長々と書きました。月日は速やかに去り、あさつてには帰国します。

いつの間にか夢ともうつつとも分かちがたい状態の中で、蝶は自分が再び海を東へ戻り、波間に浮かぶ流木の上に翅を休めていることに気づいた。その流木は峨眉山から流れ出た橋の欄干だったのだろうか……

あとがき

二〇〇七年から四年間毎年短い滞在をくりかえして、あわせて一年ほど中国に滞在する機会を得た。自由を求めて大陸に渡ることになった状況ときっかけについては序に記した。退職しての新しい生活の中で中国滞在はやはり新奇なことであつた。日々の体験とそこから思いめぐらすことが、消化不良のまま身の内に降り積もる。疲れて早く床に就くので十分に時間もないまま、長い間の習慣から雑記帳だけは日々記録を続けていた。他方で、中国滞在中に読書から離れてもいけないと考えて、二〇〇八年の蘭州で読んだ本の中にT・E・ロレンスの『知恵の七柱』があつた。アラビアのロレンスの精力的な活動が、日本語訳で三巻になる長大な文章につづられている。詳細に出来事を語りながら、臨場感あふれる風景の記述に加えて、生と死や人間存在についての深い考察まである。その記憶力と筆力に舌を巻いたのに、それがかえってわたしの中に紀行文を書くという考えを密かに植え付けたようだ。ところでわたしは、リービ英雄の中国紀行文に興味をそそられていた。日本に帰って単行本になった『延安』を改めて読んで、作家の

文章が一つの独自の世界を創り出すことに感心するばかり。わたしに分不相応な考えは芽吹かなかった。

ところが二〇〇九年に上海に出かけて、雑記帳は分量を増す。さらに二〇一〇年にもまた上海に滞在して、中国が新しい時代を画そうとする時期を目撃したのだと思ひ当たる。再び、中国滞在記が書けないだろうかという考えが頭をもたげた。二〇〇九年暮れにわたしは、人生に区切りをつけるつもりで故郷での生活を始めた。模索の中で、何か対象をもって日々を暮らしていくのでなければ、江海に住まう志は本当に夢に終わるだろう、と思ひ至る。中国滞在の経験は得難いもので、文章にするのはあながち無意味ではないだろうと考えるようになった。それを日々の作業の一つにすることにした。わたしの雑記帳は日録でもあるから、そこに書きなぐってあることを拾い集めて文章にするのである。二〇一一年夏、コンピュータ上に私家版ができた。

他方、世界では、中国のGDPが日本のそれを追い抜き、また東日本大震災が起き、さらに日中間に危険な対立が発生して、日本と中国が世界史の中で取り結ぶ関係が新しい段階に入ったことがはっきりしてきた。そういう中にこのささや

かな滞在記を書物にできたらと夢見たが、機会もないままである。去年の秋になって、潮出版社がノンフィクションの文章を募集していることを知って応募することにした。旅人の情緒が薄められるけれど募集規定に合うように分量を減らし、文章を練り直してこの縮約版になった。人に読んでもらえるほどのものだろうか。

二〇一四年三月

谷川 修

後記 電子書籍にするにあたって

この書き物は、二〇一四年第二回「潮アジア・太平洋 ノンフィクション賞」に応募して、候補作にノミネートされたものである。しかし、紀行エッセイはノンフィクションとしては力が弱く、受賞に至らなかった。四人の選考委員の評が、雑誌『潮』二〇一四年一〇月号に掲載されている。

二〇一八年五月

中国滞在記 海蝶大陸へ渡る

2018年5月

著者 谷川 修

発行所 白江庵書房

〒759-4106 山口県長門市仙崎 710

hakkoanshobou@gmail.com

